

# イナズマイレブンIN王牙 転生者の記憶

Balu

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

これはイナズマイレブンの世界に転生した男…黒野零くろのれいの物語。

しかし、彼は神のイタズラにより、王牙学園のある未来へ転生する。

「ああああもうやだあああああ!!」

果たして彼は王牙学園が雷門と戦う未来を変えられるのか!?

そして、彼は円堂守、ブロッコリー先輩に会えるのか!?

注意、主人公はホモじゃないです。

注意、作者のハートは硝子です。酷いことは言わないでくださいお願いします何でもしますから（何でもするとは言っていない）

注意、更新は不定期…かも。

注意、ブロッコリー先輩は出ません（無慈悲）

## 目次

### Memory 王牙学園入学まで

第一話：始まり	1
第二話：じやけんサッカーしましょうね	4
第三話：はえくすつごいおつきい：（体が）	13
第四話：あのさあ：才能って何だよ（哲学）	21
第五話：ボール返してください。オナシヤス！	31
第六話：じやあぶち込んでやるぜ！	40
第七話：なぜ女なんだ：？（VS天馬は永遠に）	49
第八話：いいよ！来いよ！（VSグラフィア・ドメイン）	61
第九話：ダイナモ感覚と天使（VSグラフィア・ドメイン）	72
第十話：（チートじみた能力は）ないです（VSグラフィア・ドメイン）	85
第十一話：すみませんゆるしてください！何でもしますから！	97
第十二話：当たり前だよなあ！	106
第十三話：お願いします！アアアアアアア！	118
第十二話：ちよつと待って！いなりが入ってないやん！（VSブラックテトラ）	127
第十三話：ちゃんとサッカーしろく？（VSブラックテトラ）	136

# Memory 王牙学園入学まで

## 第一話：始まり

目覚めるとそこは真っ白な世界だった。

真っ白と言うなら雪景色と想像する人はいるかもしれないが雪じゃない。

ただただ真っ白。純白。無色。上も下も前後左右もだ。

「どこどこだ？」

「…ここは生と死の狭間だ」

「っ！誰だ!？」

振り向くとそこには一人、少年が立っていた。明るい色のバンダナを頭に巻いており、サッカーのユニフォームを着ている。

なぜサッカーのユニフォームと分かるか…それはソイツの格好がある人物とメチャクチャ似ていたからだ。

「円堂…守…?」

ソイツは一瞬キョトンとした顔になるがすぐに何かを察したようだった。

「ああ。君には僕がそう見えるのか。だが間違いだ。僕は円堂守じゃない」

ソイツは一息おいて続ける。

「僕は神だ」

「…そうか。じゃあ俺は…」

「察しがいいな。そう。君は死んだ」

水晶玉が目の前の空中に出現する。そこに映っていたのは俺の葬式の景色だった。クラスメイトや親戚が集まっている。と、水晶玉はそれを見せるという役目を終わると同時に消えた。

「死を実感させるために見せたが気分を害したならすまない。だが、基本ここに来る人間には自身の死を理解させなければならぬ決まりだね」

「いや、別に大丈夫だ」

「さて…本題に入ろう」

再び神は間をおいてから言った。

「君は異世界転生の権利を得た」

「…待ってくれ。異世界転生ってあの異世界転生か？」

「逆に聞くが他の異世界転生があるかい？」

「いや、でもなんで俺に？」

しばらくの沈黙。神はそのまま下を向いた。

「…世の中には知っちゃいけないことがあるんだよ。少年」

「…まさか、あんたの手違いで俺死んだ？」

「ま、まさかー。ソナコトナイデスヨ」

マジかこのヤロウ。というか手違いからの転生とかテンプレすぎイ！

「はあ。…もういい。分かった。…で、転生先はどこだ？」

「おや、思ったよりあっさりした反応だね。普通ならキレると思うが」

「もう起きたことは仕方がないだろ。まあ、この世にあまり未練はないしここでお前にどうこう言っても俺は生き返らないだろ？ だって認めるしかないさ。ところで質問に答えろ。転生先はどこだ？」

「逆に君はどこに転生したい？」

どうしよう。モン●ンの世界とか言いたいけど神様（どこからどう見ても円堂守にしか見えない）の姿が言っている。イナズマイレブンにしろと。

…とりあえずモン●ンって言うてみるか。

「モン●ンで」

「…すまない。耳が遠くてね。聞こえなかった。で、どこに転生したのかな？」

「モン●ンのせか「ああ。ごめんごめん。耳が遠くてね。で、どこに転生したいかな？」…」

「ブラッドボ「どこに転生したいんだい？」…イナズマイレブンで」

「よしよし。奇遇だね。僕もイナズマイレブンがいいと思ってたんだ」

ブチ●ろすぞ…と心の中で叫ぶ俺を気にせず神はにこにここと笑っ

ている。

「君はイナズマイレブンについてどこまで知ってるかな？」

「イナズマイレブン3までは知ってる」

「そうか。じゃあ好きな作品は？ファイア？ブリザード？それともスパ「ジ・オーガだ」…マジ？」

神は突然怪訝な顔つきになる。

「君は本当にジ・オーガが好きなのか？」

「…ええ」

神は後ろを向くとしばらくブツブツとまるで誰かとひそひそ話でもするかのようになにかをしゃべっていた。

…何かおかしいのか。別にジ・オーガが好き人多いと思うんだけど。だって映画までやってたんだぞ。円堂めっちゃかつこよかつたぞ。正直あそこで雷門メンバーとともに王牙学園と戦って見たいぞ。

神はしばらくしてからこちらを向いた。

「いいよ。君をイナズマイレブンの世界に送ろう」

と同時に俺の体が少しずつ薄くなっていく。このままスーツで消えるのか。意識も霞んでき始める。

イナズマイレブンの世界に転生か…。

円堂や豪炎寺、風丸、壁山…彼らと語り合えるのか。

きっと沢山の戦いが待っているだろう。

世宇子、ジエネシス、リトルギガントとか色々。

まあ、言えることは一つだけだ。

「…やったぜ」

そして、俺は意識を手放した。

## 第二話：じゃけんサッカーしましようね〜

円堂守と一緒に戦える…と、思っていた時期が私にもありました。まず、転生先のおうちについて言おうか。

まあ、当たりだ。両親が政府関係の仕事に就いてるエリート。母親に至ってはそこそこテレビで見るとような政治家の一人だ。

そんな俺も将来は国一番と言っているほどの名門校に行かせてあげると母親は言っていた。

そんな俺：黒野零くろのれいは今：円堂守の時代から八十年後にいます。

「ふざっけんじゃねえぞおおおおお！あのやろおおおおお！」

俺はメチャクチャな広さを誇る自室で叫んだ。

神！お前イナイレの世界っていったら円堂と一緒に戦っていくつてパターンに決まってるんだろ！なにさらつと王牙学園sideに送ってんだよボケエ！

円堂カノンと一緒に戦えばいいって？言ったよ！雷門らいもんがいいですって言ったよ。そしたら母親は

『いい？あなたは国の将来を背負う人間なの。雷門なんかに入ったら他の子に遅れをとっちゃうわ。王牙学園おうががくえんでならきつとあなたの才能を役立ててくれる』

あああああもうやだあああああ！何で王牙学園なんすか！?

せめて王牙学園以外にしてくれと言ったら

『ダメよ。だって他の学校にはヒビキ提督がないじゃない』

HI☆BI☆KI！ふざんけん！円堂を潰すとか絶対無理なんすけど。だって俺にとっちゃ英雄なんだぞ！円堂守は！

…というわけで俺（十歳）は悩んでいるんです。はい。

そんなある日、母親が俺に外出しようと言ってきた。なんか知らんが綺麗なドレスを着ている。俺もなんかすごい高級そうな服を着せ

られた。

専属の付き人が車を運転するなか、後部座席に座っていた俺は隣の席に座る母親にどこに行くのか尋ねた。

「私の先輩の議員さんの息子がね、今日誕生日なの。その子も王牙学園の入学試験を受けるから、あなたに会わせてあげたいと思ってね」

「俺は王牙学園に入りたくない」

「…零。どうして王牙学園が嫌なの？」

「ヒビキ提督って人がなんか…やだ」

ヒビキ提督：王牙学園を設立した人で円堂守を潰せと命じた男だ。まだ出会ったことはないが、映画からあまり良い印象は感じていない。この世界ではかなりの有名人であり、テレビでもよく見かける。世間の人々からは英雄扱いされており、すごい人物であることは分かるんだけど…。

「ヒビキ提督は素晴らしい人よ。昔はこの国の内戦はひどかった。たくさんの方が死んだわ。その大半を沈静化させていったのがヒビキ提督なの」

「でも…俺は…」

「奥様。到着しました」

付き人が俺の言葉を遮る。目の前には俺の家の何十倍も大きい豪邸があった。

会場はとても広く、豪華なものだった。美しい装飾が施された沢山のテーブル、豪華な料理、でっかいシャンデリア。

会場だけじゃない。招待客も豪華だ。芸能界の大御所、今話題のスポート選手、ノーベル賞をとった化学者、大企業の社長…。クソッ！ペンと色紙を持ってくればよかった。

俺は母親に連れられて一際豪華なテーブルまでつれてかれる。

その席に座っていたのはドレスを着た女性と十歳くらいの軍服のような服を着た少年だ。…ん？こいつどっかで見たことあるような



…?

「今日は誕生日パーティーに招待していただきありがとうございます。スリード議員」

母親がお辞儀をすると女性は立ち上がったて軽く会釈する。

スタイルいいな。母親もかなりの美人だがあちらも負けてはいない。

「そんなに礼儀正しくしないでいいわよ。…黒野さん。この子は…？」

「ええ。うちの息子の零です。うちの子もそちらの息子さんと同じ王牙学園を受けるので仲良くしていただけると嬉しいのですが…」

「あらあら。それは嬉しいわ。バダップ。こっち来て」

先程の軍服のような服を着た少年を席から立たせて、俺の目の前に連れてくるスリード議員。

「零君。うちの息子のバダップよ。ほら、バダップ。挨拶は？」

目の前の少年にとって、俺は初対面だが、俺はこの少年を知っている。とかいなかイナズマイレブンファンなら大半が知っている人物だろう。実質、イナズマイレブンでは最強の敵だからな。

バダップ・スリード。ジ・オーガの事実上のラスボスで円堂守にサッカーを捨てさせるために未来から送られてきた刺客だ。まさか、ここで会えるとは。

「俺、黒野零。よろしく！」

「…くだらん。戦場で敵と馴れ合うとは」

…え？今こいつなんて言った？普通の子供なら絶対に言わないよ？そんなこと。

「え？あの…バダップ君…？」

「フツ。バダップ？戦場を前に名前など意味をなさん。殺るか、殺られるかだ」

こいつ何言ってるんだ？困惑する俺にバダップママが話しかける。

「ごめんなさいね。バダップは夫の影響でこのしゃべり方が好きみたいな。…バダップ。普通にしゃべりなさい」

「黙れ。戦場において…普通にしゃべりなさい」…ごめんなさい」

バダップママの強い語気に圧されて涙目になるバダップ。…なんだ、普通に子供っぽい。

「俺はバダップ・スリードだ」

「改めて…黒野零だよ。よろしく」

「ちよっとお母さん達は少し用事があるから、バダップ君と仲良くしてるのよ。では、スリード議員。行きませうか」

「ええ。バダップ。いい子でいるのよ」

そう言つて、俺の母親とバダップママはどこかへ行つてしまう。残される俺とバダップ。

しばらくの沈黙ののちにバダップが口を開く。

「黒野君は…王牙学園に入るのか？」

「零でいいよ。母さんから薦められてるだけであまり俺は行きたくないんだけどな」

「何でだ？」

「ビビキ提督にいいイメージが持てなくてね」

「ビビキ提督はいい人…のはずだ。会ったことはないが」

「そうなのか？俺はあまりよく分からないよ。ところでさっきのしゃべり方つて…」

「父上の真似だ。…父上は偉い人で…かつこいいから…」

「とつても痛いぞ」

「そ、そうか…（ちよっとショック）」

「俺は今のバダップの方が好きだな」

「…まさか零は…その…男が…好きなのか？」

「待て待て待て待て！そういう意味じゃないから！」

「冗談だ。冗談…でも、好きって言われたのは…嬉しい」

「おっそうだな」

「食べるか？美味いぞ」

「腹減ったなあ…（答えになつてない）」

俺はテーブルの上の料理に手をつける。ミートソーススパゲツティだ。とてもいい香りがする。

まずは一口。こ、これは…

「メチャクチャうめえ！」

なんだこれ!? 某漫画的例えをするなら今までのスパゲッティは全部ゴムと言っても過言ではないくらい美味しい。

そんな興奮している俺を見て笑うバダツプ。

「ふふつ。だろう。いっぱい食べてくれ…ちよつとまで。君はテーブルマナーを知らないのか？」

「あ、すまない。こういうところに来るのは初めてで…」

「そうか。教えようか？」

「ああ、いいつすね〜」

パーティー会場で俺とバダツプは色々な話をした。好きなこと、嫌いなこと、楽しかったことや悲しかったことを。

「隣の部屋にお客さん達が持ってきてくれた誕生日プレゼントが置いてあるんだが、一緒に見に行かないか？」

「待てよ。これはお前が主役のパーティーだろ？ いないとまずいんじゃない…「いいんだ」…え？」

急にバダツプは悲しそうな目をして、下を向く。

「このパーティーは俺のためのものじゃないんだ」  
「…」

「母上は総理大臣の候補だ。だから、色んな人がやって来る。皆の目的は俺じゃなくて総理候補の母上だ。だから、俺はいなくていいんだよ」

「そうか。確かにたかだか子供の誕生日パーティーにしてはスケールがでかすぎる。」

ここに来ている招待客の目的は将来の総理候補に媚を売ることというわけだ。きっとここはバダツプにとっては居心地が悪いに違いない。

「…分かった。一緒に行こう」

そうして俺とバダツプはパーティーが行われている部屋を後にした。

隣の部屋には招待客が持ってきたプレゼントが沢山あった。すごい山だ。大小様々なラッピングされた箱が部屋の中に山積みになっている。

バダツプは目を輝かせながら俺の方を向いた。

「…開けていいか？」

「分かった。ただし、後々ばれないように戻しとけよ」

ここで俺は止めるべきなのだろうがプレゼントの中身に対する好奇心の方が勝った。

バダツプは山積みになっているプレゼントから一つを手取る。丁寧にラッピングを剥がしていくと、ラッピングされていたのはティーセットの箱だった。

…どう見ても子供に向けて送られたプレゼントじゃない。

「これは母上が前から欲しいって言ってたティーセットだ」

「と、とりあえず他のも見てください」

「うん…」

ティーセットの箱に丁寧にラッピングをはりなおしてから、別の箱のラッピングを慎重に剥がす。

今度は銘菓の箱だった。見たことあるぞ。…よかった。これはバダツプのために用意したものとみたいだ。

「よかったなバダツプ。これ結構有名な和菓子だぞ」

「…違う」

「…え？」

「これは一回開けたあとがある」

鋭すぎイ！バダツプは箱を慎重に開ける。入っていたのは…ところ狭しと敷き詰められた沢山の札束だった。

「…！」

「はは…」

バダツプは膝をつく。箱が床に落ちて札束のいくつかが床にこぼれる。

「やっぱりだ…。皆にとって俺は…母上の付属品なんだ」

「いや、そんなことな」「ある!!」…」

「このプレゼントを見ろ！俺のためのものじゃないじゃないか！皆、結局は母上に自分のことを売り込むためにこのパーティーに参加したんだ！」

「…」

「俺なんて本当は存在する価値なんてないんだ。俺のための誕生日プレゼントなんて…ここにはないんだ」

「いや、ある」

「え…?」

俺はあるものをバダップに見せる。バダップが目丸くする。

「それは…サッカーボール？」

「プレゼントの山の中にあつた」

「…」

「確かにバダップのことをお母さんの付属品と考えてる連中はいるだろう」

「…っ!」

「でもな、お前のことをそういう存在としては見てない人もいるんだ。お前を一人の人間という存在として見てる人がいるんだ。このサッカーボールをくれた人のように。俺だってその一人だ。だから、それ以上落ち込むな。お前には俺がいる」

「…零」

「で、何処だよ?」

「?」

キョトンとした顔をするバダップ。俺は続ける。

「さすがにあるだろ。庭だよ。庭」

「庭ならあの扉の向こうだが…わわっ!」

バダップの腕をつかみズルズルと引きずっていく。思ったより軽いな。

「○×△□!？」

何か言ってるが無視してそのまま庭に出る。もう夜だが、バダツプの家の光が庭を照らしているため、あまり暗くはない。

俺は右手で引きずってるバダツプを放すと、左手に持つてるサッカーボールを置いた。

「な、何をするんだ？」

「サッカーだ。せっかく貰ったんだしいっぱい遊ぼうぜ。それじゃあ」

俺はボールを蹴った。

「じゃけんサッカーやりましょうね〜」

まあ、そんなに上手くはいかなかったけどね。

生前はサッカーは上手い方だったが転生してから初めてのサッカーのせいか、全然うまくいかない。

バダツプもそうで、互いにドリブルもままならず、シュートなんてとんでもない方向に飛んでいく。

もはや必殺技どころじゃなかった。

でも、それはとても充実したサッカーだった。

「ハア、ハア、ハア…」

「ハア、ハア、ハア…」

もう俺達はくたくたで芝生の上に寝転んでいた。汗だくで気持ち悪いが、そんなのどうでもよかった。

「どうだ?…面白かったろ?」

「ああ!…楽しかった!なあ、零」

「…何だ?」

「またいつかサッカーをやろう!」

その後、俺達はサッカーボールを元の場所に戻して何食わぬ顔でパーティー会場に戻っていった。

もちろん互いの母親に怪しまれたけど。

パーティーが終わり、帰りの車に乗り込む。

「どう？楽しかった？」

母親が聞いてくる。俺は答えた。

「うん。とても楽しかったよ。後さ、母さん、俺……」

「王牙学園に入ることにするよ」

### 第三話：はえくすつぐいおつきい…（体が）

おうががくえん  
王牙学園には入学試験がある。

そもそも王牙学園は将来的には国の要職につく人間や優秀な兵士を育てるという目的を元に設立された学校だ。

当然将来的にそうなりそうな人間を厳選してから入学させる。そのため入学試験である。

そういうわけで俺、黒野零くろのれいはバダップとともに王牙学園中等部の試験を受けに王牙学園に来ていた。

「緊張してるか？零」

「いや。緊張なんてしてないよ。ところでバダップ」

「何だ？」

「どんなに実技が難しくても気にするなよ。お前が出来ないなら皆が出来ないんだから」

「フツ。ならこう言おう。筆記がどれだけ難しくても気にするな。零が解けないなら皆解けないからな」

あのパーティーから二年…俺とバダップはちよくちよく会うようになり、サッカーをやったりしていた。

だが、サッカーだけじゃない。俺達は王牙学園の入学試験の対策もしていたんだ。

たまたま、俺は勉強が得意（まあ、そこそこ名門の大学に入ってるし）でバダップは運動が得意だったのも互いの欠点を穴埋め出来ていた。

俺達は王牙学園の敷地内に入る。校舎の入り口には王牙学園の教員達があり、受験生達の受験票を確認している。未来でもやっぱ受験とかはアナログなんだなあ。

受験票の確認が終わり、校内へ入る。王牙学園に上履きはない。校舎内は土足でOKだ。

試験は筆記と実技で二つある。筆記はいわずもがな実技は体育だ。優秀な兵士になれる才能を計るにはやはり体育が一番なのだろう。

「あの角曲がってしばらく歩いたところが俺達の教室だな」



「合格できるといいな」

「ああ。そうだ…つてうお！」

角を曲がった瞬間誰かとぶつかった。俺は尻餅をつく。

「いてて…誰だ!? 気を付けろ…よ…?」

俺とぶつかったのは…ギラギラした目をした強面の大男だった。鋭い犬歯が口から覗いている。ゴーグルを少しずらしてつけており、まるで第三の目があるみたいになってる。つよそう。

はえ…すごいおつきい…。

ぶつかった相手は俺を睨み付ける。

「人にぶつかったといてそういう態度か? オラア! なめてんじゃねえぞ!」

「センセンシヤル (『すみませんでした』と早口で言った)…」

「ああ!? なんつった!」

!!  
相手は俺の胸ぐらを掴む。あああもうやだあああああああ

その時、バダップが俺の胸ぐらを掴んでいる方の腕を掴んだ。

「おい…俺の友に手を出すな…!」

…すごい殺気だ。ぶつかった相手は俺から手を離し一歩後ろに下がる。

「な、なんだよ、お前…元々文句を言ったのは向こうだぞ! 常識的に見て謝るのは向こうじゃねーか! (震え声)」

「先に手を出したのはお前だろ…!」

不味いな。ヤバイ空気だ。今にも殴りあい勃発しそうな空気。周りの受験生達もこの空気を察知したらしい。

「な、なあ…」

「やばくね? 先生呼んだ方がいいんじゃない?」

だが、バダップとぶつかった相手は周りの奴等が見えてないのか睨みあっている。その時だった。

「やめろ! ザゴメル!」

俺がぶつかった相手…ザゴメルと呼ばれた男の肩を一人の少年が掴んだ。

「…エスカバか。何の用だ?」

「お前、他の受験生とはトラブル起こすなどあれほど言ったのに何やってんだ!」

するとザゴメルは俺を指差して言った。

「先に文句を言ったのは向こうだ!」

「そんなくだらないことで喧嘩して試験取り消しになってもいいの  
よ!」

「っ!」

ザゴメルの肩がピクツと震える。それをエスカバは見逃さない。

「教室に戻れ!」

「…分かった。…おぼえてろよ。テメエ」

ザゴメルはエスカバの言うことに従う。最後に俺を睨み付け捨て  
ぜりふを吐いて自分の試験の教室へと戻っていった。

「まったくアイツは…。俺の友達がすまないな。ええと…」

「俺はバダップ・スリード、こっちは友達の零だ」

「そうか。バダップ、零、本当にすまない。あいつはキレると周りが見  
えなくなっちゃうんだ…怪我はないか?」

「俺は大丈夫だ。零は? あいつとぶつかったはずだが」

「無傷だからへーキへーキ!」

「よかった…」

エスカバはそつと胸を撫で下ろす。

エスカバ: エスカ・バメル。王牙学園のFワードだ。ゲームによると  
ぶちギレやすい選手って書いてあったはず。まあ、映画とか漫画では  
それらは死に設定と化してたけど。

そして、さつき俺がぶつかった相手こそ王牙学園のGゴールキーパーのザゴメ  
ル・ザンデだ。イナイレ3のゲームでは能力値的に最強のキーパー  
だった。『オメガ・ザ・ハンド』の秘伝書を円堂じゃなくてザゴメルに  
使った人もいるはずだ。

「受験生! 廊下にはいないで早く教室入って! あと五分で始まるよ!」

「おっ! そろそろか。じゃあな、バダップ、零。合格することを祈って  
るぜ」

監督の先生の声を聞きエスカバは教室へ戻る。

「じゃあ行くか、バダップ」

「ああ」

俺達も教室へと入っていった。

まあ、簡単だったよ。いくら名門校の試験といえども所詮は小学生のための試験。大学まで卒業してる俺にとっては簡単だとはつきりわかんかね。

「零。どうだった？」

「まあ、満点だろうな。結構簡単だったし」

「…そうか。俺も合格点くらいはとれてそうだよ」

いや、お前はぶつちぎりで合格だろ。王牙学園最強に将来的になるんだから。

「どうだった？お二人とも」

そこにエスカバとザゴメルが教室へ入ってくる。エスカバはこやかに笑っているがザゴメルは俺に対する殺気が半端なかった。

「俺も零もいいが、エスカバは？」

「俺も合格ラインには届いてると思うんだけどな。あんまり自信がないぜ」

嘘つけ。お前は頭脳派だろ。

「この後は実技試験だな」

「もうすぐ校庭に出ろって放送があるだろうな」

筆記が終わっても油断は禁物だ。王牙学園の実技試験はかなりキツイ。毎年、合格確実と言われても落ちるやつらがいるくらいだ。

実技テストは男女別々に行われる。基本的にランニングしたり、個々の運動能力を見るテストだが、このテストのために全受験生が体を鍛えているのだ。このテストで出る、身体能力値の平均はとてつも

なく高いらしい。

「へまは出来ないな…」

『今から、実技テストを行います。生徒の皆さんは校庭へ出て下さい』

「始まるか」

実技試験の始まりを告げる放送がなる。俺達は教室を出る。そのまま校舎から出て校庭へ向かう。

実技テストは普通に進行していく。

握力とか反復横飛びとか色々やっていく。ぶつちぎりでバダップがさまざまな活躍を見せた。周りの受験生だけでなく試験監督の先生方も目を擦ってたり口をあんどりと開けてた。

うん。バダップは合格してるだろうね。これでアイツが受かってなかったら合格者0になるわ。

どうやら実技は去年とほとんど同じのようだ。若干変わったのは反復横飛びの時間が二倍になり、100メートル走が、200メートル走になったことだ。

最後の1500メートル走を終えて俺は地面に座り込んだ。

「ぬわああん疲れたもおおん！」

「はいはい。よく頑張った」

エスカバが背中をポンポンと叩く。だが、エスカバも相当疲れたらしく背中を叩いた後、すぐに大の字に寝転ぶ。俺は水筒をガブガブ飲む。周りも似たような状況だった。ただ一人…バダップを除いて。

「情けないな。二人とも。この程度でダウンしたら優秀な兵士にはなれないぞ」

「お前がおかしいんだよ！周りを見てみる！」

「そうだよ（便乗）」

涼しい顔をしたバダップにエスカバが突っ込む。それに便乗する俺。

そこに一人の男が現れる。

「ハア、ハア、ハア…」

ザゴメルだ。ここまで、実技では握力やソフトボール投げなどのパ

ワ―系の種目においてはザゴメルは圧倒的な記録（それでもバダップには届かないが）を叩き出してはいたものの、他の分野の種目では散々な状況だった。

この1500メートル走も平均よりも若干遅いはずだ。

「ハア、ハア、ハア：クソッ！」

膝をついて地面を叩き悔しがるザゴメル。胸ぐら掴まれた時は頭にきまずよ！なんて思ったが今は可哀想に思えた。

俺はザゴメルに近づこうとする：がそこをバダップが止めた。

「止めておけ。今、お前や俺が話しかけてもいいことはない。あいつの悔しさはあいつにしか分からないんだ」

「：：そうだな」

『1500メートル走は終了しました。受験者は校庭の試験監督のもとに集まってください』

試験監督の先生がスピーカーで俺達を呼ぶ。

「行くぞ。ザゴメルには悪いが俺達は本来蹴落とす蹴落とされるという関係の敵同士なんだ」

「：：ああ。そうだな」

バダップが走っていく。俺もそれに続いた。

「えつと、とりあえず、受験者諸君。我々からの実技試験はこれで完全に終わった」

眼鏡をかけたがたいのいいマツチヨの試験監督の先生が試験の終了を告げた。

それを聞いた受験者達は安堵したのか少しだけ空気が緩む。

そのために少しだけ辺りがざわざわとなる。

「静かにしろー話はまだ続きがあるー！」

：：何だ？まだ続きがあるのか？もう試験終了の報告で試験全てが終わったんじや：？

「この後、引き続き実技試験に移る！十分間の休憩後にまたここに集合するように！」

…フア!?まさか、『我々からの実技試験は完全に終わった(完全に終わったとは言っていない)』とかいうパターン中のパターンか!?まさかお前はホモなのか!?こんな言葉を使うなんて貴様はホモに違いない!

「あ、あの…」

受験者の一人が恐る恐る手をあげる。

「何だ?」

手をあげた受験生は皆の気持ちを代弁する。

「あの…実技試験はさつき終わってたって言いましたよね? (正論)」

「ああ。終わったよ。我々試験監督からの実技試験はな」

空気が再びピキリという音を立てたかのように張りつめる。

…ヒソヒソ話が聞こえる。

「どういうことだよ…」

「試験監督以外に誰が試験をするっていうんだ…」

その空気に試験監督の先生は耐えられなくなったようで

「ええい！俺にもなんでかは知らん！とにかく！十分後に！ここに！集合するように！終わり！閉廷！以上！皆解散！」

わめき散らして俺達の前から去った。

受験生達は困惑していた。そりやそうだよ。俺やエスカバだってもちろん、バダツプですら困惑してるもん。

「…どういふことか分かるかバダツプ?」

「いや、さつぱりだ。だが、試験監督が知らされていない以上何かしらとんでもないことが起きるかもしれない」

バダツプですら分からないのか。こりやあヤバイな。何か恐ろしいものの片鱗を味わうことになるかも…。

「零もバダツプもそんなに気にしなくていいんじゃないか?お前らを見てるとなんでか知らないけど二人とも合格できていると思うんだが」

エスカバの言うことにも一理ある。俺達の思い過ごしなら助かる

が…。

そんな中だった。ザゴメルが校舎に向かって歩いて見ているのを見たのは。

あいつまさか…！

「ごめん！バダップ！エスカバ！ちよつと俺行ってくる！」

「そうか。気をつけろよ」

走る俺の背中にエスカバが叫ぶ。

「十分以内に戻って来いよー！」

「分かってるー！」

俺は必死に校舎に向かって走る。

ザゴメル！もしも俺の予想通りなら…それは絶対にしちやダメだ

！

#### 第四話：あのさあ…才能って何だよ（哲学）

筆記試験が行われていた教室で俺…ザゴメルは自分の荷物をじっと見つめていた。教室には電気がついていないが、差し込む夕陽が教室を照らしており、そこそこ明るい。

やれる努力は全てやった。体も必死で鍛えてきたし、勉強も周りよりも多くやったと断言できるくらいはやったつもりだ。

だが、それは王牙学園の合格を勝ち取るには足りなかった。

「…やっぱり俺じゃ無理だ」

俺は軍部の中ではエリートの両親を持っている。同じく軍部の両親を持つエスカバとは両親同士の繋がりでも知り合った。

だが、エスカバを見ればすぐに分かるのだ。

自分が天才とは言えないことに。

エスカバには超人的な頭脳がある。試験中に知り合ったバダップには超人的な運動能力がある。もうこの事については努力とかでは埋めようのない差がある。

すなわち才能だ。

自分にはそれが無い。

何でエスカバみたいに出来ないの！という感情を滲ませた両親の顔を思い出す。

両親を見返すためというべきか、そのために王牙学園の試験を受けた。だがダメだった。

パワーなどに関しては才能があるとは思ってはいた。だが、他の受験生達はパワーなんかよりも遥かに良いものを持っている。

もういい。これ以上ここにいる意味がない。試験監督によればまだ試験はあるらしいがこれ以上受けても不合格に違いない。

実技試験中に持ってきた水筒と実技試験中に着けていた受験番号のプリントされたゼッケンを鞆の中にしまう。そして、チャックをしめようとする…その腕を何者かが掴んだ。

「!？」

「何してんだよ…お前」



黒野零くろのれい。バダップと一緒にいた受験生。ぶつかって喧嘩になりかけた奴だ。

「…どうでもいいだろ」

「よくない。少なくともお前がいなくなったらエスカバが心配する」

「…」

「お前…途中退席するつもりか？」

「ああ。そうだよ」

「…」

「俺には才能がない。王牙学園に受かるために必要な力が足りないんだ。諦める方が賢明だよ。最後まで受験して無駄に両親に期待させちゃ、退席するよりももっと深く失望させてしまおうしな」

しばらくの沈黙。いつの間にか掴まれていた腕も放されていた。鞆のチャックをしめ終える。鞆を背負う。後ろから黒野が声をかけた。

「ちよつとまで」

「何だ？」

「あのさあ…」

『才能』って何だよ？（哲学）王牙学園に合格するためには才能があればいいって思ってたんのか？」

「…そうだ。俺にはそれがな「あるだろ」…」

「少なくともお前はパワー系の種目じゃバダップさえ除けばぶつちぎりのトップだったはずだ。何かの種目でトップを取れるってその時点で凄いなぞ」

「…」

「事実、俺は多分、どの種目でも真ん中よりちよつと上ってだけでそんなに凄いわけじゃない」

「…だから何だ？」

「まだ諦めるなよ。俺の見立てじゃお前はまだ十分合格する可能性がある。それに…ここで諦める方がカッコ悪いと思うぜ？」

「けど…落ちたら失望されるかもしれない」

「まだそんなこと言ってるのかお前」

黒野は俺の鞆をひったくるとチャックを開けて中から俺がさつきまで身につけていたゼッケン（115番）と水筒を取り出す。

「そんなの…ある英雄の言葉を借りれば…」  
「？」

「『1000回失敗したら、1000回起き上がる。10000回失敗したら、10000回這い上がる』だ」

「…」

「今までいっばい失望させたかもしれない。でもそれがどうした？1001回目に挑戦すればいいじゃないか」

…ああ。気づいた。彼が何故、バダップの隣に立っていられるのが。俺と何が違うかが。

こいつは…諦めなかったんだ。何度も何度もバダップに負けても諦めずに這い上がったんだ。

「あとそれと…才能以外にも大切なものはあるぜ」

「何だそれは？」

「こゝろこゝろ」

こいつは左胸のあたりをゼッケンと水筒を持ってない方の手で叩く。

「？」

「おいおい。ハートだよ。ハート」

何言ってるんだこいつは。

「…フッフッフ」

やべえ。つぼった。ハートっていつのスポ魂漫画だよ。

「ハハハ！ハハハハハハ！ハートときたか！そんな非科学的なものを言うとはな！」

「悪いかよ。諦めてるお前よりは遥かにまじだぜ」

「確かにそうだ！ハハハハハハ！」

「ククク…はっはっははははは！」

「ハハハハハハハハ！」

しばらく俺達は笑った。笑い終わると黒野は手に持っていたゼツケン等を差し出す。俺は黒野が差し出した、ゼツケンと水筒を手にする。

「行くぞ、零。時間がない。もうすぐ十分経つ」

「おう！行くぞ！」

教室を出る。そのまま校庭へと急いで走る。

「ハート、…ハートか。…うん、悪くないな」

やっぱり途中退席しようとしてたな。ザゴメル。よかったよ。間に合って。というかここでザゴメルが退席していたら歴史的小かしくなってたんじゃない。

ひよつとして俺が転生したことで物語にある種のバグみたいなものが発生してるのかもしれない。多少は警戒すべきだな。

というかよくよく考えると王牙学園は雷門との試合の後、最終的にどうなるんだろう？先のこと考えてなかったなあ。

そんなことを考えてる間に集合場所にたどり着く。確かバダツプ達はこの辺にいたはず…おつ。いたいた。

「悪い！バダツプ！少し遅れた！」

「遅いな。何してたんだ？」

「まあ、気にしないでくれ」

「なあ、見ろよ。あれ」

エスカバの指差す方を見る。そこには…

「あれは…ヒビキ提督？」

「ああ。俺も初めて見たぜ」

王牙学園の設立者にして、政府の上位の職についているこの国の英雄と名高い男…ヒビキ提督だ。

この男を生で見て、思ったことがある。

…強い。間違はなく。ただの小太りのおっさんだと思っていたが違う。静かな水面の中に潜んでいるメガロドンのような殺気を感じる。何を言ってるか分からないと思うが俺も分からなかった。

とにかくヤバイ。ただ者じゃない。それは受験生全員が理解しているだろう。足がガクガクする。冷や汗が頬を伝う。

「さて…十分が経った」

ビビキ提督がそう言うと同時に、溢れ出る殺気が収まる。

「誰一人として逃げ出さないというのはさすがだ。今年の受験生は豊作だな」

いや、本当にお前は何者だよ。お前一人で雷門のメンバー全員倒せるところと思うんだけど。

「さて…試験監督の実技試験は終わった。ここからは俺が実技試験の監督を務める」

…こんなやつが考える試験は間違いなくヤバイ。バダツプと俺の予想が的中しちゃった。

「戦場において最強の兵士とはいかなるものか…お前達に分かるか？

…おい。そこのお前。答えろ」

「は、はいっわた『はい』だど?」…っ!」

とてつもないレベルの殺気が放出される。殺気を当てられた受験生は腰を抜かしてその場に座り込む。…いや、気絶したぞ。後ろ向きに倒れて泡食ってる。

なあにこれえ?あ、忘れてた。ここ超次元だから当然か(無理矢理納得させる)。

「余計なことを喋るな。お前らは馬鹿みたいに俺の質問に答えればいい。次はお前だ」

ビビキ提督はエスカバを指名する。エスカバはまるで軍の上官に言うかのごとく叫ぶ。

「高潔な精神!戦士としての誇り!これこそ最強の兵士の条件だと思えます!」

「そうか。次はお前だ」

今度は次々に受験生を指差す。

「相手のことを完全に分析した者こそ、最強の兵士だと思います！」

「完璧な作戦を立案できる者が…」

「最強の兵士とは裏をかく能力が…」

何人かの答えを聞いたヒビキ提督は深いため息をついた。

「残念だ。どいつもこいつも解答がありきたりでつまらん」

「…」

「いいか。お前達の言うことを総合すればサバゲー世界チャンピオンやノーベル賞の学者、将棋の竜王が最強の兵士ということになる。頭がいいだけで最強の兵士にはなれん」

しばらくの沈黙。わずか数秒のことだっただろうが俺にとってはとても長い時間だった。

唐突にヒビキ提督が叫ぶ。何故叫ぶ!?

「最強の兵士とは！己の肉体を駆使し！敵を蹂躪し！なぎ倒し！破壊する！そう。圧倒的な肉体言語こそ最強の兵士の条件だ！」

「俺からの試験は一つ！己の肉体を使って受けてもらう！」

「お前達には腕立て伏せ、腹筋、スクワットを合計1000回やってもらう！」

…今なんて言った？桁が一つ多くないかい？というか…。

これ本当に小学生への試験か？

ヒビキ提督はその後、細かいルールを説明する。それによれば、

①腕立て伏せ、腹筋、スクワットを合計1000回行う。

②ヒビキ提督のかけ声に合わせて一回ずつ行っていく。かけ声に着いてこれなくなった者は監視している試験監督達が指示した時点でそこで脱落。脱落した時の回数に応じて実技試験の得点が加算される。

③他の筋トレに切り替えてもよい（例えば、腕立て伏せをやった後にスクワットや腹筋に切り替えてもいい）

「以上が今回のルールだ！」

俺はバダップとのトレーニングを思い出す。トレーニングメニューにはもちろん筋トレもあった。だが、1000回が最高だ。そこから先は考えたこともなかった。

他の受験生達も困惑している。つい十分前の『終わり！閉廷！以上！皆解散！』以上の衝撃だ。

『どうした。さっさと散らばれ』

ヒビキ提督の声に俺達受験生は校庭のあちこちに散らばる。俺とバダツプ、エスカバにザゴメルは互いの声が届く範囲で散らばった。

だが、俺達はもちろん、受験生達の顔色は良くない。ついさっきまで1500メートル走ったり、色々忙しかった。それが終わってふーっ、となつてたところにこれだ。正直言つて1000回いく奴はバダツプしかないかもしれない。

『では、始めるぞ！』

スピーカーでヒビキ提督の音が校庭に響き渡る。ヒビキだけに。

『始め！1！2！3！』  
始まった。

序盤は大半の受験生はスクワット以外を選択した。当然だ。1500走った後にさらに足腰に負荷をかけるなんて冗談じゃない。

最初、俺とザゴメルは腕立てを、バダツプとエスカバは腹筋をやっていた。

だが、やはり1000を越えた辺りからキツくなり、俺は腹筋に切り替えた。大体1000回毎に切り替えた方が良さそうだな。

『158！159！160！』

「ぐう…キツイ…！」

「へばるなよ。ザゴメル。まだ一人も脱落してないんだ」

そう。ここまで誰一人として脱落してない。これつてもう筋力と  
いうよりかは我慢比べに近いな。

バダツプを見る。…キツそうな顔だ。今までの種目では平然としていたがやはりさっきまでの試験はバダツプにもそこそこの負荷をかけてたのだろう。筋肉にある程度乳酸がたまっていたに違いない。

『199!200!201!』

そうこうしてるうちに200を越える。：まだ5分の1が終わったばかり。1000までは程遠い。

俺はスクワットに切り替える。1500走った後と言ったがもう腕は棒のようになっており、腹は筋肉的な意味で痛い。ここまで来るともうどれ選んでも変わらない気がする。

てかまだ誰も脱落してないのかよ。少なくともドンケツにはなれないな。というか皆そう思ってるわけだから誰も脱落しないんだな。なんてあげつないシステムだ。

他の三人を見てみるとエスカバが一番辛そうだ。今、あいつも俺と同じくスクワットをやってるが、足がガクガクになってる。

「エスカバ。腹筋か腕立てに切り替えた方が…」

「：そうだな。：グツ。キツイ…」

300を越えるとプルプル震えている受験生の人数は一気に増えた。で、出ますよ：（脱落者が）。

360を越えてからそれは起きた。

俺の前方10メートルほど前にいてスクワットをしていた受験者の一人が膝をついた。試験監督が彼に近づく。

「364番!記録364回!」

奇跡的に受験番号と記録が丸被りだが、そんなこと気には出来ない。まだ半分もいってないんだから。

だが、悲劇(?)はここから始まる。

「8、402番!記録369回!」

「203番!記録376回!」

「12、67、121番!記録382回!」

とにかく脱落者が続出する。やはり、364番の脱落がきっかけとなったのだろう。もうビリになることはないという安心感で力が抜けてしまったのかもしれない。

『399!400!401!』

400が宣告される頃には受験生の約半分が脱落していた。

まずいですよ!このままじゃ500行く前に皆脱落だぞ!?

ちなみに俺、バダップ、エスカバ、ザゴメルはまだ脱落はしていない。

だが、エスカバはもうハアハア言っておりもう限界なのは目に見える。

『499!500!501!』

そして…

「グッ…う、うおおおおあああ…もうだめだ」

腕立てをしていたエスカバが崩れ落ちる。

「114番!記録514回!」

ついにエスカバが堕ちたか。脱落者はその場に座るといふ決まりでエスカバはその場に座り込む。

もうすっかり日は落ちて、辺りは真つ暗。ナイターがついている。

…やつと半分か。もう残った受験生は100もない。

こりやあバダップでもいけるか分かんねえぞ。

600、700と続いていく。800の時にはもう残りは俺達含めて10人もいなかった。そして、俺ももう限界だ。全身に力が入らない。

俺は地面に倒れこんだ。

「191、9番!記録810回!」

ちなみに俺の番号は191だ。ところで…何で数大きい方から言ったんすかねえ(半ギレ)!?さては貴様ホモだな!?

そして、900回を越える。残っていたのは二人だけ。

バダップと…ザゴメルだ。二人ともゾーン状態ってやつかもしれない。目も虚ろでもう俺達が見えてないんじゃないと思うくらい彼らは限界を越えていた。

周りの受験生達もこちらに注目している。

ひよつとするとザゴメルも1000回いくかも。

そして、ついに大台の990を越える。

『990!』

『991!』

『992!』



『993!』

その時だった。ドサリという誰かの倒れる音。受験者達の驚愕の  
声。

「192番！記録993回！」

えっ？その番号って。

倒れたのはバダツプだった。

## 第五話：ボール返してください。オナシヤス！

「いやー。にしても意外すぎたよ。バダップが1000回いかななくてザゴメルが代わりに1000回いったのは」(注意！下ネタではありません！第四話参照！)というか仮にそうだとしても？キスギイ！」  
『…そうだな。運動の分野で俺が誰かに負けたのは初めてかもしれないな』

今、俺はバダップとビデオ通話で話している。今は王牙学園の入学試験が終わった後の深夜だ。

『ザゴメルは何か言っていたか？』

「いや、もう何もする気力が無かったみたいで何も言わずにフラフラ帰っていったよ」

バダップが993回目で倒れた後、ザゴメルは最後までやりきり、この試験唯一のクリア者となった。

それとバダップが倒れたのは疲れすぎで眠ってしまった…というものだ。俺も最初は信じられないと思ったが全身疲労で試験後全く動くことの出来ない受験生もいたからおかしいことではないのかもしれない。それだけこの試験は過酷だったということだ。

バダップは試験終了後も眠ったまま結局送迎の車で自宅へ帰っていき、俺は一人で家に帰った。

「あとさ、帰るのメチャクチャ大変だったんだぞ！もう足とかパンパンで歩くのも苦労したし！」

『それは大変だったな』

「なのにお前は歩くことなくリムジン！羨ましすぎる！俺乗ったことないんだぞー！」

『それなら今度乗るか？』

「いいのか!?約束だぞ約束！…あ、約束といえば三日後にエスカバと一緒に映画に行く約束をしたんだけどバダップも一緒に行くか？」

『いいのか？』

「いいよ。エスカバがあとでバダップにも聞いといてくれって言ったし」

『そうか。ありがとう。行かせてもらう』

「待ち合わせ場所は…」

俺が伝える待ち合わせ場所をバダツプはメモに取る。

『OKだ。イナズマ映画館だな』

「正午に待ち合わせだ。頼むぜ」

『分かった。もう夜遅いしこれで終わりにするか?』

俺は時間を確認する。ウエ!?午前一時!?時間経つの早すぎィ!

「そうだな。バダツプ。じゃあ三日後、楽しみに待ってるぜ!」

『ああ』

こうして俺とバダツプの通話は終わった。

俺：バダツプ・スリードは電話を終えるとベッドへと飛び込んだ。

「…疲れた」

体が思ったように動かない。先程のメモをとるのにさえ疲労のせいか上手くないかなかった。

「バダツプ様。夕食のお時間です」

「…御影<sup>みかげ</sup>。ノックしろといつも言ってるはずだが」

「ええ。しました。ですがいつまで経っても返事がないので勝手に入らせてもらいました」

何故俺の夕食が午前一時になっているのか。それは俺が眠ってしまっただけにある。

王牙学園入学試験は午後八時に終了した…らしい。俺は試験終了直前に眠ってしまったために、知らなかったが。

他の人によると、眠ってしまった俺は全然起きなかったらしく何かうなされてるようだったと言っていた。

そうして眠っていた俺が目覚めたのはまさかの午後十一時。目覚めた俺は状況を説明された後、零に無事を報告することにした…とい

うわけだ。

ちなみに腹が非常に空いている。すでに十二時間近く何も食べていないから当然だが。

「本当にすごいなされておりました。体調は万全なのですね？」

「大丈夫だ。気分は悪くないし脈も正常だった」

「本当に大丈夫なのですか？」

「本当に大丈夫だ」

「それはよかったです」

彼女は安堵の息をついた。

彼女の名は御影千草<sup>みかげちぐさ</sup>。俺専属の執事にしてボディーガード。正直俺にボディーガードなどいらぬが母上が勝手に用意した。

雪のように真っ白な肌、真っ赤な瞳は彼女がアルビノであることの証だ。長い真っ白の髪はポニーテールにしている。だが、中性的な顔立ちをしており、なおかつスーツを纏っている彼女は男性にも見える。

ベテランの従者が多い俺の家で彼女だけは十代後半だ。母上が俺の専属は同年代くらいの子がいいと考えたために彼女は弱冠十五歳にして俺の専属の執事となった。

だが、他の執事やメイドから仕事を教わり彼女の仕事の腕前は今では一流となっている。

最初彼女が来たときは別に執事などいらぬ、と考えていたが今の俺にとっては大切な従者だ。

ちなみに彼女はメイドではなく何故か執事をやっている。本当に何故なんだ…？

「バダップ様。三日後に黒野様に会われるのですか？」

「ああ。エスカバが映画に誘ってくれてな」

「…エスカバ様…ですか」

「王牙学園の試験で仲良くなった受験生だ」

「そうですか。悪い輩ではないようで安心しました。…そういうえばバダップ様」

「何だ？」

御影は懐から一枚の紙を取り出すと俺にそれを渡した。

「これは…」

「先日、バダップ様が調べるよう言われたものです」

「…ありがとう。助かる」

「ありがたきお言葉。夕食ですがそちらに持っていていった方がよろしいでしょうか？」

「…頼む。試験直後で体を動かしたくないんだ」

「承知いたしました」

御影は部屋から出ていく。俺は先程彼女から受け取ったものを確認する。問題ないな。エスカバ達と映画に行くついでに見に行くか。

「バダップ様。夕食をお持ちしました」

「入れ」

「失礼いたします」

御影が夕食を持って姿を現す。今日の夕食はステーキらしい。…しまった。何で御影に夕食を持ってかせてしまったんだ。

やらかしてしまっただかもしれない。

先程も言った通り御影は一流の従者だ。だが、彼女はとんでもない欠点を抱えている。

欠点があるなら一流とはいえないが、彼女のそれは欠点と言ってはいけないかもしれない。それに欠点といえどもそれは彼女の仕事のミスに直結するものではない。

少なくとも『ミスをしたくない』という点では彼女は一流の従者なのだから。

「それでは、バダップ様。お手を拭かせて頂きます」

「分かった」

手を出す。彼女はおしぼりで俺の手を丁寧に丁寧に拭いていく。普通なら三十秒で終わるところを彼女はとても丁寧にやる。

五分もかけて彼女は俺の両手を拭き終えた。

「これで終わりです。バダップ様」

「よし、じゃあ早速料理に「いけません。バダップ様！」…え？」

「ナイフとフォークに毒が塗られてるかもしれません。かくなるうえ

は一度消毒し直します！」

そう言うのと彼女はナイフとフォークを丁寧に消毒液入りのふきんで拭いていく。…丁寧に丁寧に。

「またも五分ほどかけて彼女はナイフとフォークを拭き終えた。」

「ナイフとフォーク、きちんと綺麗にさせていただきました！」

「…よし、今度こそ「まだダメです！バダツプ様！」…」

「ステーキそのものに毒が仕掛けられている可能性もあります！ここは私が毒味を行いますので！」

「お分かり頂けたでしょうか。…そう。御影千草は…神経質である。通常の業務に支障をきたすほどではないのだが、食事の間だけ何故かとてもなく神経質になるのだ。」

「だからこそ俺は食事中は御影を側に置かない。このように彼女の『従者としての業務』という名の妨害を受けるからだ。」

御影は懐から別のナイフとフォークを取り出すとステーキを一切れ口の中に納める。

彼女はステーキを咀嚼する。丁寧に丁寧に…。二分もかけて彼女はステーキ一切れを飲み込んだ。

「よし…もういいな！御影！」

「はい。どうぞ。バダツプ様」

「やつとだ。…やつと食べられる。だが、もうステーキは冷めてしまっており、あまり美味しくはなくなっていた。」

もう絶対食事中、御影を側に置かないことにしようと思は心の中で強く誓うのだった。

待ち合わせ場所であるイナズマ映画館前のベンチに俺は座っていた。入り口前の広場にはあまり人はいない。そんな中でポップコーンの屋台に鳥の群れが集まってきている。どうやらこの鳥たちはポップコーンのおこぼれが欲しいみたいだ。周りを見るとあちこち

鳥だらけ。ポップコーン屋さん！まずいですよ！

ちなみにバダップとエスカバはまだ来てないみたいだ。

正午に集合の予定だが、今の時間は午前十一時半。少し早く来てしまったらしい。すこし、暇だな。

「あつそうだ（唐突）。サッカーボールでも蹴るか」

俺は持っているボールの袋を見る。久しぶりにバダップと遊ぶのでボールを持ってきた。エスカバがいるあたり持ってかない方がよかったかな？とも思ったけど結局いい暇潰しになる。

ボールを袋から出す。そのままドリブル。流石にシヨツピングモールとかお店が並ぶこの場所でシュートは打てないがそれでも充実していた。

その時だった。いきなり何者かにボールを奪われたのは。

「!?」

「あはは〜！ずいぶんトロいな〜♪」

ボールを奪ったのはくろぶちの眼鏡をかけた金髪のツンツン頭の男。背はザゴメルと同じくらいはあるうかという長身だが彼ほど筋肉ムキムキというわけではなくでぶつとしている。

「おめえさん。サッカーが好きなのか〜？」

「いや、町中にボール持って来ててサッカー嫌いなやつがいるなら是非見て見たいけどね」

「ははっ！たしかにそうだな〜♪」

男は奪ったボールをそのままリフティングする。

「オイラの名はシン。シン・グリッドだよ〜♪。おめえさんは〜？」

「黒野零くろのれいだよ。はじめまして。ところでシン。俺のボール返してください。オナシヤス〜！」

「う〜ん。どうしようかな〜♪」

シンはニヤニヤ笑いながらリフティングを続ける。…こいつ返す気がないな。頭にきますよ!!

なら仕方ない…。返す気がないなら…。

俺は一気にシンへ近づくと。シンはしばらくヘラヘラしていたがすぐに俺の狙いに気づく。スライディングを仕掛けてボールを奪いに

行くがギリギリでシンの反応の方が早かった。

ジャンプで空中に逃げられる。だが、その程度で諦める気はない！  
素早く体制を立て直し、シンの着地点を狙う。

「そこだー！」

「っ！おつと〜！」

シンは空中でボールを高く蹴りあげる。ジャンプしてボールを取りに行く俺。シンは着地してから再びジャンプしなければならない分俺よりもジャンプのタイミングが遅れるはず。

しかし、シンが蹴りあげたボールは風に流されていき軌道をどんどん変えていく。

おいおい。いくらなんでもあおられすぎじゃねえか!?ダメだ。ボールが届かない！

結果的にボールは俺が予想した場所から遥かに離れた場所に落ちる。そこにはシンが待ち構えており、シンはボールを足でトラップした。恐らくシンはボールが風の影響をモロに受けるようにボールに回転をかけたのだろう。

「いや〜。狙いはよかったがオイラには通じないってことだなく♪」

シンは地面に着地した俺を見てニヤニヤ嗤う。∴参ったな。俺はすぐにボールを奪い返しに行く。するとシンはボールを再び高く蹴りあげる。

真上に蹴りあげたから奴がいるあたりに落ちてくるはずだが、さっきのパターンを考えると風にあおられてとんでもないところに落ちてくるな。

シンのやつより先に落下位置を予測しないと。上を見てボールの落下点を予測しようとする俺。だが、シンは一定の場所から全く動こうとしない。

「おいおい。そこから動かなくていいのか?」

「うん〜。だってここに落ちるも〜ん♪」

俺は辺りを動くが不規則に動くボールの軌道が分からない。そして、ボールはシンの居た位置に落ちた。

「えへへ〜♪すげえいじょう♪」



こいつ…何でボールの落下点分かるんだ？上空の風の向きが分かれば流石に落下点くらいは予測できるが上空の風の向きが地上の風の向きと必ずしも一致するとは限らない。

じゃあこいつはどうやって上空の風の向きを…？

「さあ〜♪君は僕からボールを取り返せるかな〜♪」

「おもしれえ…」

謎を解いてボールを奪い返してやる！

…あれ？というか…これ警察呼べば万事解け〜（強制終了）

御影千草は掃除のためにバダツプの自室へ入った。今はバダツプは友人の黒野零と遊びに行く約束を果たすためにイナズマ映画館へと向かっているためにノックする必要はない。

御影はまずはバダツプの勉強机から綺麗にすることにした。机を見る。一つの写真立てが彼女の目を引いた。二年前のバダツプの誕生日パーティーの時に撮られた写真が入った写真立てだ。

二人の少年が写真の中にいる。

一人は御影自身飽きるほど見ている、主人…バダツプ・スリード。

もう一人はこのバダツプの友人、黒野零。

写真立てをじっと見つめる御影。

そして深いため息をつく。

「黒野零…貴方は誰ですか？貴方は一体何者ですか？…単純に王牙学園のメンバーに選ばれなかった出来損ないか、それとも…」

もう一度深いため息をつく。考えすぎは体に良くない。

ふと、御影は時間が気になり、腕時計を確認した。

11時45分14秒。彼女は腕時計を外すとその場に落とし…踏み割った。

「汚いですね。1919810までであったら発狂してたかもしれません」

ちなみに19秒後に彼女は踏み割った腕時計を処分しなければいけないことに気づき、余計なことをした自分を呪うことになるのだが、これはまた別の話で。

## 第六話：じやあぶち込んでやるぜ！

：しかし、上空の風にあおられるボールの落下点が相手に分かって自分に分からない以上、すでに情報戦で負けている。

すでに奪い合いを開始してから十分近くが経過していた。

「いや〜♪大変だね〜♪必死だね〜♪」

「その余裕そうな顔をすぐに歪ましてやるさー！」

シンにボールを奪いに近づくがいつも通りシンはボールを上を蹴り上げる。

俺は上を見ながらボールが落下しそうな辺りを探す。

だが、シンは先程ボールを蹴った位置から動かない。

まさか、あの辺に落ちるのか？

俺はシンの居る辺りへ移動する。：おかしいな。どう見てもここにボールが落ちてくるとは思えないが…。

と、いきなりシンが動く。一気に十メートルほど移動して落下したボールを胸でトラップした。

「お前…」

「あはは〜♪流石に〜そろそろ君がオイラの位置を参考にして落下位置を特定するような気がしてたんだ〜♪いや〜落下する直前に動いて正解だったな〜♪」

なめられてる。いや、ポジティブに考えよう。これでボールを奪うのがよりいつそう楽になった。

：上空の風向きを知つてればの話だが。

待てよ、俺もシンも条件は同じ。ということは相手は何らかの手段で上空の風向きを知ってる可能性がでかい。

俺は辺りを見回す。高いところにあつて風の影響を受けやすいものがあればそれを利用して上空の風向きを知ることができる。

木や旗のようなものが候補にあげられるがここにはない。木といった自然物は八十年後の未来では見かけるのも珍しい。旗は…なんでねえんだよ（半ギレ）。

と、とにかく風向きを把握できるものを探さなきゃ…（使命感）。

…そうだ！風見鶏はどうだ！ここには建物がいっぱいあるし一つくらいは…無いか。そもそも風見鶏なんて古いしさすがにこの世界にはないだろうな。代わりに屋根の上に居るのはポップコーンのおぼれを待つ鳥たちだけだ。

…ん？鳥？

オイラ…シン・グリッドはもうこの戦いに飽きていた。

あのお方からのミッシオンを思い出す。何であの方はこんなやつを警戒してるんだな？

オイラはボールをリフティングする。『黒野零くろのれいの能力値を計測しろ』というミッシオンのために黒野零からボールを奪ったがこのミッシオンは無駄足だったかもしれない。

この程度でボールを取り返せないのならばそこまで気にするべきものでもないはずだ。

少なくともオイラ達の真のミッシオン達成の邪魔にはならないだろう。

と、そんなことを考えているオイラに向かって黒野が近づく。

オイラはボールを空に向かって蹴る。そして、黒野には見えてない風見鶏を確認する。

北風…いや、北北東に流れている。風速は大体五メートルくらいか。

となると、あの辺か。奇遇にもポップコーン屋の屋台がよい目印になる。

さてと、ボールが落下する直前までここで待つか。

多分、ポップコーン屋の辺りに落ちるな。ボール。

俺はシンが利用してであろう風見鶏をもう一度確認する。やはり間違いない。ポップコーン屋の辺りだ。

だが、まだそこには向かわない。まだボールが落ちるまでに時間がある。今、俺が得ているアドバンテージはシンの油断だ。まだ相手はこちらがボールの落下点を見つける方法を持ってないと考えてるはずだ。

今ここで屋台の辺りをうろちよろすればシンは警戒するだろう。手にしたアドバンテージが水泡と化す。

俺はあえてポップコーン屋から少し離れる。それでもシンよりは近い位置にいるが。

これで万全かもしれないが念には念をだ。あれは試運転もここですとくか。

今、ボールは俺の真上にあるがここからだ。風にあおられたボールは地面に近づけば近づくほどに大きく変化する。

ボールの高さを見るにあと数秒で地面に落ちるな。

そろそろだ！エンジン全開！

俺はポップコーン屋に向かって全力で走った。（注意！これでもサッカーしてます）

…!!あいつ！風見鶏を見つけたのか!!まずい！落下地点にどんどん近づいてつてる！

風見鶏とは建物の上にいる鳥たちのことだ。あの本物の風見鶏ではなく、あそこでポップコーンを狙ってる鳥たちだ。

元来、鳥たちは風によって体を冷やすことを避けるために本能的に体の向きを、常に風とは逆方向に向けている。

さらに、鳥たちの飛行から風速を割り出すことも可能だ。事実、プロゴルファーはコース上を飛行する鳥から上空の風を把握する。

まずいな。やつの方が一瞬早く落下地点に到達する。

ここで負けるわけにはいかない！

「デーモンカット！」

黒いオーラを纏った足を横一線する。すると、黒野とボールの間に黒色の衝撃波の壁が出現した。衝撃波の壁には気味の悪い悪魔の顔が気のせいに見える。

衝撃波で黒野は後ろに飛ばされる。

「悪いなく♪でもく必殺技を使っちゃいけないなんて誰も言っていないね♪」

「ははっ！奇遇だな…」

「？」

間違いなくボールはほぼオイラが奪取できるだろう。だが、黒野の目は諦めてはいなかった。

「俺も…お前と同じことを考えてたんだよ！じゃあぶち込んでやるぜ！」

黒野の右足が炎に包まれる。その右足をデーモンカットと同じように振るう。右足に集約していた炎がボールを焼きつくす。そして

ボールが爆発した。

「エクस्पロード・ボール！」

ボールの近くにいたオイラは吹っ飛ばされる。まるでボールがオイラ自身を拒絶したかのような技だった。ディフェンス技か。

「くっ！」

五メートルほど吹っ飛ばされる。形勢逆転された。

ボールはコロコロ転がって黒野の足元へ。

「俺の勝ちだ！」

はは…

「オイラの…負けだなく」

「いや〜♪楽しかった楽しかった〜♪」

シンはニコニコ楽しそうに笑いながら映画館前のベンチに座っている。

俺は時間を確認する。午前11時53分22秒（11時45分14秒じゃないー1145141919810点）。集合時間は正午だし、まあ、いい暇潰しにはなったか。

「さつきはおちよくつてごめんなく〜♪ほら、道端でサッカーボール蹴ってる人見たらちよつかい出すことって君もよくあるだろ〜？」

「ありますあります」

「いや〜♪やつぱりそのへんオイラたちは気が合うね〜♪」

シンはポップコーン屋さんで買った特大サイズの器に山盛りに入ったポップコーンをバクバク食べている。

「あつ。キャラメル味無くなった〜♪次はチョコレート味のポップコーンにする〜♪」

「食ベスギイ！」

「あはは〜よく言われるよ〜♪」

チョコレート味のポップコーンの代金を払い、商品を受けとるシン。

「じゃあ、そろそろばいばいだね〜♪」

「おっどっか行くのか？」

「うん〜♪またね〜♪」

シンはそう言うのとポップコーンの特大カップを抱えてスキップしながら去っていく。スキップする度にカップこぼれ落ちるポップコーンの道に鳥たちが群がる。シンとすれ違ってやって来たのは

「すげえ量のポップコーンだな…。なんだあいつ」

エスカバダ。受験のときと全く同じ格好：軍服姿だ。この世界の軍人というのはどちらかと言えば右翼的な人が多く、国への忠誠心とか何たらとかで子供とかにも軍服を着せる人は多いらしい。実際、將軍の父を持つバダップが外で軍服以外を着ているところを俺は見た

ことがない。エスカバも同じなのだろう。

「よう。三日ぶりだな。…何か息づかい少し荒くないか？」

「ああ。少し運動してたのさ」

「…それ、サッカーボールか？懐かしいな」

「サッカーをやったことあるのか？」

「昔、少しだけな」

ん？気のせいかエスカバの奴、少しだけ悲しそうな表情を一瞬浮かべたような。

「そういえばザゴメルがお前にありがとうって伝えてくれて。お前、何かしたのか？」

「そうだな。まあ、あまり聞かないでくれ」

ザゴメルが途中退席しようとしてたなんて言えるわけないゾ。

「バダツプの奴遅くないか？あと一分くらいで十二時だが…」

「大丈夫だ。あいつは時間内に必ず着くよ」

「…すごい自信だな」

俺はバダツプと何回か遊んだことがあるから知っている。バダツプが遅れないことは。バダツプは…。

「十二時まで残り十秒…来るぞ」

その時一台のリムジンが姿を見せる。残り五秒。リムジンは俺たちの目の前に停車する。

そして、残り三秒。運転手がリムジンの扉が開く。

十二時ちょうどにバダツプは映画館前に現れた。

「ありがとう。帰りは例の場所で待っていてくれ」

「かしこまりました」

運転手はバダツプに深くお辞儀をする。

「…バダツプは待ち合わせ時間ちょうどにいつも現れるんだ」

「マジかよ。すげえな」

「こんにちは。零。それとエスカバ。今回はよろしく頼む」

「ああ。よろしくな。バダツプ」

バダツプとエスカバはかたい握手をかわす。

「ところで映画は何を見るんだ？」



俺とバダップはエスカバからは映画のタイトルを教えてもらってない。本人いわく『映画館に着いてからのお楽しみ』らしいが

『デュエル迫真！決闘部』だけど」

「面白そうなタイトルだな」

「ええ…（困惑）」

少年はポップコーンのカップを抱えて鼻歌をうたいながら人気のない路地をスキップしていた。もうポップコーンのチョコレート味はほとんど残っていない。

「おっーいたいた〜♪」

少年は待ち合わせ場所で待っていた二人の少年少女に声をかける。

「十二時ちょうどに到着〜♪いや〜♪遅れるかと思つたよ〜♪」

「NO。貴方が到着したのは12時00分00.23秒です。すなわち0.23秒の遅れがあります。これにより貴方は遅れました。  
Q.E.D  
証明完了」

三人のうちの一人の少女が淡々と機械のように告げる。青い髪の毛のショートヘアで眼鏡をかけており、かなり華奢で儂い雰囲気を持っている。

「ヘレス〜♪待ち合わせ場所は『この辺り』って言っただけで具体的な領域は提示してないよ〜?」

「YES。しかし貴方が話しかけてきたタイミングを到着時間と見なせば今の私の証明は正しいはずですよ」

「おいおい！俺は誰が何秒遅れようがどうでもいいんだ！さっさと近況報告といこうぜ！」

ポップコーンを持った少年の返答にたいしてヘレスと呼ばれた少女は反論した。その後、赤毛でサングラスをかけたがたいのいい男が叫ぶ。

「そうだね〜♪ヘレス〜♪文句は後で聞いておくから今は耐えてくれる〜?」

「状況を分析…効率を重視し『シン・グリッドが近況報告に遅れた』命題についての証明を中断します」

「分かってくれて助かるよ〜♪」

「じゃあまず俺だな!とりあえず異常なしだ!今、古芝セシルは小さなサッカーコートにいるぜ!」

赤毛のサングラスが報告する。

「オイラはあのお方の命令で黒野零に接触したよ〜♪」

「質問です。黒野零の実力はセカンドステージチルドレンに匹敵するものでしたか?」

「いや〜♪オイラ達にすら届かないよ〜♪でも〜♪間違いなくオイラ達のステージまで〜やって来るだろうね〜♪」

「…意味が分かりません。私達の実力相当となる根拠を提示してください」

「いや〜♪勘だよ〜♪」

「非科学的です。根拠のない発言をしないでください」

ヘレスは感情のない瞳のままシンに冷たく宣言する。空気が張りつめる。ヘレスの肩を掴むサングラス。

「まあ、そんなこと言うなよ。シンの勘はよく当たるんだ」

「では、フェルメ・イレーズ。貴方には『シン・グリッドの勘はよく当たる』という命題を証明する根拠があるのですか?」

「いや、無いけど」

「根拠のない発言はしないでください」

「…いや、俺が言いたいのはシンの言葉を肯定しろってことじゃなく、頭に入れておくくらいはいいんじゃないかってことで」

「根拠のないものを記憶する必要性を感じません」

「…あああ!何なんだよ!おい!シン!何でこんなめんどくさいやつを今回のミッションのメンバーに選んだ!?!」

フェルメは頭を抱えながらシンに尋ねる。それを見ながらニヤニヤと笑うシン。

「すまないね〜♪フェルメ〜♪でも〜♪ヘレスは有能だから〜♪」  
『ヘレス・デストリカオは優秀です』という命題の証明はすでに行っています。よって、ヘレス・デストリカオは優秀です。証明完了<sup>Q.E.D</sup>」  
「ああ〜！とにかく〜！その！機械みたいな！喋りを！やめろ！頭にくる！」

『ヘレス・デストリカオが機械みたいに喋る』という命題の証明を行うのに必要な根拠を提示してください」

「くそがああああ！」

自分が優秀であることを証明するヘレスに喚きちらすフェルメ。  
その時、シンの通信機から通信が入る。

「はい〜♪…はい。…うん。いいよ。君のミッションは『御影<sup>みかげ</sup>千草の監視』だから。怪しい動きを彼女がした場合には即刻オイラのところ  
に彼女を連れてきてくれ。…ああ。いいよ。首から下が無くなっ  
ちやっつても」

シンと通信機から通信した人物の会話はヘレスとフェルメの口論によつてかき消され、誰にも聞き取られることはなかった。一番近くにいたヘレスとフェルメにさえも。

第七話：なぜ女なんだ…？（VS天馬は永遠に）

「面白かったな。映画」

「ああ。TN？KとT？Nの戦いにはドキドキしたよ」

映画が終わり、俺達は今映画館の前でおしゃべりをしているのだが…。

「あのさ、あの映画本当に面白かったか？」

「野？と遠？が戦う展開は中々熱かったと思うが」

「俺的にはG？（隠せてない）とマジ？君の激しいデュエルシーンが良かったと思うぜ」

嘘だろお前ら…たまげたなあ。いや、お前らにとっては遊？王と変わらないんだろう。でも俺にとつちやホモ？デオにしか見えねえよ。エツチなシーンはなかったけど。

出演してた俳優さんがなあ…。例のあの人達に似ていたんだよ。淫？ファミリー大集合！夢の共演！いいゾ！これ！みたいな映画だったんだが。てかモロそうだった。

「あれ原作の小説が俺達と同年の奴が書いたものらしいんだ」

エスカバの発言に俺は耳を疑う。

「え？あれを？」

「ああ。すげえよな。弱冠十二歳でだぜ。ああいうのが天才って呼ばれるんだろうな」

…マジかよ。たまげたなあ（二回目）。どんだけ天才なんだよそいつ。

「このあとどうする？」

「特に決まってるないな。ボーリングにでも行くか？」

「ああ〜いいっすねえ〜」

「いや、少し待ってくれ」

ボーリングに行こうとする俺とエスカバをバダップが止める。

「どうしても行きたい所がある。ボーリングに行くのはその後でもいいからついてきてくれないか？」

「俺は別にいいけど…エスカバは？」

「俺も都合は悪くないが…まず、どこに行くのか教えてくれないか？」  
「サッカーコートだ」

「へえ〜ここにサッカーコートがあったのか！」

俺とエスカバはバダップに連れられてそのサッカーコートにやって来た。正確に言えばコンクリの広場に白線を引いてゴールを置いた小さなサッカーコートだ。

「無料で使えるサッカーコートを探して、見つけたのがここというわけだ」

すでにサッカーをやっている人達で賑わっている。四対四のサッカーバトルか。周りには沢山のギャラリイ達がいる。赤のビブスと青のビブスのチームで戦っている。あつ、赤ビブスがシュート打つ体勢だ。

赤いビブスを着た三人の選手がフィールドの一点で交差すると、その一点から青いオーラが噴出し、一頭のペガサスとなる。

ペガサスが嘶いみなくとボールに青いオーラが蓄積される。そのまま先程交差した三人組がボールを蹴りこむ。

「トライペガサス！」

「フルパワーシールドV2！」

青ビブスのキーパーが頑張るものの健闘空しく、フルパワーシールドは破られ赤チームの得点。そこで試合終了を告げるビーツというタイマーの音声が鳴り響いた。

てか中々やるな。トライペガサスとかフルパワーシールドとかそこそ強いぞ。

特にフルパワーシールドは帝国の源田の最強のキーパー技だ。八十年後のサッカーってレベル高いなあ。

『さあ〜これで赤サイド！チーム《天馬は永遠に》が四連勝！この流れを止められるチームは現れるのか!?!さあ！次の挑戦チームは!?!』

おっ。何か知らないけど試合終了後のコートの中真ん中に帽子にグラサンかけてマイク持ったDJ風の男が現れた。それと同時にギョララー達が自分達のアピールを始める。

「俺だ！俺達のチームを出してくれ！」

「DJ—YOUU！頼む！俺達だ！」

「バカ言うな！うちらに決まってる！」

DJ—YOUUと、呼ばれたグラサンは沢山のアグレッシブなアピールに臆することなく叫ぶ。

『ようし！DJルーレットいくぜ！ドウルルルルルル！バン！よしっ！そのゴグルの少年！君達だ！』

「よっしやあー！」

指名されたゴグルの男とそのチームメイト達は喜びながら、コートに立つと負けたチームの選手から青ビブスを受けとる。

なるほど。サッカーバトルの勝ち抜き戦か。面白そうじゃん。

「バダップ！俺達もこの後参加しようぜ！」

「ダメだ。今日は見てくだけだ。そもそも俺達はエスカバを含めて三人しかいないからな」

確かに俺達は今日は三人しかいない。四人制のサッカーバトルに参加するには一人足りない。ていうかエスカバが会場OKしてくれるかどうか分からない。と、後ろから女の子の声が聞こえた。

「貴方達。試合に出るメンバーが足りないの？」

声のした方向の先に一人の少女がそこにいた。長い金髪のストレートに青い瞳。西洋人形のような可愛らしい顔立ち。絵に書いたような金髪碧眼の美少女がそこにいた。

「な、なぜ女なんだ…」

「失礼ね。貴方。女性差別なんて廃れた考え方は嫌いよ」

「センセンシャル…」

謝る俺。バダップが少女に話しかける。

「人にもものを探ねる時は名乗るのが礼儀じゃないか？」

「そうだよ（便乗）」

「…そうね。私は古芝セシルよ。ほら。こっちも名乗ったからそつち

も名乗りなさい」

「バダップだ」

「エスカバと呼んでくれ」

「黒野零くろのれい。俺は零と呼んでくれ。よろしく」

「で、もう一度聞くけど貴方達はサッカーバトルをするためのメンバーが足りないのよね？」

俺達が話している間にサッカーバトルが始まっていた。どうやら先程四連勝した赤チームが押されているらしく、ギャラリーのボルテージが上がっている。

「確かに俺達はサッカーバトルする人数が足りない。だから今回は観戦しに来ただけだが」

バダップがそう答える。すると、少女：セシルはニヤリと笑う。

「ちようどいいわ。私とチームを組んでサッカーバトルに出ましよう？こちらは一人、そちらは三人なのだから合わせればちようど四人。サッカーバトルに参加できるわよね？」

「ああ〜いいつすね〜（二回目）」

ラッキーだ。これで俺達も参加できる。だが、バダップの返答は意外なものだった。

「ダメだ。そもそも今日は見ていくだけとこちらは決めている。君の提案には同意できない」

バダップのその返答には確固たる信念が見てとれた。しかしセシルは諦める様子がない。

「ふふっ。それは甘いわね。バダップ・スリード」

「何だと？」

「貴方、聞いたわよね？その零君が『ああ〜いいつすね〜』って言ったのを。彼はこのサッカーバトルに出たがってるみたいじゃない。ここで貴方が強引に出ない出ないと駄々をこねたら友情にヒビが入るのではなくて？」

「…」

バダップが沈黙する。セシルも何も言わない。聞こえるのは今行われてるサッカーバトルに熱狂するギャラリー達の声だけ。バダッ

プとセシルのにらみ合いが続く。しばらくしてからバダップが口を開いた。

「G Kの出来る奴がない」

「そんなのシュートを打たせなければいいだけのことじゃない。私はゴールキーパー D Fで、相手チームにシュートをうたせない自信があるわ」

「……ここには沢山のチームがいる。あのDJ-YOUとかいう奴に選ばれるか分からない」

「DJ-YOUはここに来るのが初めての人を優先して選んでくれるから大丈夫。今日ここに来てるのは常連さんばかりだし、次の試合には出たいと言えれば出られると思うわよ」

「……そもそもスパイクもグローブも持ってない」

「コンクリートの地面にスパイクも普通のシューズも関係ないわ。事実ここにいる奴らの大半は普通のランニングシューズでプレイしてる。グローブならビブスと一緒に用意してあるから大丈夫」

バダップが反論するもセシルはあらかじめ反論に対する準備をしていたかのように返答していく。エスカバがバダップの肩を叩く。

「なあ。バダップ。俺、キーパーやるよ。零もあのセシルって娘も参加したがってるしさ」

「エスカバ……。分かった。古芝セシル。そちらの提案をのもう」

「あら……。案外素直なのね」

『試合終了〜！勝ったのは《天馬は永遠に》！これで五連勝だ！このチームの大躍進を止めるチームは現れるのか〜!?!』

丁度、向こうの試合も終わったらしい。どうやらまた赤いビブスのチームが勝ったらしかった。青のビブスのチームは肩を落としている。

「俺だ俺だ俺だ俺だ俺だ!!!」

「二回目出させてくれ!!!」

「ヒーハー!!!」

沢山のギャラリーがアピールする中、セシルはゆっくりと手を上げる。すると、DJ-YOUがセシルを指差す。

『へーい！見ろよお前ら！新顔だぜ！おまけに金髪の美少女ときた！』



「ここは彼女に免じて許してくれ！おーい！来な来な！」

「さ。行くわよ」

俺達はギャラリィから注目を浴びながらコートへと移動する。ううう。やべえ。メチャクチャ緊張する。

『お嬢ちゃん！初出場だがチーム名は決めてあるのかい？』

「…そうね。じゃあチーム『オーガ』で」

周りを見るとバダップとエスカバも緊張しているのかプルプルと震えている。セシルはこの状況に慣れているのか気にも止めてないが。

すると、俺の緊張に気づいたのか、DJ-YOUが俺の背中を叩いた。

『おいおい！そこまで緊張するなよ！お前初めてかここ。力抜けよ。そんなガチガチじゃ勝てるもんも勝てねえぜ！』

…ダメだ。体の震えが止まらねえ。自信はある。正直バダップの能力ならゴールも破れるだろうし、俺達の身体能力が相手より劣っているとは考えにくい。

でも…本当に勝てるのか？相手の力量を見誤ってるかもしれないじゃないか。

『…本当に大丈夫か坊や達？』

「おーい。DJ！さっさと始めようぜ！」

『…分かったぜ！キックオフは挑戦者サイドだ！』

相手の選手がDJ-YOUにそう言うと、彼はボールをセンターサークルに置く。最後に心配そうに俺達をちらりと見るとコートから出ていく。

『じゃあ…試合開始！』

十五分に設定されたタイマーがカウントを開始する。

キックオフ。俺はバダップにボールをパスする。が、

「あ…」

バダップは緊張のあまり、そのボールをトラップミスする。てんてんと転がるボール。

「隙あり！」

そのこぼれだまを相手チームに奪われる。そのまま相手はパスを繋げながらゴール前まで迫っていく。俺もバダップも緊張のせいかうまく動けず、抜かれてしまう。

そのまま相手はディフェンスのセシルと三対一に。

「頼む！セシル！何とか止めてくれ！」

相手にはシュート技のトライペガサスがある。だが、エスカバにはキーパーとしての必殺技はない。ここで、セシルがボールを奪わなければ一点とられてしまう。

相手選手がセシルをワンツースで突破する。セシルは…全く動かなかった。

…うん。全く動かなかった。奪おうとするそぶりすら見せなかった。

俺は叫んだ。今までで一番でかい声で。

「あああ！あああ!!! てめええええ!!! 何してんだアアああああああああああ!!!」

「ははっ！相手がやる気のない連中で助か!P!たぜ！宮迫！樋口！トライペガサスだ！」

「おう!!」

相手選手三人が交差する。一点から青いオーラが噴出。一匹の天馬が現れる。

「くらえ！」

「「トライペガサス!!」」

俺もバダップも思った。先制点は相手だと。先程も言ったとおりだがエスカバにキーパー技はない。対する相手のシュートはトライペガサス。たしか、イナズマイレブ3においては威力はA。あのデスゾーンやゴツドノウズ、イナズマブレイクに匹敵する威力だ。

…終わったと思った。

ゴールネットが揺れた

なんてことはなかった。

「…へ？」

間抜けな声。だが、それを発したのは俺でもバダップでもない。

エスカバだった。ボールはエスカバの手の中にある。

何が起こったか説明しよう。相手がトライペガサスを撃った。エスカバが必殺技なしで止めた。何言ってるのか分からないと思うが俺も分からない。

会場が静まりかえる。

しばらくの沈黙。その間に俺は頭の中にある仮説を立てる。だが、それを試すためには俺がボールを受け取らなければならない。

「…エスカバ。パス」

「あ、ああ」

エスカバがボールを放り投げる。俺はそれをセンターサークル付近でトラップ。そして

「ほいっ」

そのまま普通にシュートした。

「っ!?ば、爆裂パンチー……ぐわああああ!!」

相手はふいを突かれるも必殺技を発動。しかし、それはあつさり破られてボールはゴールネットに突き刺さった。

『あっ……入った……。……ゴ、ゴール!!《天馬は永遠に》がここに来て初失点!ゴールをきめたのは《オーガ》だああああ!』

あつ……(察し)。これ、あれじゃん。俺TUEEEE!ってやつ

じゃん。バダツプも察したらしい。俺の目を見つめてうなずいた。センターサークルにボールを置いて、試合再開。相手は再びパス回しで俺とバダツプを翻弄しようとするが

…緊張してた時は気づかなかったけど遅くね？

バダツプがパスをカットする。そのまま自陣からシュート。今度は相手ゴールキーパーは反応すら出来なかった。ボールはゴールネットを貫き後ろの壁にぶつかってパァン！という音をたてて破裂した。

まだ試合開始から二分しか経ってない。だが、その二分はギャラリイ達、そして相手チームに恐怖を植え付けるには十分だった。

『天馬は永遠に』のメンバー達は怪物でも見ているかのような目で俺達を見ながら震えていた。

ギャラリイ達も何も言わないがきつと『天馬は永遠に』のメンバーと同じ気持ちなのだろう。

立ったまま動かない『天馬は永遠に』のメンバー。試合続行のためにDJ-YOUが話しかける。

『あ、あのく新しいボール用意したので試合を続けてください…』

「…にだ」

『…え？』

「…鬼だ。鬼だ鬼だ鬼だ鬼だあ!!あいつらは鬼だあああああ!!!」

「嫌だ！僕は死にたくない!!」

「棄権させてくれ!!頼むよ!!」

『え、ええと、じゃあ《天馬は永遠に》は棄権ということで、次の挑戦チームは…』

DJ-YOUはギャラリイ達を見る。だが、ギャラリイ達も死んだみたいに声はおろか物音一つたてない。

やべえな。居心地悪い。というか俺達こんなに強くなっていたんだな。多分だが、必殺技以前の問題なんだろう。俺達の高い身体能力が相手の必殺技入りのシュートを越えていたってことだろうな。

そして、セシルがディフェンスに入らなかったのはそれを知っていたからなのだろう。

「趣味悪いな。お前。俺とバダップにあらかじめ伝えてくれりやいのに」

「いいじゃない。それに私は演出に凝る方なの。それに…伝えていても貴方達は初対面の相手の言葉を信じる？」

「そりゃあお前の言う通りだけどさあ…（呆れ）」

俺はDJ-YOUを見る。今までにもこんなことはなかったのだろう。前代未聞のこの事態にオロオロするDJ-YOU。

そんなDJにバダップが話しかける。

「あの…もういいですよ。俺達はここから出ていくんで、新しい二チームで戦わせれば…」

『あ、ああ。そっちの方が助かるな。じゃ、じゃあ、チーム《オーガ》も棄権したということだ。「ちよおおおと待ったああああ！」…へ？』

「何そんな面白そうな素材を捨てようとしてんだよお!!ええ!!DJ！」

一人の男がギャラリを掻き分けて現れた。緑色のスポーツ刈りの頭に赤みがかかった褐色肌の男だ。目はキラキラ輝いており、闘争本能の塊のような雰囲気を感じさせる。

『お、お前は…グレファア・アバロニク!』

静かだったギャラリ達が再びざわめき始める。

「おい、セシル。あいつそんなに有名人なのか？」

「グレファア・アバロニク。チーム《グレファア・ドメイン》のキャプテンであまりの強さからこのコートを出禁になった男よ。まさか、ここにまた戻って来るとは思わなかったけどね」

「へえー。じゃああいつ強いのか」

「そうね。…まあ、あの子孫でこの祖先ありでしょうから」

「ん?何か言った?」

「いいえ、何も」

俺達が話している間にもグレファアはDJに試合に出すよう交渉していた。

「DJ。俺のチームを出しな。ここに来てる客どもが度肝を抜くくら

「い激しい試合を見せてやる」

『いや、でもお前らサッカーやるの久しぶりだろ？ブランクが』

「フツ。ブランクだと？普通の奴等ならそうだろうな。だが…俺はお前らとは違つて特別なんだよおお！」

グレファはセンターサークルまで走ると置いてあるボールをエスカバに向かつてシュートした。

エスカバはそのボールをキャッチで止めようとする。しかし、

「ぐっ…！何だよ…このパワー…ぐあっ!？」

シュートはエスカバをぶつ飛ばしゴールネットに突き刺さった。

おおっ!という声がギヤラリリー達から漏れる。

「DJ。異論はないな？」

『あ…はい。…そ、それでは！《オーガ》対《グラフィア・ドメイン》の試合を始めます！』

「くくく…そう言うと思つたぜ」

何か向こうで二人が喋つてるがこっちはそれどころじゃない。俺達はエスカバのところまで走る。

「エスカバ！大丈夫か!？」

「ああ…。グツ！なんて威力だ…！まだ、手がしびれる」

「零、バダップ。棄権した方がいいわ」

「何!？」

「バダップがさつき言つた通り、こちらにはG Kゴールキーパーがない。さつき

の試合は身体能力の高さでぐまかせてたけど、次の相手は『グレファ・ドメイン』よ。間違いなく奴らのシュートはゴールにきまるでしょうね」

「…」

「俺達のシュートが通じないって言うのかよ!？」

「そう言つてるわけじゃないわ。ただ、このまま試合すれば100%シュートがきまる相手と戦わなくちゃいけないってことよ。だから棄権して「無理だな」…え?」

セシルの提案をバダップは却下する。

「何言つてるの!？」

「俺もセシルの案にはついさつきまで賛成だった。だが…もう俺達は棄権できないだろうな。客達を見てみる」

…ギャラリー達のボルテージが最高潮まで上がっている。期待の視線が俺達に向かって注がれていた。

…これじゃあ、棄権なんてできないな。もし棄権なんてすれば、最悪の場合、ギャラリー達が暴徒と化す可能性も考えられる。

あれが、グレファアのカリスマ性ってやつか。恐怖で支配されていた場をここまで盛り上げるとはな。

DJ—YOUがマイクを持って叫ぶ。

『さあ！ギャラリー諸君！《オーガ》対《グレファア・ドメイン》の試合がまもなくキックオフだあ！』

選手（☆がついてるのがGK）

オーガ

バダップ・スリード

古芝セシル

黒野零

エスカ・バメル☆

グレファア・ドメイン

グレファア・アバロニク

さかきとくま  
榊徳馬

ム・チャンファイ

ながおかしゅうじ  
長岡修二☆

もうやるしかないな。いくぞー！グレファア・ドメイン！

## 第八話：いいよ！来いよ！（VS グラファ・ドメイン）

サッカーバトル開始前、俺達はコート隅っこで作戦会議を行っていた。セシルはこの試合から棄権した方がいいとしばらく主張していたが何とか説得できた。

「はあ。で、勝ち筋は見えてるの？何の作戦も建てないならボロクソにやられるわよ」

「いや、あまり見えてないよ。でも…攻略の鍵ならもう見つけたぜ」「え？」

「見たことがあるんだよ。相手チームの二人の選手」

俺はキーパーとフィールドプレイヤーの二人を指差す。恐らく俺達と同じ年かそれ以上、まあ、中学生くらいだろう。

「会ったことがあるのか？」

「いや」

バダップの質問を俺は否定する。すでにグラファ達はコートに立っており準備万端のようだ。

「サッカー雑誌で見たことがある。まずあの帽子を被ったキーパーはながおか長岡っていつて数年前に海外のユースチームでプレーしてた選手だ。

んで、あそこの眼鏡はさかき榊で小学校低学年の日本代表に選ばれた選手」

「他は分からないのか？」

「分からねえ。グラファは初対面だしあそこの女性の選手…女の選手については詳しくないんだ」

女性の選手…おかつぱの黒髪で左足にサポーターを身につけている選手は小さくジャンプを繰り返している。ウォーミングアップのようなものだろう。

「ム・チャンファイよ」

「…え？」

「ム・チャンファイ。韓国の神速と呼ばれたスプリンター短距離走者。しばらく見ないと思ってたけどまさかこんなところにいるとわね。ちなみに長岡や榊は前から『グラファ・ドメイン』にいたけど、この娘は初めて見るわ」



「それでも知ってるのか…やりますねえ！」

「色々訳あつて知つてたのよ。…あと淫？ネタ止めてくれる？汚い」

「センセンシャル…なあ、ところで……………だろ？」

俺はセシルの耳元であることを質問した。セシルは目を見開く。

「え？何でそんなこと知つて…あ、まさか！」

「ああ。これで間違いねえ。俺の言う通りにしてくれ。先取点をとるぞ」

『さあ！両チームの選手！位置につきました！先程凄まじいプレーを見せた初登場のダークホース！《オーガ》！対するはあまりの強さに出禁になった我らがタブー！《グラフア・ドメイン》！はたして勝利の女神はどちらに微笑むのか〜！』

DJ-YOUディージェイユーが叫ぶと周りのギャラリィも熱狂的に応援する。

「グラフア！新参者に負けんじゃねえぞ!!」

『オーガ』！スーパープレーを見せてくれ!!」

「バカヤロー！勝つのはグラフア達に決まってるんだろ！」

応援はどちらかと言えばグラフア達の方が多い気がする。まあ、さつき来たばかりの俺達に比べれば有名人のあいづらを応援した方がいいんだろうけど。

それでも完全なアウエーって程じゃないのは助かる。

『では、キックオフは挑戦者sideの《グラフア・ドメイン》から「いらん」…は?..』

グラフアはセンターサークルにボールを置くとそのまま離れる。

そして、その場にあぐらをかいて座った。

『オーガ』！お前達にキックオフは譲ってやる！よし！遊んでやれ！チャンファイ！榊！」

「ラジャー!!」

「へーい」

俺とバダツプはセンターサークル内に立つ。

「なめられてるな…。グラフィアは動かず、三人で戦う気なのか」

「安心しろ。バダツプ。一点とればあいつも考え直す。今は俺のさっきの作戦通りに動いてくれ」

「分かったが…本当にそれでユースの元キーパーを破れるのか?」

「いや、100%とは言いきれない。だが、確率的にはこのやり方が一番、先取点の確率が高い。あと、この作戦の鍵はエスカバとセシルが握ってる」

俺は長岡を見る。帽子のつばによって顔の左半分しかが見えないが、ニヤニヤ嗤ってることは分かる。あいつもグラフィアと同じように俺達をなめてるんだろう。

十五分を示したタイマーのカウントが始まる。

俺はキックオフしたボールを…相手チームのチャンファイにパスした。

「…!!?」

咄嗟のことで驚くチャンファイ。慌てすぎたのか本来は左足でトラップするところを右足でトラップしてしまう。

だが、彼女はそこをしつかりフォローしてボールを取った。ギロリと彼女は俺達を睨みつけ、なまりまじりの日本語で叫ぶ。

「何ダ!? 私達をなめてるノカ!?!」

「まさか! かかって来いよ!」

「言われなくテモ!!」

「いいよ! 来いよ!」

「待て! チャンファイ! これは僕達を嵌めるための罠「ウルサイ!」…チツ! バカが!」

榊がチャンファイを制止しようとするもチャンファイはそれを無視してゴールに向かってドリブルする。すごいスピードだ。さすが元陸上選手と云うべきか。

それを追いかける榊。このままではチャンファイは俺とバダツプ、さ

らにセシルの三人と競りあわねばならない。

そしてボールを奪われれば、カウンターで俺&バダツプ&セシルV S 榊という、三対一という最悪の戦況を迎えることとなる。

そのために榊はフォローのためにチャンファイを追いかけねばならない。

だが、俺とバダツプはチャンファイと榊を無視して相手陣地へと向かっていく。

「!?」

「フーン!逃げたカ!腰抜けメ!」

相手が自分を恐れて逃げたと考えるチャンファイ。

榊は一瞬驚愕したような表情になるもすぐにチャンファイを追いかける。当たり前だ。このまま行けばデイフェンスはセシル一人。チャンファイ&榊VSセシルとなる。相手の得点チャンスだ。

一人暴走するチャンファイの後ろを僕：榊徳馬は疾走していた。デイフェンスは女一人。対してこちらは二人で攻めている。得点の機会だからこそ落ち着いてプレーすることが重要だ。

「チャンファイ!落ち着け!あの女を突破すれば、キーパーはあの雑魚だけだ!」

「分かってル!」

チャンファイが僕に右足でボールをパス。それを僕はダイレクトでチャンファイに戻す。そのボールはそのまま僕へダイレクトで渡る。それが高速で繰り返される。

するとボールは二つに分身。二つのボールをそれぞれチャンファイと僕はドリブルする。

「デュアルパス!」

本来なら相手が戸惑っている隙に両側から抜く、という動きがデュアルパスの特徴だ。だが、女は僕の方へと一直線に進んでいく。チャンファイの方には目もくれずに。

二分の一の確率に賭けているのか？ だけどデュアルパスは超高速でパスしあう技だ。つまり、どっちかのボールが偽物とかいうわけではない。

どっちも本物だ。故に高速パスを中断すればボールは一つに戻る。

僕はチャンファイにアイコンタクト。向こうも分かっているらしい。女を僕の方に引き付けた上でチャンファイがボールを保持する、この方法を使えば、チャンファイに対するディフェンスは一人もいなくなりキーパーとの一騎討ちだ。

チャンファイは受け取ったボールを僕に返さずに高速パスを中断。僕の足元からボールが消え失せる。

「やれ！ チャンファイ！」

「任せろ！ クンファー「おりやあああああ！」…!？」

チャンファイがシュートを撃とうとした瞬間にそれは起こった。何者かがチャンファイのボールを奪ったのだ。

え？ 僕の思考は停止する。相手のフィールドプレイヤーは先程、僕達を無視して突き進んだ二人と今デュアルパスで突破した女一人の合わせて三人のはず。

じゃあ今のプレイヤーはどこから湧いてきた？

僕はフィールドを確認する。…後ろに先程の二人と女一人。そして、今チャンファイのボールを奪った一人。キーパーも合わせれば相手チームのメンバーの数は五人となる。

「一体どういう！ 榊！ ボールを奪エ！ そいつはキーパーだ！」…そういうことか！」

ゴールを見るとキーパーがいなくなっている。よく見ればチャンファイからボールを奪ったやつはキーパーのつけるグローブを着けていた。

「クソッ！ ボールを「もう遅い！ バダップ、零！ 決めろ！」

キーパーがボールを遠くへ蹴る。コントロールはそこまでよくな

いが前線にいた、少年二人にボールが渡る。

「チャンファイ！戻れ！」

「分かってル！」

キーパーは長岡だ。簡単にきめられないとは思うが…嫌な予感がする。

僕達は自陣に戻るために全力で走った。

俺はエスカバからのロングパスを受け取った。隣にいるバダツプに指示を出す。

「あれいくぞー！」

「…分かったー！」

俺は左サイド…つまり、相手から見て右へ、バダツプは右サイド…相手から見て左側ギリギリへと移動しながらゴール前まで進んでいく。それをグレファはあぐらをかいたまま見送る。

そのまま俺とバダツプはゴールライン付近まで移動する。俺はセンターリングをあげる位置へ。バダツプはゴールの方へと迫る。

だが、この場合でも普通のGゴールキーパーKは気にしないことだろう。俺とバダツプの二人を視界の中に入れておけば問題ない。

そう。普通のキーパーなら。

俺はセンターリングをあげた。何てことない普通のセンターリングだ。それをバダツプはオーバーヘッドでシュート。

普通のキーパーなら取れるよ。うん。普通のキーパーなら…ね。

ゴールネットが揺れた。

『ゴール！先取点は《オーガ》！何とこのコートでセーブ率100%を誇っていた長岡から点をもぎ取った！どうした長岡！全く反応できてなかったぞー！』

「クソッ！」

長岡はボールを取ると地面に叩きつける。相当悔しいのだろう。「通常、センターリングが上がる際……キーパーは一瞬だけゴール前の状況を把握してからセンターリングのボールを見るってのが鉄則だ。けど、あんたの場合、自分から見て右側からのセンターリングは対処できない」

俺は長岡の帽子を剥ぎ取る。隠されていた顔の左半分が明らかになる。

「あんたが隻眼せきがんだからな」

本来左目がある位置には何も無い虚ろな眼窩があった。

『ゴール！先取点は《オーガ》！』

「よっしやあ！バダップがきめてくれた！しかも零の作戦通りだ！」

私：古芝ふるしばセシルは隣で喜ぶエスカバを見る。驚きだ。ここまでやるとは。あの難攻不落の長岡から一点を奪うことがどれ程すごいことか私は知っている。

ギャラリー達もこの信じられない一点に盛り上がっていた。

「すげえ！すげえよ『オーガ』！」

「あのグラフィア達に勝っちゃもうかも……！」

私は作戦会議のことを思い出した。

「なあ、ところで、そのチャンファイって過去に怪我して陸上辞めちゃっただろ？」

「え？何でそんなこと知って…あ、まさか！」

「ああ。これで間違いねえ。俺の言う通りにしてくれ。先取点をとるぞ」

「零。先取点をとるってどうやってとるんだ？相手は元ユースだぞ」

エスカバの質問。それに零は答える。

「その前に考えてみるよ。何でこれだけのビッグネーム達がこんなところに来てるのか」

しばらくバダップとエスカバは考える。私はさっきの質問で分かっていた。

「グラフィアの実力に惹かれたから…か？」

「いや、そういうわけじゃない」

エスカバの回答を否定する零。

「サッカーや陸上の最前線にいたけど、故障しちゃったからここにいるんだよ」

「…そういうことか」

零の言いたいことにバダップは気づく。そう。海外のユースの選手、日本代表、韓国陸上界のホープ。そんな第一線で活躍する人間が何故ここにいるか。

辞めたからだ。病気や怪我で。

「長岡はクロスプレーで片目を失明。榊は心臓の病気で何年もサッカーが出来なかった。それで、チャンファイは…」

零が私の方を見る。私は補足を入れた。

「半月板断裂…その後遺症…」

「そうして、ブランクが出来たり、怪我とかの影響で第一線から退いた人達をグラフィアは集めた…というわけか」

バダップが零が言いたかった残りをすべて言い切る。エスカバはへえくと納得した顔をしていた。確かに、初心者を育てるよりかは経験者や元から運動能力の高い選手を集めれば遥かに効率良く強いチームを作れる。

「今回は長岡の左目の死角を狙う」

「そのためにセンターリングする…ってところ？」

「そういうことか」

「どういうことだよ?」

零の作戦に私とバダップが納得する中、エスカバは首をかしげる。

「エスカバ。もし、相手がセンチリングしたらお前はまずどこを見る?」

「そりゃあ、ゴール前を一旦見てフィールドの状況を考えるよ」

「そうだ。けど、長岡にはそれができない」

「出来ないってどういうことだ?」

「そうだな。とりあえずバダップとセシルのいる方向を向いてくれ。そこをとりあえずゴール前として…」

そう言うとき零はエスカバの体の右側へと移動する。

「さて、ここで俺がセンチリングをあげるとする。まず、エスカバはボールを持つてる俺の方向に体を向けるよな」

「ああ」

エスカバが零の方向を向く。私とバダップを左側に置くような向きだ。

「言ったよな。ゴール前を見て、誰がシュートするか確認するって。当然だけど首をゴール前に向けるなんて時間はないぞ」

「ああ。大丈夫。横目で見ればいいから。バダップもセシルもちゃんと見えるぞ」

「そうね。左目がきちんと見えるのならね」

「え?」

私の発言を聞き私の方を横目でエスカバは見る。

「聞いてなかったの? 長岡は左目が見えないのよ。この状態で左目をつぶればどうなるか貴方にも分かるでしょう?」

私の言葉を聞いてエスカバは左目をつぶる。

「…見えない。バダップ達が…ゴール前が全然見えない。やばいよ。こんなんでシュートを止められるわけない」

「そう。この死角を狙う」

零はそう言って私とバダップのいる方向へ戻る。

「そのためには相手のフィールドプレイヤー全員を俺達のゴール前に



引き付けておく必要がある」

「じゃあ大丈夫よ。グラフィアはいつも試合序盤は相手の実力をなめてかかって座ってる。チャンファイと榊は私とエスカバの二人がかりで抑えるわ」

「えつと…俺、キーパーだけど？」

「さつき言ったでしょ。貴方は元々キーパーじゃないし向こうのシュートを止めるキーパー技はこちらにはない。キーパーが居ようが居まいが関係ないのよ」

「つまり、俺もフィールドプレイヤーとして動けと」

「そういうことだ」

バダップが頷いた。もはやシュートを止められないのならキーパーをなくしてしまい、ディフェンスの一員として動かす。

文字通りの『背水の陣』。だからこそ、相手はキーパーをフィールドプレイヤーに変えるなんて発想に至ることはない。この作戦はある意味奇襲性が高い。

「でも、もしこの作戦が相手にばれたら…」

「ああ。正面突破しかもう手段はない。まあ、別に問題はないよ。スポーツなんて最後は力と力のぶつかり合いだ。作戦なんてその延長でしかない」

「…そうね」

私は零の能力に敬服する。これほどとは思わなかった。『グラフィア・ドメイン』の弱点を一瞬で見抜く、洞察力。こいつは本物だ。

…さすが転生者。

「くくくく…はあーはっはっはっはっ！」

会場内に響き渡る笑い声。それははたして強敵が現れたことに対する嬉しさを示しているのか。はたまたこの程度の相手に一点とられたのか、という仲間への嘲笑か。

「おもしろえー！こいつは退屈しなさそうだな！」

今まで座って試合を傍観していた男はゆっくりと立ち上がる。

「長岡。ボールを寄越せ」

「…分かった」

男は仲間からボールを受けとるとセンターサークルに置く。

会場のボルテージがこれでもかというほどに上がる。

『な、な、なんと！グラフィアが立ち上がった！それほどまでに《オーガ》は強敵ということでしょう！』

「さあ…始めるか」

まだ試合は始まったばかり。客達も、DJも、敵チームの選手達も、味方でさえも皆が分かった。

ここからが本番だということを。

## 第九話：ダイナモ感覚と天使（VSグラフィア・ドメイ ン）

グラフィアが立ち上がる。この意味はすぐに俺でも分かった。いや、会場にいる誰もがもう分かる。

眠れる獅子の尾を踏んだということは。まあ、こちらはわざと踏んだんだが。

「来るぞ…」

隣にいるバダツプが俺に言う。分かってる。だが…

「すげえプレッシャーだな…」

とんでもない濃度の殺気…ヒビキ提督レベルだ。だが、彼は恐らく無意識に出しているのだろう。

構図で見れば、俺達は狩られる獲物で向こうは楽しむためのハンティングしに来たハンター…って感じかもしれない。

まあ、とにかく言えることは一つ。

こいつは…強い。

『それでは…試合再開です！』

DJ—YOUディージェイユーが叫ぶと同時にタイマーが再び動き始めた。

グラフィアはチャンファイにパス。そのままゴールへと突き進んでいく。

チャンファイもドリブルで攻め上がっていくがそうはさせない。このまま彼女を進ませれば確実にボールはグラフィアに渡る。

そうなれば確実に一点とられる。すなわち、先程のプレーが水泡に帰すこととなる。絶対止めなきやならない。

「エクスプロード・ボール！」

「ぐっ！」

炎のオーラをボールにぶつけてボールを爆破。チャンファイがボールから離れた隙についてボールを奪う。

「止めるー！」

「ラウンドスパーク！」

榊が行く手を阻むも俺はボールを蹴りあげる。蹴りあげたボールは電気を帯びる。そのボールを榊に向かって蹴る。電気を帯びたボールは四つに分裂し榊の動きを封じた。

「さつきと同じパターンだ！バダツプ！」

「ああー！」

榊を抜いた俺はバダツプに指示を出す。あれを行うのだ。先程ゴールをきめたあの作戦を。

俺は再び右サイド、バダツプは左サイドへ。

せきがん 隻眼の長岡ながおかの死角を狙うセンターリングだ。

俺はコーナー付近からセンターリングする。そのボールをバダツプがダイレクトでシュートしようとしたその時だった。

「さつきから…俺をなめやがって！津波ウォール！」

「なっ?!ぐああああああ!!」

長岡の前に津波が突如発生。それはバダツプごとボールを飲み込んだ。

「確かに俺には左側に死角がある！だがどうした！それをカバーする必殺技さえあればいい!!」

津波ウォール。ゴール前を津波でカバーする必殺技。死角があってもシュートポケットやパワーシールド等のゴール全体を覆いつくす必殺技ならシュートを止められる。

ボールは一気にグラフィアのいるこちらのゴール付近に落ちる。

「しまったー！」

こちらのゴール前にはエスカバとセシルがいるが、それを合わせても向こうは三人。二対三でこちらが不利だ。

落ちたボールはセシルがとった。が、

「そのボールは俺のものだああああ!!」

「セシル！こつちだ！」

「くっ！エスカバ！」

グラフィアが強引にセシルからボールを奪おうとする。しかし、エスカバにボールをパスするセシル。

「頼む！バダツプ！零！ボールを「カオスステイル！」…うわああ

あ！」

戻って来ている俺達へパスをしようとしたエスカバにさかき榊とチャン  
ファイが二人技でディフェンスした。ていうか今のフローズンス  
テイルとイグナイトステイルの合わせ技じゃないか！

「グラフィア！キメロー！」

「くくく…そう言うと思ったぜ…ん？」

ギ、ギリギリ間に合った…俺とバダップはグラフィアとゴールの  
間に立つ。

「絶対に点は渡さない…！」

「ほう…。残念だが、お前達程度では俺は止められんなあ」

「ほぎけー！」

バダップがボールを奪おうとグラフィアに近づく。しかし、奪えな  
い。いつまでたつても。グラフィアは絶妙なボールさばきでバダッ  
プを翻弄する。

「くくく…どうした？この程度で俺を止めるだと？」

グラフィアはボールをシュート。ボールは俺もバダップもぶっ飛ば  
してゴールへと吸い込まれていった。

『ゴール！《グラフィア・ドメイン》が一点を返した！これがグラフィアの  
力！圧倒的だ！このまま《オーガ》は押しきられてしまうのか？！』

俺は地面に背中から叩きつけられる。

「ガハッ！」

見えたのは曇っている空にニヤニヤと嗤うグラフィアの姿。

「見たか？見たなあ。俺とお前らの圧倒的な力の差を」

「まだだ。まだ、試合は終わってない。それにまだ…同点だ」

「くくく…そう言うと思ったぜ。せいぜいこの俺を楽しませろ。

『オーガ』

そう言うときグラフィアは自陣へと戻っていった。

「零。大丈夫か？」

バダップが倒れている俺に駆け寄る。

「お前もぶっ飛ばされてただろ？お前の方こそ大丈夫か？」

バダップが差し出した手を俺は掴んで立ち上がる。そこにセシル

とエスカバが合流する。

「強いわね。ここまでとは思わなかったわ」

「ああ。向こうのシユートは強烈。対するこちらはさつき成功した作戦がもう使えなくなっちまってる」

「しかも、グラフィアは必殺技すら使ってない」

グラフィアを除けばほぼ互角だったのに一人入るだけで全然違う。

「とりあえずグラフィアはエスカバとセシルの二人がかりで対処してくれ。バダツプと俺は追加点のために攻めるぞ」

「分かった」

「待ちなさい。チャンファイと榊はどうするの?」

「あいつらはもうシユートはうってこないよ」

「え?何で『さあ!試合時間は残り十分!たった十分!されど十分!果たしてこの十分はどのような展開を我々に見せてくれるのか!?!』」

DJ-YOUディーシェイユの声でセシルが何を言ったのかは分からなかったが俺はセンターサークル上のバダツプの隣へと移動する。

「バダツプ。もう出し惜しみはなしだ。派手にやるぞ」

「ああ、俺達の本気を見せてやる…!」

…ここまで熱いバダツプは初めてだ。思い出す。バダツプがザゴメルに負けたあの試験のことを。

今まで負けを知らなかった男が負けを知ったときどうなるか…。バダツプの目には『俺は…負けたくない!』という某決闘者風の感情が宿っているようだった。

タイマーのカウントが再開すると同時にボールを蹴る。

「よし、行く「ボールを寄越せええええええええ!」…!!」

それと同時にグラフィアが俺に向かって激しいタツクル。俺とバダツプはボールを奪われる。なんて速さだ。必殺技を使う時間すらなかった。

ドリブルで上がっていくグラフィア。二人がかりでディフェンスにかかる、エスカバとセシル。

「てめえらも邪魔だ!」

グラフィアがシュート。圧倒的なパワーで蹴られたボールはセシルをぶつ飛ばし、キャッチしようとするエスカバもろともゴールに突き刺さった。

俺がセンターサークルからボールを蹴ってからわずか十秒間の出来事だった。

『ゴール！強い！圧倒的強さだ！これがグラフィア・アバロニク！これが《グラフィア・ドメイン》！』

ギャラリー達が歓声をあげる。完全に場がグラフィアに吞まれている。先程まで俺達を応援していた人達まで、皆グラフィア！グラフィア！とコールしていた。

そのコールを聞きながらグラフィアは嗤う。

「くっ…これほどとはな…」

グラフィアが立ち上がってわずか数分しかたつてないのにこちらは全員がボロボロになっていた。もう、センターサークルにボールを置くのさえ、きつかった。

「バダップ。俺が…俺が、グラフィアを引き付ける。だから、あれを使え」

「…ダメだ。相手はグラフィアだ。大ケガする可能性がある。仲間として、お前にそんな役割をさせるわけにはいかない」

「頼む」

俺は拒否するバダップに頭を下げた。

「…」

「俺も…俺も仲間として、バダップ達を勝たせたいんだ…」

「…分かった。零。約束しろ。…死ぬなよ」

タイマーのカウントが始まる。残り約九分。俺はグラフィアに向かってドリブルで近づいていく。

グラフィアの体が迫る。まだまだ。もっと引き付けて…。

「うおおおおお！」

「ははは！ボールは頂いた！」

体に強い衝撃を感じて俺はグラフィアのタックルでぶつ飛ばされる。視界が二転三転する。だが、俺は何とか視界の隅にいるバダップを捉

えることが出来た。

「バダップーきめろー！」

そして、地面に落ちたのだろう。もう一度強い衝撃を受ける。

俺の意識はブラックアウトした。

「ははは！ボールは頂いた！」

グレファア・アバロニクはそう叫ぶと零にタツクル。零はまるでダンブカーにでもはねられたかのように回転しながら空中に放り出された。

そして、グレファアはボールを奪おうとした。

しかし、そこにボールはなかった。

「:!?!」

誰かにパスしたか?! いや、ついさつきまでドリブルしていた零はパスする素振りを見せていない。

ボールはどこに消えた!?

グレファアは前後左右を見回すがボールは影も形もない。

これが:前後左右にボールが無いということが意味する答えは一つだけでもある。

「上か！」

グレファアの言葉にチャンファイとゴールキーパーG Kの長岡も反応して上を見る。

そこには確かにあった。上空へと上がっていくボールが。

それと同時にグラフィアはあのタツクルの際に何があったのかを理解する。

零はタツクルを受ける寸前でヒールを使ってボールを蹴りあげたのだ。

普通にボールを上空へ蹴り出せば、敵チームの選手達に気づかれる



がヒールで蹴れば零自身の体がボールを隠すためのブラインドとなり、反応を遅らせられる。

さらに、選手の視線はここまで二得点をあげたグラフィアに集まっているというのもこの『ヒールキック』という動作が気づかれない要因の一つとなった。

だが、一人だけこの『ヒールキック』に気づいた者がいる。

上空のボールにバダップがジャンプして近づいていく。ジャンプにワンテンポ遅れてしまった『グレファ・ドメイン』の選手達ではもう止められない。

「バダップ！きめろー！」

零が叫ぶ。バダップは両足を使って空中のボールに回転をかける。回転軸がシュート軌道と一致する回転…ジャイロ回転をかけられたボールは赤黒い邪悪なオーラを発しながら形を変え、まるで一本の槍のようになる。

「デス…スピアー！」

一本の槍と化したボールはそのままキイイイインという不気味な音をたてながらゴールに迫る。

チャンファイも榊もデスピアアの持つ強力な圧でボールに近づくことすらできない。

だか、グラフィアなら話は別だ。

「ふんっ！」

デスピアアを蹴り、シュートの威力を削ごうというのだろう。

しかし、少しずつ、グラフィアの表情に余裕がなくなっていく。

「…!!この力は…何だ!?!」

グラフィアの足は弾かれデスピアアはゴールへ向かっていく。

「津波ウォール！」

長岡の前に津波が出現するも津波の壁を貫いてデスピアアはゴールに入る。ギャラリー達が歓声をあげる。DJ-YOUが叫ぶ。

『同点だ！同点だ！同点だ〜!!《オーガ》！実力者のグレファを退けての同点ゴールだ〜!!』

「よっしやああああ！」

エスカバが歓喜の咆哮をあげる。

だが、バダツプは喜ばない。まだ2対2の同点。さらにグラフィアは必殺技を使っていない。状況は全く好転していないのだ。

残り時間は…とバダツプがタイマーを確認しようとしたその時だった。

「審判！試合を中断して！零！起きて！零！零！」

バダツプの後方から仲間である古芝ふるしばセシルの声がした。

…え？零？

後ろを見る。そこにあつたのは

倒れて動かなくなった友の姿だった。

「…ん」

俺は目覚める。青い空がまぶしい。あれ？さつきまで曇りだったはずじゃ…？

…そうだ！俺はグラフィアのタックルを受けて…！

「し、試合は!?試合はどうなった!?!」

起き上がって辺りを見回す。しかし、そこはさつきまで試合していたコートじゃなかった。緑豊かな森の中だった。

「何だよ(´・`・´)」

「目覚めたんだね。おはよう。約十年ぶりだね」

聞いたことのある声が後ろから聞こえた。なんか懐かしいけど思  
い出せないな。誰の声だっけ？

後ろを見ると、そこにいたのはえんどうまもる円堂守の姿をした少年だった。間  
違いない。俺を転生させた神だ。

「…久しぶりだな」

「ああ。君にとっては久しぶりでも僕にとってはそうでもないな。な  
んせ僕は君のことをずっと見てたから」

…何だ？今の言い方。『ずっと見てた』…だと!?

「さては貴様ホモだな!」

「ないです。というか僕に性別の概念はない。この姿はしたくてして  
いるだけさ」

即座に否定する神。俺は辺りをもう一度見回す。

…ん？何だあれ？百メートルくらい先に何かあるぞ。

俺の見つめる先にあったのは巨大な何か。大樹…のように見える  
がどこことなく非自然的な感じがする。周りの木々が邪魔で全体像が  
見えないが。

「早速見つけたか。じゃあ僕についてきて」

神はその不思議な大樹の方向に向かって歩き出す。俺はそれにつ  
いていく。

しばらく歩くと漸くその大樹の全体像が見えた。巨大だ。高さ百  
メートル位はある。首が疲れるな。

大樹は普通の木ってわけじゃなかった。そこには十個の赤や青、虹  
色などの光輝く玉がついていた。いや、光輝いていない玉もあるな。

まず、樹の一番上、もし、この樹がクリスマスツリーなら星を飾る  
であろう位置に白色の玉が、その真下に三つの玉…上から黄色、紫、虹  
色の玉がある。

さらに先程の一番上の白色の玉の右下には灰色の玉、その灰色の玉  
の下には上から青、緑の玉が。

さらにさらに、一番上の白色の玉から左下には黒色の玉、その黒色  
の玉の下には赤、オレンジの玉がある。

ちなみに、緑、黄色、紫の玉は光を失っている。

「何だ？これ」

「生命の樹：人間が手にすることの叶わなかった夢さ。ここに人間を連れてくるのは四人目になる」

神はそう言うのと大樹の幹に触れる。すると、大樹の玉のうちの一つ、灰色の玉が強く光始めた。

「さあ、転生者。君に力を与えよう。なに、転生特典というやつさ。でもそこまでチートってわけじゃないからそのへん注意してね。あと返品はお断りだ」

強い光だ。数メートル先の神の姿が見えないほどその光は強かった。

何かが体の中に入ってくる感覚。その何かは体の中に入ると体の中を駆け巡りそして、心臓へ。心臓の鼓動が強くなる。どんどんどんどん強くなる。

体が熱い。このまま心臓から溶けてなくなってしまうんじゃないか：そう思えるほどの熱さだった。

そして、俺の意識は本日二度目のブラックアウトをした。

目が覚める。見えたのはどんよりと曇った空。

起き上がって辺りを確認。：よかった。元の場所だ。

「ぐあああああー！」

「きやああああー！」

それと同時に叫び声。そちらの方向を見ると、バダップとセシルがチャンファイのシュートで宙を舞ってるところだった。そのまま二人は地面に落ちる。

：あいつら、三人になっても試合を続けていたのか!?と、得点はどうなってる？

得点版に記されている得点は

オーガ 2ー9 グラファ・ドメイン

もう、グラファは地面に座っており、残り三人で戦っている。一見三対三だが、こちらはグラファを止めるために満身創痍、対する相手の三人はグラファにほとんど試合を任せていたために疲労はそこまですたまっていない。

試合時間は残り三分。

「ハリケーンショット！」

榊が、空中でボールを足に挟むと体をひねってボールに回転をかける。回転をかけられたボールは強力な風をまとう。そのボールを榊はかかと落としでシュート。ボールは纏った風でバダップ達を吹き飛ばしてゴールへ。

『ゴール！《グラファ・ドメイン》十得点目！《オーガ》なす術無しだ〜！』

「そんな…」

バダップ、セシル、エスカバは倒れたまま動かない。俺のせいだ…。俺が気絶してなけりゃこんなことには…。

「仲間を助けられなかった罪で心がいっぱいか？少年」

声が出た。俺がついさっきまで寝かされていたベンチの隣にそいつは立っていた。赤い髪のボブの女性。真っ赤な鎧を身に着け、真っ赤な瞳でこちらを見ている。右手には辞書のような本を持っていた。顔には凜とした美しさを感じる。

だが、そんな鎧なんていうキテレツな格好をしている彼女は誰にも注目されてない。まるで俺にしか見えてないような…。

それに、その背中についている真っ白で綺麗な翼と頭の上に浮いている金色のわっかは…

「天使みたいだ…と言いたいのかな？事実、私は天使だが」

「な、なぜ女なんだ…？」

「まあ、そこは気にしないでくれ。私は君以外の人間には見えることはない」

「何だよそのご都合設定」

「納得いかないか？じゃあ、ダイナモ感覚だ。ダイナモ感覚が君に備わったから君は私が見れるんだ」

「…じゃあそれでいいよ（半ギレ）」

「さて…少年。このまま終わるか？それでも仲間をこんな目にあわせたあいつらを倒すか？」

自称天使（笑）はグラファ・ドメインの奴等を指差す。

…倒したい。確かにあいつらは許せない…でも…

「無理だ。残り三分で八点差を返すなんて」

「ふふつ。一体君は何を言ってるんだ？」

「…え？」

「なにも試合に勝つことが『倒すこと』にはならんだろう？」

彼女はクスリと笑う。

「少年。ここで君がグラファより強いということを示せばいい」

「そんなこと…」

「出来る。今の君なら」

彼女はクスクス笑ってはいたが目は真剣そのものだった。

「君は神によって力を与えられた。グラファと同等に戦う力がついてるよ。それに…君がここで諦めたら…バダツプ達に申し訳がたたない」

「…」

「彼等が三人になっても試合を棄権しなかったのは何でか分からないか？彼等は君を待ってたんだ。意識を取り戻した君がフィールドに戻ってくるのを」

「…」

彼女は続ける。

「君が貰った力は君が自分で努力して手にいれた力じゃない。君がその力を使うのを洩るのは分かる。だが、ある男から言わせればこうだ」

「With great power comes great

responsibility(大いなる力には大いなる責任が伴う)」

「…!」

「力を手にした時点で君の運命は決まった。少年。大いなる責任のもとにバダップ達を救え。このまま試合が終われば、バダップ達はサッカーするたびに、この試合の恐怖がフラッシュバックするだろう。そうなれば二度と彼等はサッカーが出来ない」

「…」

「どうした?だんまりか?少年」

「…あのさ、少年って呼ぶのやめてくれないか?俺には『黒野零』って名前があるんだ」

「そうか。じゃあ、黒野「零でいい」:零。私も自己紹介をしよう。私の名前はラツイエル。天使だ」

俺は座っていたベンチから立ち上がる。DJ-YOUが俺に気づくと近寄ってくる。

『だ、大丈夫かい?』

「ええ。いつでもいけます」

『分かった…。さあ!ここで!《オーガ》は先程まで気絶していた黒野零を投入!残り時間は三分!はたして、三分で黒野はどんなプレイを見せてくれるのか?!』

「行くぞ!転生者!」

ラツイエルが俺に言う。

「ああ!」

俺はフィールドへ一歩足を踏み入れた。

第十話：(チートじみた能力は) ないです (VSグラ  
ファ・ドメイン)

俺はまず、倒れているバダツプに駆け寄った。

バダツプは倒れたまま、ピクリとも動かない。

…まさか、死んでないよな？

「バダツプーバダツプー…大丈夫か！バダ 「死んではいない。気絶しているだけだ」

ラツイエルがバダツプの顔を覗き込んで無事を俺に知らせる。その時、バダツプの顔面に水がビシヤリとかけられた。

「げっ…げほっ…おえっ！」

水が鼻の中に入ってきたためにむせて、バダツプは目を覚ます。水をかけたのはセシルだった。水は喉が乾いたギャラリー達のために用意されている水道から両手で汲んできたものらしかった。

「セシル…」

「…貴方がいなくなつて大変だったのよ。こっちは防戦一方で八点もとられた」

「…ごめん」

「別にいいわ。もう起きたことの責任を追及しても過去は変わらないしね」

「…もう少し優しい起こし方は…げほっげほっ！なかったのか？古芝ふるしばセシル」

「あら？スリード議員の息子ともあろう者がこの程度で怒るのかしら？」

謝る俺。許すセシル。少しだけ怒ってるバダツプ。そこにエスカバがフラフラと合流する。

「はは…バダツプの言う通り時間内に起きてきたか。すげえな」

「ごめん。迷惑かけた」

「はは。そんなこと言うなよ。お前の方が絶対今キツイだろ？」

エスカバの言う通り、俺の体はもはや限界に近い。足はガクガクす



るし意識も霞んでいる。それに全身が痛い。

でも、それでも止まることは出来ない。彼等がここまで繋いでくれたのだから。

俺は鎧を纏ったラツイエルに他のやつらに気づかれないように話しかける。

「なあ。俺に与えられた力って何だ？」

とりあえず俺が神によってどの程度強化されたのかを確認しよう。そうすることで多少の作戦はたてられるかもしれない。

ラツイエルは微笑むとこう答えた。

「神が零に与えた力はシュート技だけだ」

…え？今こいつ何て言った？シュート技だけ。必殺技なんて所詮、身体能力の延長。今、この試合に必要なのは高い身体能力とかなんだけど。

「チートじみた運動能力は？」

「ない」

「じゃあ頭が良くなったのか？」

「いや、別に良くなってはいない」

「あっ…（察し）感覚器官が超絶強化「ないです」…」

あのさあ…（呆れ）。俺はジトツとした目でこの無能天使を見る。しかし、ラツイエルも俺と同じような目をしていた。

「零は何か勘違いをしている。神も言っていただろう？『チートではない』と。だが、確かに今の零には大いなる力がある」

「どういうことだ？」

「つまり、神が与えた力関係なく、今の零はグラフィアを倒せる」

…よく分からない。グラフィアの力は圧倒的だ。序盤からぶっ飛んだ運動能力を見せてきた。そんな奴より今の俺の方が強いだろ？

「冗談きついで。じゃあ何だ？俺は神に会わなかったとしてもグラフィアを倒せるって言うのか？」

「ああ。そうだ」

ラツイエルはどや顔で即答する。

「なあ。一体どういう「零」？試合が再開するぞ」…うん。分かったよ」

質問しようとした俺の言葉をエスカバが遮る。その隙にラツイエルはベンチへと移動：もとい逃げていった。

ラツイエルのやつ、嘘言つてないよな？

本当に今の俺にグラフィアが倒せるのか、分からない。でも、試してみる価値ならある。というかラツイエルが言つてたことを信用して動かないと他に動きようがない。

グラフィアが立ち上がる。どうやら先程の失点の原因である俺がフィールドへ戻つてきたことによつて立ち上がったのかもしれないな。

「黒野！<sup>くろの</sup>さつきは騙されたが先程のような小手先の技はもう俺には通用せん！残り三分で俺がお前を遥かに凌駕しているという事実をお前の身にたつぷりと味わわせてやる！」

グラフィアは俺を指差してそう宣告した。

DJ-YOU<sup>ディーージェイユー</sup>が叫ぶ。

『試合再開！』

それと同時にタイマーが動き出す。俺はボールをバダツプにパス。それをバダツプは俺にダイレクトで蹴りかえす。

「ボールはもらったあああ！」

グラフィアが超スピードでこちらに疾走してくる。

…あれ？なんかおかしくね？

「これって…」

そして俺は…グラフィアのタックルをかわした。

「!？」

ギャラリー達がどよめく。フィールドに立っている全プレイヤーが驚愕したことだろう。一番驚いたのはグラフィアだ。俺は抜き去つたグラフィアを確認する。

グラフィアはこちらを見て、信じられないといった顔をしていた。

この時、俺は思った。

こいつ…もしかすると…サッカー下手くそなんじゃ…？

「行かせなイ！」

チャンファイが俺の前に立ちふさがる。後ろを確認する。グラフィア

とバダツプがこちらに近づいてきている。

「バダツプ！」

俺はバダツプにボールをパスして、ゴール前へ移動する。そう。グラファの近くにいるバダツプにパスした。

バダツプは驚いた顔をしてボールを受けとる。グラファは気づいたようだ。自分がなめられていることに。

今、俺はチャンファイとの競り合いではなく、わざわざグラファの近くにいるバダツプへのパスで突破を図った。

つまり、グラファよりチャンファイの方が脅威だと判断されたらグラファは思ったのだろう。

「貴様！俺をなめるなああああ！」

そして、事実、俺は……

そう判断した。

「……バカな……!?この俺が……!?」

バダツプがグラファを突破する。そして、ボールをあげる。チームの中核のグラファが二度も突破された……このことから『グラファ・ドメイン』のメンバーは動揺してあげられたボールへの反応が遅れる。

それは致命的な隙だ。

俺はあげられたボールに向かって飛ぶ。そして、オーバーヘッドキック。蹴られた瞬間にボールに二枚の大きな赤く光輝く翼のオーラが現れる。

「ラツイエルウィング！」

ボールがまるで鳥のように力強く羽ばたきながらゴールへと向かっていく。

「クツ、キルブリッジG2！」

黒いオーラを両手に具現化させ、それをまさにブリッジ……橋のように形作る。しかし、ボールはそのオーラを圧倒的な力で霧散させた。

「どわあああああ！」

『ゴール！わずか一分で《オーガ》、三点目！グラフィアを突破してのゴールだ〜！』

「なぜだ…なぜ俺がこんな奴等に…!？」

俺とバダツプがグラフィアとすれ違う際にグラフィアは確かにそう言った。

今なら分かる。ラツイエルの言葉の意味。そして、なぜ、俺とバダツプがグラフィアを突破できるか。

「バダツプ。まだいけるよな？」

「…ああ。まだ、俺達はいける」

俺の言葉にバダツプは頷く。

グラフィア・ドメインのボールで試合が再開。チャンファイからのパスを受けたグラフィアは一直線に俺達に向かって走っていく。

「俺が…俺が負けるはずがない！俺は…最強のはずだあああああ！」

その彼のボールを俺とバダツプは無慈悲にも奪い取る。

「バダツプ！デススピアーだ！」

俺のあげたボールをバダツプがジャイロ回転をかけることでボールが槍へと変貌。

「デススピアーV2！」

「津波ウォール！」

しかし、進化前のデススピアーすら止められなかった津波の壁が止められるはずもなくゴール。

ギャラリー達のボルテージが一気に上がった。

「グラフィアがボールを奪われた!？」

「やばいよやばいよ！」

「ヒーハー！」

そして、悔しさが滲み出るような咆哮がコート内で響き渡る。

「うおおおおおおおおおおお！」

グラフィアだ。…まずいな。暴れだしそうで怖いんだけど。

なぜ、グラフィアを突破できるか。それは、俺達のリミッターが少しだけ外れたからだ。

元来、人というのは生命の危機等の極限状態に置かれない限り、普

段は30%ほどの力しか出せないと言われている。

しかし、極限状態に置かれればそのリミッターが外れ、普段以上の力を発揮することが出来る。

サッカーで極限状態なんておかしいと思うかもしれないがその極限状態にもってかれるほどグラフィアの攻めは苛烈だった。

だが、多少の身体能力の強化でグラフィアを止めることはできない。だが、先程の火事場の馬鹿力というのは身体能力以外の能力値にも補正をかける。

それは…感覚器官だ。視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚の五感だ。だが、それだけではなく、頭の回転や反応スピードなども向上する。実際、リラックスした後よりも激しい運動した後のほうが視力検査等のテストの出来がいいというデータがある。

これによって一時的とはいえ、俺達はグラフィアのパワーとスピードに対応出来るようになったのだ。

ここで、もうひとつ。グラフィアは圧倒的なパワーとスピードを誇っているが、大きなものが彼には欠落している。

それは…技術だ。パワーとスピードでごまかしてはいるが、間違いなく技術は俺達の方が上だ。事実、グラフィアはここまでフェイントなどのプレーを一切していない。まあ、大半の相手はパワープレーで割り押し出来るから使わないのだろう。

だが、そのパワーとスピードに対応されたら？もしも自身の得意分野の上をいく選手が現れたら？

当然技術での勝負となる。しかし、グラフィアにはその肝心の技術がない。今までパワーとスピードでなんとかできていたのだ。技術を磨くタイミングがなかった。

グラフィアはチャンファイからボールを受けると再びゴールに向かってドリブルする。

「行かせな「どけえええええ！」…ぐあっ!!」

俺とバダップがディフェンスに入るが今度はグラフィアは先程以上の強引なプレーで突破。下手をすればファウルともとれる危険なプレーだ。

「おらあ！」

グラフィアがシュート。ボールはゴールへ一直線。

「行かせねえよ！うおおおおおおおおおおお！」

エスカバがボールを蹴り返そうとするも単純なパワーだけならリミッターが多少外れていてもグラフィアの方が上だ。

「ぐっ!?…くっそおおおお！」

エスカバの足は弾かれる。エスカバは叫んだ。止められなかった。たった一人にまた点を取られるのか？嫌だ。

グラフィア・ドメインはシュートが入ることを確信した。いや、彼等だけじゃない。俺も、バダップも、ギャラリー達でさえそう思った。

そのシュートが地面からせり上がってきた水晶の壁に阻まれるま  
では。

「クリスタルウォール改！」

セシルがその必殺技名を叫ぶ。水晶の壁はシュートの威力を完全に殺す。そして、セシルの前にポトリとボールは落ちた。

「ボサツとしないで！零！バダップ！もう一点よ！」

セシルがボールをゴール前までロングパス。俺はボールを空中でトラップ。その時見た。グラフィアが俺達のゴール前で膝をついている姿が。

「止めろ！<sup>さかき</sup>榊！」

「分かってるよ！」

キーパー<sup>ながわか</sup>長岡の指示と同時に榊が俺に向かって飛び上がる。空中戦でボールを奪おうというのか。

バダップのデススパアーのためにより上空にボールを蹴り出そう  
…とするが、バダップはチャンファイからマークされておりパスが出せない。

長岡はニヤリと嗤った。完全に攻撃を止めたと思ったのだろう。だが、それは間違いだ。

さて、俺は現在長岡から見て右側に立っている。長岡は左目が隻眼だ。長岡は俺の方…すなわち右側に体を向けている。

では、ゴール前が長岡に見えているか？答えは否。

「エスカバー！」

俺は逆サイドを走るエスカバにパス。そのボールをエスカバはボレーシュート。このパターンは一点目と同じ。死角をつくシュートだ。

そして、長岡は対処法は分かっているが、さつき止められた作戦をもう一度こちらが使うなどと夢にも思っていなかった。

ゴールネットが揺れた。

『ゴール！素晴らしい！見事な連携で《オーガ》は五点目を獲得した！』

そして、タイマーが試合終了を知らせるビーツという音を出した。

『試合終了〜！勝ったのは《グレファア・ドメイン》！10ー5という圧倒的大差で勝利した〜！』

しかし、ギャラリー達は分かっていた。『グレファア・ドメイン』の勝利を宣言したDJ-YOUもきつと分かっていただろう。

この試合の本当の勝者が。

「くそおおおおお！見えていれば！見えていれば！！止められたんだ！今のシュートも一点目も！くそおおおおお！」

長岡が叫ぶ。何度も何度もゴールポストに頭をぶつける。それをグラフィアが止めた。

「グラフィア…」

「止める。見苦しい。確かに俺達は試合に勝って勝負に負けた。事実、向こうが三人になったっていうのも俺達が勝てた理由だな。四対四の状態ならどうなったか分からなかった」

グラフィアは続ける。

「だからどうした？」

「…」

「この負けを糧にして俺達も努力すればいい。長岡。やけになるな。なった者はそこで敗北者だ」

「…すまない。やけくそになってた」

俺は、グラフィアが長岡を励ましながらも左手を強く強く握りしめているのを見た。

この試合で、もつとも苦汁を飲まされたのは間違いなくグラフィアだ。だが、彼はキャプテンという立場上、さっきの長岡のように振る舞うことは出来ないのだろう。

最初に見た時はかなり傲慢な男と思っていたけど、こうして見ると彼がキャプテンの器と分かる。

ラツイエルが俺の横へと近づく。

「あの『グラフィア・ドメイン』というチームは間違いなく強くなるな。零。君も負けてられないぞ」

「分かってるよ」

「黒野零！」

グラフィアが叫ぶ。そして、彼はクシヤクシヤになった紙を俺に向かって投げつけた。

俺はそれを左手でキャッチする。

「俺達はその紙に書かれた大会の本選に出場している！お前達も予選を勝ち上がり俺達の元に来い！その時こそ本当の決着だ！…行くぞ。お前ら」

グラフィアはそう言ってこのコートから去っていく。

俺は紙を開く。そこに書かれていたのは

「『これがサッカーバトルの殿堂！強者達よ！ S B Fに挑め』…」

サッカーバトルフロンティア

「サッカーバトルの大会だな」

ラツイエルが俺のしているチラシを見て言った。

「え？」

「始まったのは三十二年前、かみくろざいばつ神藏財閥が持っている土地の一部をフリーのコートにしてサッカーの普及を進めるために始めたものだ。四人制のサッカーという小規模なものにすることでメンバー集めを簡単に行っている。なるほど。これにグラフィア達も出るわけか」

ちよ!?!メチャクチャ饒舌になったんですけど!?!

「ちなみに予選は神藏財閥が持っている32の小さなサッカーコートで行われる十五分の本勝負。優勝したチームのみが本選へと進める。それから本選は…」



固まるラツイエル。しばらく固まった彼女は顔を真っ赤にしてうつむいた。

「す、すまない。わ、わ、私は知恵を司る天使だからこういうことをよく知ってて…。あ、でも、いつもはこんなにいるさくないから！本当だから！」

「…分かったよ。お前のことは家に帰ったらたつぷりと教えてもらおうさ」

「…今教えてもいいんだぞ？」

「いや、後にしてくれ。俺はまだやることがある」

「おい。零。なに独り言ぶつぶつ言ってるんだ？」

「あ、いや、何でもない。それよりバダップ！364364！これ！」

俺は怪訝な顔をしているバダップに紙を見せる。エスカバとセシルもいつの間にか来ており、紙を覗き込んだ。

「…というわけで『グラフィア・ドメイン』から招待状ってわけだ。どうだ？この日ってみんな暇か？」

「…俺は暇だ」

「同じく」

「なら、参加しましょう？私も暇だから」

バダップとエスカバが暇と答えるとセシルが参加を促す発言をする。

ちなみに俺も暇だ。なぜなら、この日は軍部発足記念日。国民の祝日の一つだ。バダップとエスカバは軍部の親がいるけど暇だったのはよかった。

「じゃあ、参加するか」

メチャクチャ嬉しかった。だってついさっきまでサッカー仲間バダップしかいなかったんだぜ？俺は大会とかに参加するのはもつと先だと思ってた。

でも、たまたまエスカバがサッカーをやっていたことがあって、今日たまたまセシルがこのコートで試合を観ている、今日たまたま四人制のサッカー大会のことを知った。

きっとこれは神様のくれた奇跡なんだろう。今まで楽しくサッカーをやっていた俺とバダップへの。

俺はこの日初めて、あのクソみたいな神様に感謝した。

その後、俺達は試合を降りて、そこから先のすべての試合を観戦した。色々なチームがあった。

中年のおじさん達のチーム、小学校低学年のチーム、なんか変なコスプレしたチーム、すごかったのはDJ-YOUまでチームの一つに入って戦っていたことだ。お前選手だったんかい！

と、あつという間に時間は過ぎていき、時刻は午後七時。このコートにはナイターの設備がないのでここで打ち止めのようだった。

「やべえな。俺、門限七時半なんだよ！やらかした〜！」

エスカバが頭を抱える。

「安心してくれ。エスカバ、俺の家の者が迎えに来る。君の家まで送ろうか？」

「マジで!?ありがとよ！」

バダップがエスカバに提案する。おっ!?まさか…

「リムジンか!？」

「ああ。零に約束したな。リムジンに乗せてやると」

バダップ：お前そこまで考えて…。お前：お前は真の天才だよ…。

リムジンが到着する。運転手が降りて、後部座席の扉を開けた。

「うお!?すげえ!リムジンなんて初めて見た!なあなあ!俺から先に乗ってもいいか?」

「ふっ。いいぞ」

エスカバがリムジンに乗車。それに続いてバダップも乗る。

ラツイエルが俺に話しかける。

「リムジンとは豪華だな。零の友人は金持ちと見える」

「ああ。そうだな。だけど、今は乗れない」

「…？それはどういう「あく！しまったあ！ボールがない！どこかに置いてきちやっただい！」…え？」

ラツイエルを無視して俺は大袈裟な演技をする。

「たぶん映画館の前かコートのとっちかにあるのかも！」

「どうする？零？」

「バダップ！エスカバ！映画館に行って確認してきてくれないかな？  
お願い！俺とセシルはコートを探すから！見つかったら連絡してくれないか!?!こつちも見つかったら連絡するから！」

「分かった。おい。イナズマ映画館まで」

「かしこまりました」

バダップの指示でリムジンはコートを出発する。

…ごめん。バダップ。本当にごめん。騙してごめん。

俺はセシルの方を見る。セシルはコートの方へと歩いて行こうと  
していた。彼女は全く動かない俺を見る。

「どうしたの？早くコートへ行きますしょう？」

「いいよ。ボールは…」

俺は歩道の脇にある草むらの中に隠したボールを見せた。

「ここにあるから」

「…何？ふざけてるの？貴方。友達を騙すなんてとんでもない悪党  
ね」

「さて…悪党はどっちなかな？」

「なんですって？」

「お前は何者だ？何の目的でバダップに近づく？そして何でお前は  
…」

セシルの肩がピクリと動いた。沈黙。風が先程ボールを取り出し  
た草むらをザワザワと鳴らした。

「…お前は、俺が転生者だと知っているんだ？」

第十一話：すいませんゆるしてください！何でもしますから！

「…何を言ってるの？転生者？…非科学的な言葉を吐かないでくれる？」

そう言う彼女：古芝セシルは平静を装ってはいるが、その眼は…「嘘はつくなよ。心理学者ほどじゃないが相手を眼を見れば嘘をついてるかどうかくらい見抜けるぞ」

「そう。でもそれは貴方個人の意見じゃない？相手の眼を見れば嘘を見抜ける？本当にそうならこの世に犯罪者なんていないわ」

俺はポケットからあるものを取り出した。小さいそれを見た彼女の眼が見開かれる。

「…それ…まさか…」

「ああ。小型の録音機だ。この世界には影山とかガルシルドの手は回ってはいないだろうが一応念のためな」

俺は録音機の再生ボタンを押して違和感を感じた箇所まで早送りをする。

録音機は最初にセシルと出会った時の自己紹介の場面を再生した。

『俺はバダップ』

『エスカバと呼んでくれ』

『黒野零<sup>くろのれい</sup>。俺は零と呼んでくれ。よろしく』

ここから俺はさらに早送りをする。問題となる彼女のこの言葉を再生するために。

『ふふっ。それは甘いわね。バダップ・スリード』

俺は一時停止ボタンを押す。

「分かるよな。何でお前はバダップのフルネームを知ってるんだ？他にもお前はバダップが議員の息子と知っていた。お前は…何者だ？」

「証拠じゃないわ」

「…は？」

「私が貴方を転生者と知っている根拠になってないって言ってるの。」

バダップのことを私が前から知ってた…ってことでいいじゃない」

「…」

「さ、証拠を見せなさい」

俺は少しだけ録音を早送りにする。

「証拠を見たいんだな？」

「…」

「まず、お前は俺達と出会った時に俺が転生者だと予想した。確信してはいなかったけどな。だから、お前は俺に聞いたんだ。ダイレクトで聞くのではなく、うまい言い回しを使ってな。それを聞いた時は俺は少し違和感を感じただけだったんだが」

俺は再生ボタンを押した。

『淫？ネタ止めてくれる？汚い』

「俺が『やりますねえ！』って言った時のお前の反応だ」

普通に淫？を知ってる人ならこの発言に違和感を持つことは無いだろう。

しかし、それは俺の前世の世界ならの話だ。

ここは、イナズマイレブンの世界。例をあげれば…貴方はコスミツクプリティレイナというアニメを見たことがあるだろうか？

間違いなく俺の前世の世界…ここでは現実世界と呼ぼう…の住人は見たことないと答えるだろう。なぜなら、それはイナズマイレブンの世界で放送しているアニメだからだ。現実世界とイナズマイレブンの世界の文化はズレている。

つまり、イナズマイレブンの世界に『寄宿学校のジュリエ？ト』はないし、『終？のワルキューレ』もないし『かぐや様は？らせたい』もないのだ。

つまり、ここから導き出される結論は…

「淫？っていう作品はこの世界には存在しないってことだ」

セシルは何も言わない。ただ、薄ら笑いを浮かべているだけだ。

「ついでに言うと『<sup>デュエル</sup>決闘部！』の原作の作者はお前だろ？お前は何らかの理由で現実世界のことを知っていて、この作品を作った。野？先輩やG？とかが出演しているのはこのためだ」

「…」

「お前は何で現実世界を知っている？お前は何者だ？」

「…そうね。ある英雄の言葉を借りるなら…『リザイン（投了）』…が  
いいのかしらね」

「…」

「すごいわね。まるで探偵ね。シャーロック・ホームズなみよ」

「そりやどうも」

「全く…バカな人よね。この世に知ってはならない事実なんて山ほど  
あるのに」

セシルは嗤った。雰囲気が一変する。殺気が混じった空気だ。…  
あれ？なんかヤバイ？これ？

セシルはポケットからあるものを取り出した。それは黒光りする  
くの字型の…あれだ。そう。あれ。

…拳銃。

「貴方は知りすぎた。色々よね。全く…無駄に頭の回る転生者も考え  
ものね」

「…おいおい…そんなおっかないものぶっぱなせば周りの人達が集  
まってくるぜ」

「…大丈夫よ。サイレンサーがついてるから。周りの騒音被害につい  
ては心配しないで」

「へえ…ずいぶん環境に配慮した拳銃だな」

俺はゆっくりと両手をあげる。彼女は俺に歩み寄ってくる。

王牙学園に入学できる身体能力があればヘーキヘーキ！とか思っ  
てるやつ！現実で拳銃突きつけられるってメチャクチャ怖いぞ！足  
がすくんで動けないぞ！

ああああああもうやだあああああ！バダップと一緒にいればよ  
かったよおおおおおおお！

お父さん、お母さん、先立つ不幸をお許してください。アリアアリア  
アリアリ、アリーヴェエデルチ！

「零…聞こえているのか？」

そんな俺の横に立つ、ラツイエルが俺に向かって話しかける。俺は

視線で『助けて!』と伝える。

「…頑張れ」

ラツイエルは親指を立てる。クソ天使がああああ! テメエ! 俺以外の他者から見えてないからって調子のるんじゃねえぞ! コルア!

「すいません許してください! 何でもしますから!」

「じゃあ…自殺して。『グラフィアに負けたのが悔しくて自殺しました』っていう遺書を添えて」

「死なない選択肢はないのかよ!?!」

「ええ。これ以上、貴方が物語に関われば未来が変わってしまうの。

…困るのよ。そういうの」

「…」

「それに、貴方が死ねばバダツプは今日貴方をサッカーコートに連れてきたことを後悔して見事にサッカーを憎んでくれるわ。ほら、貴方が死ねば未来は元通り!」

拳銃が俺の額に押しつけられる。…ダメだ。動けない。俺、マジで死ぬのか…?

目の前に引き金にかかっているセシルの指が見える。

「さようなら。転生者」

引き金が…引かれた。

俺は思いつき強く眼を閉じた。

完

「…ってなったらどうする?」

俺は強くつむった眼を開く。目の前のセシルがニヤニヤと笑っていた。

「安心して。これは弾の入ってないエアガン。護身用についてお父様からもらったの」

セシルは拳銃:いや、エアガンを手で弄ぶ。俺は尻餅をついていた。

「お前:ふざけんなよ」

「フッフ。殺すわけじゃないでしょう?この世界では仲間は貴重なんだから」

「なあ:いいかげんお前が何者か、答えてくれない?」

「逆に分からないの?これだけのヒントが与えられているのに?」

…え?今までのヒントでこの謎解けるの?俺はラツイエルの方を見る。

ラツイエルは『え?こんなのも分からないの?』というかのごときどや顔を俺に披露する。:お前のキャラが分からんぞ。

頭を悩ませる俺にセシルは質問する。

「分からない?…じゃあ現実世界のことを知っている人間はどういう人間?」

「は?お前、何を言ってるんだよ!?そんなの現実世界の人間だけ:あ」  
分かった。:マジか。そういうことだったのか!

「お前:転生者なの?」

おそるおそる尋ねる俺。セシルはほおを膨らませた。怒ってるわけじゃない。笑いを堪えているのだろう。



「ぷっ！ププププあはははははは!!その通りよ！貴方が転生者としてどれだけ優れているか試すつもりであえてボロを出したのよ！」

「俺を試していたのかよ……！」

「やはり、私がいないとダメだな。零は」

うるせーぞ。無能天使。

俺はラツイエルを睨みつける。多分だけどこいつセシルが持ってたのがエアガンって気づいていたみたいだな。

ふざけてるように見えるがラツイエルは後々のことを考えて行動している。事実、グラフィア・ドメイン戦でもあいつは最低限のアドバイスしかしなかった。

……ますますこの自称天使が気になってきたぞ。

「まあ、私の言動に違和感を覚えたのなら充分及第点ね」

「…及第点いかなかったらどうしてたんだよ？」

「その時はもう貴方には関わらなかったでしょうね。私のお眼鏡に叶わなかったということぞ」

「俺を試す目的は何だよ？」

「…いづれ分かるわ」

「おい。もったいぶらずに「いづれ分かるわ」…ま、そういうことにしておくか」

セシルはいたずらっ子のようにクスリと笑った。

「じゃあそろそろ…電話しなさい」

「…えっ？」

「ボール見つかったんだからバダップ達に連絡入れないとまずいでしょう？」

「あ……」

「さっきの洞察力の高さは認めるけれどこういうところが抜けているあたりまだまだだね」

「ぐっ……！」

俺は携帯からバダップ達に連絡を入れた。

その後は、通常通り家に帰って…あ、エスカバだが門限に合わない可能性があったのでバダップは映画館に行く前に送っていったらしい。

…さすが、バダップだね！

家に帰るともう家政婦さんの手で夕飯が作られていた。夕食はハンバーグだった。

ラツイエルについてだがずっと俺のそばにいる。正直うっとうしいのだがこいつは俺以外の奴には見えないので文句を他の人に言うことは出来ない。

「あのさあ…」

「…どうした？」

「察して」

「察す？何をだ？」

俺はラツイエルをジーツと見た。言葉遣いは男のものだがラツイエルは女だ。♀だ。雌だ。

「分かるよな？お前は女なんだぞ？」

「…この姿は現世に現れる際の仮の姿だ。元々私に性別などない。だから私はお前が…」

「脱衣所で服を脱ぐのも気にしないぞ？」

「俺が気にするんじゃボケエ！」

俺は持つている着替えを思いつきり彼女に向かって投げつけた。しかし、彼女は幽霊のような霊体なのか、着替えは彼女の赤く輝く鎧を纏った体をすり抜け後ろの壁にポスツとぶつかり床に落ちた。

誰かがじっと見てる目の前で服を脱いで生まれた時の姿になってお風呂に入るって何の羞恥プレイだ!?

「てかお前まさか風呂にまでついてくるのか!？」

「当たり前だ。私はお前のナビゲーターとしての役目があるからな  
えへんと胸をはる自称天使。当たり前なのか…たまげたなあ…。」

「…とりあえず脱衣所から出てっくれますかね?」

「まさか、私が必要ないと言うのか…?そんな、数多あまたの天使の中で優秀な私がクビ…?存在価値がない…?」

「そこまで言っていないから」

おろおろしながら涙を浮かべる自称天使を慰める俺。…なあ、こ  
こって本当にイナズマイレブンの世界なのか?

ラノベじゃね?タイトルは『異世界転生したら天使が俺のナビゲ  
ーターだった』とかの。

と、ここでうーんうーんとうなっていたラツイエルははっとした表  
情になる。

「…そうか!理解したぞ!なぜ零が私に脱衣所から出てけと言うのか  
を!」

よかった。自称天使にも多少の知性はあったらしい。

「ここは脱衣所!服を脱ぐ場所だ!つまり!零が私に言いたいことは  
…」

「私も着ているものを脱げと言いたいのだな!」

…:そうそう!それよ!それを言いたか…:は?オマエサンナニイツ  
テルノ?

誰かこの残念美人な天使を止めてくれ。

「ふっ。私のこの完璧な解答に零は何も言えないようだな!この服は  
私の体と同じように霊体で出来ているからすぐに着脱可能だ!」

ああ。何も言えねえよ。こんなアホの娘どうすりゃいいんだよ。

つてすぐに着脱可能!?俺はラツイエルを見る。そこには…

……気づけば俺は湯船の中に浸かっていた。記憶がない。ラツイエルが鎧はすぐに着脱可能と言った直後あたりからの記憶が一切ない。

周りを見る。風呂場にラツイエルの姿はない。

よかった。あれは童？男子には刺激が強すぎる。俺はほつと一息つく。するとそこにラツイエルの声が聞こえた。

「れ、零。すまなかった。本当に悪いことをした。こ、こんなことになるとは思わなかったんだ。許してくれ。もう脱衣所まではついていけないから」

続いてズピーという鼻水をすすする音が風呂場の外の脱衣所から聞こえてきた。泣いていたのか？てか俺は一体ラツイエルに何をしたんだ？

でもなんかさつきまで全然言うことを聞かなかった彼女が言うことを聞いてくれそうな雰囲気にはなってるしここは平常運転でいくか。

「…分かった。許すよ。今後こういうことはしないように」

「本当にすまなかった。零がホモだという事実気づけなかった私のミスだ」

「は……お、お前、何言ってるんだ!?俺はホモじゃないぞ!というかどこに俺がホモの要素があるんだよ!?頭にきますよ!」

「え!?な、何故!?私の体を見て逃げ出すということは女の体が嫌いなすなわち男の体が好きなのだろう?」

「あーもうメチャクチャだよ!というかさつきと説明しろよ!お前のことと、神のことをさ!」

そう。今は俺がホモだとかはそこそこどうでもいいことでもある。今は彼女のことを聞くことの方が先だ。

「…そうだな。サツカーコートでも約束したからな」

「まず、お前は天使だと言ったが何でその天使がここにいるんだ?」

「いきなり核心をつくか…。いいだろう。全てを話そう。転生者の生まれるきっかけ。天使である私が何故お前のそばにいるのか、その秘密を」

## 第十二話：当たり前前だよなあ！

「…で、その転生者はどっち側の転生者だい？ハニー」

そこは古芝<sup>ふるしば</sup>セシルの自室。彼女の大好きな可愛らしいぬいぐるみがたくさん置かれた乙女感たつぷりの部屋。

ピンクの壁紙にピンク色のフカフカのベッド。勉強机もまさかのピンクと常人が見たら確実に『目がチカチカする…』と言いたいそうなのだ。

部屋は照明がついておらず、開けられた窓からの月光が室内を照らす。

セシルはベッドの上にあぐらをかいて座っている。

：先程の言葉はその向かい側の壁に寄りかかっているスーツ姿の男から発されたものだった。セシルと同じく金髪碧眼。そして、顔は美男子そのもの。しかし、その男は少し変わった姿をしていた。

何故ならとてつもないほどの贅沢な格好をしているからである。首には宝石がちりばまれた金でできたネックレスを、頭には金の王冠。すべての指に大きな宝石がはめ込まれた指輪をつけている。

そんな男をじつと見つめてセシルはため息をつく。

「分からないわ。というか貴方は仲間がサポートしている転生者達の名前を覚えてないの？」

「覚えてないよ。僕が覚えるのは金<sup>かね</sup>！宝石！貴金属！美男美女だけだ！…ああ。もちろん君のような美少女のことも僕は忘れないよ？ハニー」

男は悪びれもせずそう答えた。もう一度セシルはため息をつく。

「貴方ねえ…」

セシルの少しだけ怒気を孕んだ声にも男はニコニコと笑いながら返す。

「まあ、重要なのは彼等がセフィラかクリフォかということではなく、この世界への物の見方だ。ハニーもベルフェゴールの転生者を見た時そう思ったはずだ」

「…まあね」

男の言葉をセシルは肯定する。  
頭に思い描かれるのはベルフェゴールの転生者のあの言葉。

『ある英雄の言葉を借りれば…《さあ、世界に試練を与えよう》』

「…あいつだけはなんとしても止めなくちゃいけないわね」

「うん。だが、僕達サポートサイドはまだ力を完全に取り戻したわけじゃない。だから、まだハニー自身の力で戦って貰うよ」

「ええ。分かってる」

「よろしい」

にこりと男が笑う。セシルは少しだけ嗤うと彼に言った。

「…これからもよろしくね、ルキフグス」

開け放たれた窓からの夜風がカーテンを揺らし、赤い月が部屋にいる二つの影を照らした。

俺は湯船に浸かって脱衣所にいるラツイエルの言葉を待つ。

「…まず、全てはある樹が芽生えたことから始まる」

うわっ、長そうな話になりそう。

「零<sup>れい</sup>。君が神に出会った時に見た樹だ。十のセフィラが輝くその樹を」

「もしかして、あのでかい樹か？『生命の樹』とか言ってたやつ？」  
夢の中で見たあの木。その宝珠の中の一つが俺を光の中に飲み込んだ。

その事をラツイエルについてに話す。

「そう。『生命の樹』。あれについた十個の丸い玉の招待はセフィラと  
いってな…、それぞれを天使が管理している」

「お前もその中の一人ってわけだ」

「そうだ…。お前に光を与えたのは私の管理するセフィラ…コクマー  
だ。『知恵』を司るセフィラでもある」

「ってことは転生者は複数いて、それぞれがセフィラを管理する天使  
にナビしてもらっているってことか？」

「そうだ。そして、その樹によって私達、天使の国は長い間栄えた。あ  
る事件が起きるまではな」

…何か不穏な空気になってきたゾ。

「天使の一体が反乱を起こした。名前はルシフェル。天使の中では最  
高のカリスマ的存在だ」

「ホモガキにとつての野？先輩みたいな感じか」

「…例えばよく分からないがそういうことでもいいだろう」

すりガラスの扉の向こうでラツイエルはそう答える。野？先輩は  
ルシフェルだった…？（迫真）

「反乱は失敗。ルシフェルは地獄の最下層に落とされた。ちなみに人  
間の聖書とやらの書かれているのはここまでだ」

聞いたことがある。ルシフェルは聖書にたった一回しか登場しな  
かった天使だということ。しかも元々何の仕事をしていたのかさ  
え分からないとか何とか。

「しかし、事はそれだけでは終わらなかった」

ラツイエルは続ける。

「昔から天使達は皆が地獄は汚らわしい場所で見ると値しない場所と  
考えていた。だから、基本的に地獄に行く天使はいなかった。だか  
ら、天使達は誰も気づけなかったんだ。生命の樹の対になる邪悪の樹  
に」

「…邪悪の樹？」

「天国を支える樹があるように地獄を支える樹もある。そいつにはセフィラの代わりにクリフォと呼ばれる宝玉にとってもない高濃度のエネルギーが蓄えられていた」

おいおい。悪者にとってもないパワーを持つアイテムとなればもうパターンは一つしかないゾ。

「ルシフェルはそのエネルギーに目をつけた。地獄へと追っ手が来る前にそのクリフォにとってもない永い年月をかけて貯められたエネルギーの大半を使つて人間として転生する権利を得たのだ」

「…ちよつと待て」

「何だ？」

「天使が人間に転生する？」

「ああ。何か疑問があるか？」

しばらくの沈黙。え？話が突拍子もなく俺、よくわからない。

「何かメリツトがあるのか？」

「ある。まず、人間の世界に天使も悪魔も物理的な干渉をすることが出来ない。つまり、人間に転生すれば天使からも悪魔からも完全に逃げ切れるということだ」

「いや、お前、人間界に干渉してんじゃん」

「物理的にとつたはずだ。現に私は口出しだけで人間界の物を動かしたりといったことはしていない」

確かにラツイエルは俺に話しかけているだけで他の物を触ったりは出来ていない。さつきタオルを投げた時も当たらずにすり抜けたし。

「そのルール、ルシフェルには適用されてないのか？」

「ああ。今のあいつは人間だ。この世界に物理的に干渉できるよ」

「だけど相手は人間が一人。俺達の敵じゃないってのはつきり分かんかね」

「いや。ルシフェルはクリフォから得たとんでもない量のエネルギーを保有している。本気になれば人間界を滅ぼして自分が王となる国を作れるだろうな」



「…え？」

そして、ラツイエルは言った。とんでもない事実を。

「そして、今、ルシフェルはこの世界に転生している」

「…え？（2コンボ）」

「この世界のどこかにルシフェルがいる。奴は手始めにこの世界を支配して、天界征服の足がかりにするつもりだ」

「…」

「まだ、動いていないのは奴が私達天使が止めに来るのを待つためだろうな。私達が用意した奴を止める駒をすべて倒すことで自分の優位を知らしめるためだろう。我々もゆっくり準備が出来る」

…今、こいつヤバイことをを口走ったような気がする。

「あのさあ…」

「…？」

「その…ルシフェルを止める駒に俺も入っているのか？」

「当たり前だろう？」

ラツイエルは『お前いまさら何言ってるんだ？』という声色で俺に宣告した。

「つまり、俺達、転生者はそのルシフェルを止めるために転生させられたと」

「ああ。そうだ」

「ちなみに今のルシフェルの力はどれくらいだ？」

もしかしたらそこまですごい相手ではないかもしれないよ。うん。だって天使から人間にランクを下げたんだもん。しょうがないね。

しかし、ラツイエルの言葉は無慈悲だった。

「そうだな…本気になれば神をのぞく天界の全てを粉々にするくらいのエネルギーはあるだろうな」

「じゃけん、逃げましょうね」

「な、何故だ!? 何故!? 敵前逃亡は良くないぞ!? 他の転生者達が戦おうと意気込む中で逃げるなんて恥だ! 逆に何で逃げようなんて思うんだ!?!」

すりガラスの向こうのラツイエルは慌てた様子だ。

「当たり前だよなあ！逆に前はお前は世界一つを粉々に出来る奴を相手にしろと言われて喜んで『YES』って言えちやうのかよ!？」

「いや、言えないが…」

モゴモゴとなるラツイエル。こいつ本当にアホだな。

「逆にこちらが出来るのは銀のカラスのごとくパンチかキックかヘッドバッドかラツイエルウイングのぶちかまし一発だけだぞ!?!一撃で仕留められなければ「それは違う」…え?」

ラツイエルの声の感じが一変する。先程のおどおどした声から一気に真面目な雰囲気へ。マジで二重人格を疑うレベルのスピードである。

「ルシフェルと殴りあって戦うことはないはずだ」

「何でだよ!?!」

「性格上、ルシフェルはこの世界のルールに従って行動するだろう。相手が文句を言う勝利は望まない。相手を絶望させて文句も言えないほどに潰しての完全勝利があいつの楽しみだ」

「この世界のルール?何だよそれ?」

「サッカーだ」

「フアツ!?!」

あまりにも突拍子もないラツイエルの発言。…マジかよ。世界を賭けた戦いがサッカー!?!あり得ねえ!あり得ねえぜ!

「超次元過ぎるゾ!」

「文句があるならルシフェルに言え。殴りあいがいいですと言えばあいつも了承するだろう」

「ありがたくサッカーをやらせていただきます!」

やっぱりサッカーは楽しいぜ!364364く!天使もサッカーやるんだってよ!いいね!素晴らしい!

「零!長風呂は止めてさっさと出てきなさい!」

げっ。母さんだ。俺は湯船から出ると、風呂場のすりガラスのドアを開けた。

目の前にラツイエルがいた。ちなみに俺は素っ裸である。

「…」

「…」

しばらくの沈黙。ラツイエルは俺の顔を見ていたがその顔は徐々に下の方へ向かっていき…

「…！○？◎●▼△▽◆◇◎◎△△■◎▽△!？」

ラツイエルは顔を一瞬で真っ赤にしてパタリと仰向けに倒れる。ピシヤリと俺はドアを閉めた。

再びの静寂の後、俺はすりガラス越しにラツイエルに言った。

「…なあ」

「…何だ？」

「今度こそ察してくれ」

「…分かった」

古芝セシルは廊下を歩いていった。彼女の父親、古芝五郎は現在この国の議員の一人だ。まあ、バダツプの母親ほど大したものではないのだが。

それでも議員は議員。そこそこ広い家にお手伝いさんもついている。あまり不便ではない。

彼女はサッカーボールを抱えて中庭に飛び出す。バダツプの家ほどの広さはないが、十分なスペースがある。

(…グラフィア相手にほとんど何も出来なかった)

彼女の脳裏に焼きついているのは今日のサッカーバトル。最後の最後で必殺技、クリスタルウォールがシュートを阻むことは出来たが、試合全体を見れば満足できない結果でもある。

(もつともつと上手くならないとまずいわね…)

元々、バダツプ達王牙学園のメンバーはサッカーなどやったことがなく、雷門を潰す作戦が立案された時に練習を開始したはずだ。

だが、別の転生者、黒野零くろのれいの介入によってバダツプはサッカーをすでに始めているらしく、デススピアーを覚えていたりとその能力はとでも高かった。

エスカバに至ってはFWなのにトライペガサスを必殺技なしで止めてしまう始末だ。

「もつと強く…」

私はリフティングを開始する。一、二、三、四、五…

リフティングを続けながらあの試合を想う。得点をあげていないのは私だけだ。

…グラフィアをろくに止めることも出来ず、大した策も立案できていない。バダツプやエスカバのような高い身体能力もないし、黒野零のように鋭い洞察力も私にはない。

…私はあの試合で役にたったの？

…悔しい。悔しい！悔しい！悔しい！私がもつとしつかりしていれば！失点は抑えられた！

「…！」

リフティングしていたボールがあられない方向に飛んでいく。転々と転がったボールは家の壁の付近で止まった。

「はあ…ダメね…私」

セシルは壁際に落ちたボールに手を伸ばす。

その時、突然ボールが消えた。

「!？」

「もーらいっ！」

消えるボール。それと同時に十メートルほど離れた場所にボールをリフティングするセシルと瓜二つの少女がいた。違いはセシルはストレートのロングヘアーだが、もう一人の少女がショートヘアーというちよつとした違いである。

「ラミス…」

古芝ラミス。セシルの双子の姉だ。ラミスは去年、

サッカーバトルフロンティア

S B Fの

本選準決勝まで進んだ強豪チーム、『サンデーナイトファイバー』のキャプテンだ。

ちなみにチーム名の『サンデーナイトファイバー』はセシルが考えたものである。元ネタは当然、サ?デーナイトファイバーだ。

『サンデーナイトファイバー』の特徴として言えるのは、速い。

選手のスピードがとにかく速い。疾風迅雷とはまさにこの事と教えてくれるかのごときスピードだ。

ちなみにラミスはセシルにチームに入るようにとかつて勧誘したのだが、その時はセシルは断っている。

(…やっぱり速い。目で捉えられなかった…!)

「セシル。『サンデーナイトファイバー』に入ってよ!セシルが入ってくれたらきつと今年は優勝できそうな気がするんだ」

ニコニコと無邪気に微笑みながらリフティングするラミス。

ちなみにラミスは転生者ではない。以前、『フィフスセクター』のことについてラミスに聞いてみたが、特に反応が無かった。

フィフスセクターはイナズマイレブンGOに出てきた、サッカーの試合の勝敗を管理して、全てのチームに平等な勝利を与えるということでもない組織でイナGOのラスボスだ。

この世界では円堂守も松風天馬も有名人だがフィフスセクターやガルシルドと言った人間はこの時代ではそこまで有名じゃない。

まあ、もちろん、ラミスが嘘をついている可能性もあるが。

セシルはラミスの勧誘に対して答える。

「ごめん。ラミス。私はラミスと戦いたい。敵チーム同士で」

「…ふーん。…確信したよ。…セシル」

「…何?」

「一緒にサッカーするチーム、見つけたんだ」

「…何で分かるの?」

ラミスはニココリと微笑んだ。

「お姉ちゃんだもん。夕飯の時にニコニコしてればそりゃあ気づくよ」

「そう…なんだ」

「でもね〜どこかでちよつと氣負ってるんじゃないかな〜って思つてここに來たの。この時間貴方ここでサッカーしてるじゃない」

「…!」

「やっぱり凶星みたいだね」

不思議な感覚にセシルは襲われた。転生前、彼女は孤独な少女だった。兄弟どころか家族さえいなかった。

転生後、家族を持った彼女は家族を持つという感覚に慣れていなかった。しかし、姉のラミスといると、まるで本当の双子のように互いの考えが何となく分かるのだ。

まるで転生前から双子の姉妹だったかのように。

だからこそ、セシルにとってラミスは氣の許せる存在になつていた。

「他のメンバーがとつても強くてね…私、足手まといかもしれない…」

「…どうしてそう思うの?」

「グラフィアと試合したの…」

「…!」

ラミスの肩がピクリと震える。彼女のチーム、『サンデーナイトファイバー』が準決勝で敗北した相手こそ『グラフィア・ドメイン』なのである。

「他のメンバーが点を取ってくれたけど…。私は一点も決められなかった。DディフェンダーFフォワードなのにグラフィアを全然止められなかった…」

「…」

「チームのお荷物かもしれないわね…私」

ラミスは何も言わない。少し、この場にいるのが嫌になつたセシルは家に戻ろうとした。

が、そこへラミスがリフティングしていたボールが飛んできた。

(っ!?)

咄嗟に右足を出してボールを蹴りかえす。とんでもない威力だった。下手をすればセシルは足を弾かれていたかもしれない。

「…何?」

「…違つよ」

「…?」

ラミスはとても悲しそうな目をしていた。

「セシルはそんなタイプじゃないよ。そんな風にサッカーをして欲しくない」

「何が言いたいのか?」

「元々、私達がサッカー始めた時のこと覚えてる? 貴方の方がまだとっっても上手かった頃」

「…」

セシルは昔を思い出す。サッカーを始めた頃、セシルは生前の記憶から多少の知識があったためにラミスよりもサッカーが上手だった。「私はセシルよりその時は下手だった。でもね…私、楽しかったの。もちろんセシルより下手なのは悔しいとは思ってはいたけど、それよりもサッカーが好きで気持ちの方が上だった。上手い下手関係なくボールをがむしゃらに追いかけるのがとても楽しかった」

「…」

記憶を呼び起こす。ラミスからボールを奪うセシル。そのままボールをキープしてドリブルしてシュートする。笑っていた。あの日は。

「そのチームでプレーして楽しくなかったのならいいけど…そんなことないよね? 夕飯の時は笑ってたし」

「…うん。楽しかった。とても」

「じゃあ、それでいいじゃない!」

ラミスはニツコリと笑った。

「サッカーを楽しみましょう。本当の勝者は試合を楽しんだ者なんだから!」

「…そうね」

セシルの雰囲気は少しだけ明るくなる。だが、ついさっきまでのセシルと今のセシルは決定的に違っていた。

「じゃあ、ボール返す「待って」…どうしたのか?」

ボールをセシルにパスしようとしたラミスの動きが止まる。セシルから少しだけ殺気が漏れる。

空気が一瞬にして豹変した。

「ねえ。ラミス…言ったわよね 『貴方セシルの方がまだとっても上手かった頃』…その言い方はまるで…」

クスリとラミアは…嗤った。

「今は私の方がセシルより上手い…と言ってるように聞こえちゃった？」

「ええ…ボール返さなくていいわ…」

「奪うから」

「やれるものなら…やってみて」

夜風が木々を揺らし、二つの影を赤い月が照らす。

二つの影はしばらくの間は全く動かなかつた。

…そして、その瞬間が訪れる。

二つの影は同時に動き出した。



### 第十三話：お願いします！アアアアアアアア！

グラフィアとの戦いから十日ほど経過した頃…。

俺はあのサッカーコートに向かっていた。サッカーバトルフロンティア S B Fの予選に

参加するためだ。あ、王牙学園の入学試験は無事合格したよ。

ちなみに今回は試験結果の報告も兼ねている。まあ、バダップもエスカバも受かっているとは思うが。

しかし、今回は、少し遅刻ぎみだ。いつも時間ぴったりに到着するバダップよりも遅くなるかもしれない。

「まずいですよ！」

「だから言っただろう。夜遅くまで作戦たててないで寝るべきだと」

「七時に起こす約束破ったお前も大概だがな」

「天使だって睡眠が必要なんだ！労働基準法をみてみる！一日に（強制終了）」

ダメ天使を無視して全力疾走する。ちなみにあいつは背中羽でパタパタ飛びながらついてきている。というか、天使って疲れなさそうだが…。

サッカーコートが見える。案の定かなりの数の人達がサッカーコートの周りを囲んでいる。

：あまり混んでない時間にコートで待ち合わせする予定だったんだけど、そうはいかなくなってきたな。

「まずいですよ！（本日二回目）」

これだけ混雑した場所でバダップ達を探すのは困難を極めるぞ。

と、そこに俺とサッカーコートの間一人の男が立ちふさがった。

金髪に青い瞳。スーツ姿に金銀財宝を散りばめられたマント、金の王冠を身につけている。宝石をこれでもかといけまくった金の杖を握る両手には巨大な宝石のついた指輪がはめられていた。

「…誰だよ。そこをどけ」

「おっと。気にしないで。古芝セシルの使いさ」

「セシルの？というか「零！離れる！そいつは悪魔だ！」…ファッ!」

ラツイエルの声に反応して俺は一步後ろに下がる。悪魔!?!つまり、

ラツイエルの敵!?

悪魔と言われた男はニコニコ笑いながらラツイエルの方を見る。ラツイエルを見た悪魔はハツとすると恍惚な表情を見せる。

「おお！誰かと思えば愛しのラツイエルじゃないか！君に会えて僕は最高の瞬間を味わってるよ！」

「私は貴様に会えて史上最悪の気分を味わってるがな」

対するラツイエルはゴミ虫を見るかのような蔑みの目で相手を見つめる。

「知り合いか？」

「ああ。ルキフグスという悪魔で、金と女が大好きなクズだ」

「ノンノン。正確に言えば金と美男美女が好きなのさ。君の転生者もそういう意味では僕の好みさ」

ルキフグスは俺を見るとやくつとジジイが美女にセクハラでもするかなのような目付きになる。

…気持ち悪い。

「俺は男だぞ？」

「安心したまえ！僕は愛を向ける相手は男でも女でも変わらない！美しければ僕のハーレムに加わる権利は誰にでもある！それに！」

ルキフグスはビシツと俺を指差す。人に指差しちやいけないうってこいつ習ってないのか？

「女性のような美しさを感じるが逆に男のような凛々しさも持ち合わせたその顔からは矛盾という美を感じる！さあ！問答無用で僕のハーレムに入りたまえ！」

…マジで気持ち悪い。

「ルキフグス、悪いが今は私の転生者の晴れ舞台だ。邪魔をするなら…」

ラツイエルが腰の剣を抜く。赤い刀身の剣は炎を纏った。圧倒的な殺気。しかし、周りの人々は天使も悪魔も見えていないために俺の横を気にせずに通りすぎていく。

ルキフグスは殺気をあてられているにも関わらずニヤニヤ嗤っていた。

「まあ、待てラツイエル。僕は君達天使と戦うつもりは毛頭ない。色々話したいことがあるのさ」

「…話だと?」

「ああ。ルシフェルや、他の転生者達に関する情報さ。僕をここで斬り殺すのは自由だが、話を聞いた後からでも遅くはないと思うよ」

しばらくの沈黙。ラツイエルから放出されていた殺気が止まる。どうやらこの場は落ち着いたらしい。

ほっと一息つく俺。

「…そうだな」

「おっ。分かってくれたかい?」

「ああ。話すことなどない。お前はここで斬り殺す」

「…え?ちよつ!?!」

困惑するルキフグス。ちなみに俺もここは話を聞く流れだと思っただ。

「助けてハニー!…ラツイエル!空気を読んでくれ!ここは僕を見逃して話を聞く場面だろう!?!」

「そうだよ(便乗)」

いくらルキフグスがクズでも停戦を申し出てる相手に攻撃するのは俺も反対だ。

「ついでにその転生者君もラツイエルを止めて『ルキフグス様♥

ハーレムに入るから情報:お・し・え・て♥』っていう場面だよ!」

「よしっ!ラツイエル!殺しちやっついていいぞ!」

やっぱり汚物は消毒に限るな!

「ひいひいひいひい!助けて!ハニー!僕、殺される!死にたくないよ!」

「終わりだ。安らかに逝け」

「止めなさい」

ラツイエルとルキフグスの間に一人の少女が割り込んだ。セシルだ。

「ハニー!助けてくれたのかい!?!」

「彼は私のナビゲーターなの。ここで死なれると困るのよ」

「ほう。やはり、私が見えていたのか」

「ええ。でももしルシフェルの仲間だとしたら危うかったから指摘こそしなかったけどね。…零。選手登録締め切りまであと19分よ。早く来て」

「あ、分かったよ」

セシルは俺の腕をつかむと引きずっていく。

「頼む。ラツイエル。ハニーもああ言ってるし話だけでも聞いてくれないか?…あれ?何でまた剣を振り上げてるの?」

「安心しろ。転生者の謝罪に免じて半殺しにしてやる」

「ちよ、ちよ、ちよと待つて下さい!待つて!助けて!待つて下さい!お願いします!アアアアアアアア!」

「あのさあ…」

「あのバカは放つておいてさっさと選手登録行くわよ。私のことは区切りがいい時に教えてあげる」

セシルに連れていかれるとバダップとエスカバが大会委員らしい人に何かを話しているところだった。

「そこをなんとかしてもらえませんか?試合開始前には来ると思うので…」

「でもねえ…選手がいないと登録はできないのさ」

「責任はとるから頼むよ!おじさん!」

「おじ→さん←だとふざけんじゃねえよお前!お兄さんだろオ!」

エスカバの発言にキレル大会委員様。どうやら俺がいないけど選手登録してくれるように大会委員に頼んでいたらしい。

「というか大会委員!貴様、ホモだな!」

「悪い!バダップ!少し遅れた」

「遅い!」

「心配したぜ。怖くて逃げちゃったのかと思ったよ」

「四人目が来たので、選手登録、いいですか？」

「…分かった。選手登録を認めよう。君達は一回戦の第四試合からスタートだ」

バダップがあらかじめ持っていた選手登録用の用紙を大会委員に渡す。

「零様」

「あ、御影さん。こんにちは」

俺を呼ぶ声に反応して、見るとそこにはバダップの付き人兼ボディーガードの御影千草みかげちぐささんがいた。バダップの家に頻繁に遊びに来ていたために彼女ともよく顔を合わせる。

「試合中はバダップ様のことをよろしくお願いします」

「あ、はい」

「数日前に身体中にアザをつくって帰ってきたバダップ様を見て奥様が心配されています。今回は監督を務めますが、試合に干渉できないので」

…え？監督？

「…今回ですがこの御影、皆さんのボディーガード兼監督をやらせていただきます」

「あ、よろしくお願いします」

「では」

そう言っでどこかへ走り去っていく御影さん。

「監督って…？」

「この大会では監督一名が参加資格を得るために必要な条件の一つになっている。まさか、知らなかったのか？」

いつの間にかラツイエルが横にいた。右手でルキフグスを引きずっている。

「…知らなかった」

「バダップに感謝だな。もし誰も知らなかったなら出場すら出来なかったろうな」

俺はルキフグスの状態を見る。…大丈夫。見た感じ死んではいな

いな。

ルキフグスは真つ白になりながらポロポロと涙を流していた。

「…一点もののネックレスとマントが…指輪も一つ一つ丁寧に破壊しやがって…いつもこうだ。僕がナンパする度に宝を破壊して…ラツイエル…君は世界の宝を壊しまくってる自覚はないのかい…？」  
「むしろ、貴様は身につけている宝達の気持ちを考えてことがないらしいな。貴様に身につけられるくらいなら壊してしまった方が宝のためだろう？」

どうやらラツイエルがルキフグスの宝を壊すのは今回が初めてのことじゃないっぽいな。

『みんな〜！待たせたなあ〜！』 サッカーバトルフロンティア S B F 予選を始めるぜ！一回戦第一試合！《ブラックテトラ》VS《大海学園陸上部》のカードだ！』

DJ—YOUの音がコートの中に響き渡る。

「そろそろ試合が始まるから見に行った方がいいんじゃないか？…ああ。ルキフグスはまだお仕置き中だ」

「…少年。ラツイエルを止めてくれ…僕の宝はグシャグシャだけどまだ修復のしようがあるんだ」

「じゃあ言うべきことがあるよな」

「…そうだな。さあ！転生者君！僕のハーレムに「ラツイエル〜！壊しちゃって！どうぞ〜！」…あ、待ってくれ！ふざけただけだから！ちよつと待って！助けて！待ってください！お願いします！アアアアアアアア！」

やっぱり汚物は消毒に限るな！試合見に行こ！

「うう…ひどい…あんまりだ…。プライスレスと言っても過言ではな

い品々をここまで粉々にするなんて…ラツイエルの鬼！悪魔！」

「悪魔はお前だ」

零が去った後、大会の運営の前に取り残されるラツイエルとルキフグス。彼等は霊体のために人間と接触してもすり抜けるだけだ。

だが、ラツイエルの放つ殺気に見えていない人間達も何となく、彼等がいる地点を避けていた。

「でも…これは宝物なんだよ？めちやくちや大事な僕の思い出の「嘘をつくな」…」

「もう零はいない。貴様は零の前ではよいキャラを演じたいようだからな。あえて私ものってやった。だが、もういいだろう。本性を見せろ。ルキフグス」

しばらくの沈黙。それを破ったのは小さな小さな噛い声だった。

「ククク…ククク…アハハハハハ…いやあ…君の勘は鈍っちゃいなかったかあ…。さすがだよ…。もう数千年は会ってもいないのに、僕の性格をよく知ってる」

「私が何回悪魔の嘘を見てきたと思う？今のような嘘は通じんよ」

「そうだねえ…。でもさあ、大事な思い出の品つてのは本当だよ。こいつらは善良な人間をどうしようもないゴミに墮落させるゲームの戦利品だったんだから」

ルキフグスは沢山の富を人間に与える。与えられた人間はその富を元手に財産を増やしていく。もちろん、成功の影には必ずルキフグスの手が回っている。

最後にはその人間の死後に魂と今までその人間が欲望のままに集めた財をまるごと奪う。

そうしてルキフグスは地獄でもっとも裕福な存在となった。

ラツイエルにとってはもっとも最悪で醜悪な悪魔の一体だ。

「何が目的だ？」

「目的…か。君達と同じだよ。ルシフェルの討伐」

「嘘をつくな！ルシフェルは地獄の王と言える存在だ！地獄の悪魔であるお前が離反する理由などどこにもな「あるんだなくこれが」…何だど？」

ルキフグスはクククと嗤う。

「なあ…。生命の樹は天国を支えるエネルギーを貯めている。同じく対をなす邪悪の樹も地獄にとって大切なエネルギーを貯めてくれるものだ。そのエネルギーは当然、地獄を維持していくのに必要不可欠だ」

「…なるほど。そういうことか」

「あいつはそのエネルギーを根こそぎ持っていた。地獄は崩壊寸前さ。ルシフェルを崇拜してる奴はもう地獄にはいない」

「それで、お前達の目的はルシフェルの復讐…ということか」

「そういうこと」

観客達がざわめいている。どうやら凄まじい試合になっているようだ。ラツイエルは少し気になったが、この話の重要性を知っているためにルキフグスとの対話に集中する。

油断はできない。ちよつとでも隙を見せればそこにつけこまれる。こいつはそういう奴だ。

「なあ…さらに疑問があるだろ？お前達天使がどうやって邪悪の樹の存在に気づいたか」

「…」

「それは俺達、ルシフェルを見限った地獄の悪魔が神々に密告したからだ」

「我等の神以外にも…か？」

「ああ。日本の帝釈天、北欧のオーディン、ギリシヤのゼウス…人間を転生させる権限を持った神にも全員に話したはずだ」

ラツイエルは気づく。今の言葉の重大な意味に。そして、彼女はあつことに気づき戦慄した。

「まさか、転生者は無数に存在するのか!?大量の転生者を送り込むことがどういうことか貴様は分かっているのか!？」

「おいおい。俺は確かに転生権限を持つ神々にこの事を話したぜ。でも人間を転生させてやれとは言っていない。転生者を過剰に送り込むことがどれだけ危険かは奴等も承知してるだろ？事実、転生者はルシフェルを除いた俺達クリフォの悪魔とセフィラサイドのお前らしか



いない」

ルキフグスはポケットから高級そうな葉巻を一本取り出すとオイ  
ルライターで火をつける。そのままプハーツと煙の息を吐いた。

「大半の神は静観…いや、面白半分でこの戦いを見てる。あいつらは  
ルシフェルのことをナメてる。もし俺達がこの戦いに負けたら…」

「世界の終わりか」

「…ああ。そこで提案だ」

「…同盟組もうぜ?」

第十二話：ちよつと待って！いなりが入ってないやん！  
（VSブラックテトラ）

一回戦ダイジエスト

「デススピアーV2！」

「ハンバアアアグ！（断末魔）」

一回戦、VS糸川ハンバーグス。8―0で勝利。

二回戦ダイジエスト

「ラツイエルウイング！」

「熱くなりスギイ！（断末魔）」

二回戦、VS松岡ファイヤーズ。3―0で勝利。

ここまで、俺達のチーム、オーガは順調に勝ち上がり、予選決勝の舞台にまでたどり着いた。

一回戦の糸川ハンバーグスはそんなに強くはなかったが、二回戦の松岡ファイヤーズには三点しかとれなかった。

三点は結構でかいように感じられるが、バダップ含めた王牙学園メンバーなら話は別だ。世宇子に36―0で勝利できるポテンシャルを秘めたメンバーがいるにも関わらず三点。未来のチームのレベルの高さを感じる。

しかも、決勝は一筋縄ではいかないだろう。何故なら…

『アンビリバーボー！』《ブラックテトラ》VS《天馬は永遠に》の試合はとんでもないことになってしまった〜！』

ブラックテトラ 9―0 天馬は永遠に

このコートで一番強いチームの筆頭にあげられるのが『天馬は永遠に』だったらしい。俺達が来るまでの話だが。

それを九点。とてつもない強さのチームだ。『天馬は永遠に』もこの大会までに相当練習したのだろう。動きが良くなってるし、俺達でも前のように大量得点は望めないはずだ。

「トライペガサスV3！」

『天馬は永遠に』のシュート。進化したトライペガサスはもうエス

カバでは止められないほどの威力を誇っているだろう。

しかし、ブラックテトラのキーパーは余裕そうな顔で嗤った。

「アスサイズスラッシュャー！」

キーパーの手に禍々しいオーラが集まるとそれは巨大な鎌の形を作り出す。

そして、ボールに向かってその鎌は振り下ろされる。

ギイイイイイインというボールを削る音が会場中に響き渡る。

そのままボールは真つ二つに切断された。

『残念！《天馬は永遠に》！これで三本目のシュート！しかし《ブラックテトラ》のキーパー、一番の選手がきっちり防いだ！』

「残念…だったな…」

「くっ！もう一度だ！」

諦めずに必死に戦う『天馬は永遠に』メンバー達。

しかし、諦めずに戦う者が必ず勝つとは限らない。

ビーツというタイマーの音が響き渡る。

『試合終了〜！勝ったのはチーム《ブラックテトラ》！三番の選手の圧倒的な得点力！果たして《オーガ》は止められるのでしょうか!?!』

ブラックテトラ：選手一人一人の能力が非常に高い、にもかかわらず、あの三番のビブスの選手の運動能力は凄まじい。指示出しも上手い。

三番の選手：整った顔立ちで爽やかな印象を受けるその女性選手はニコニコとギャラリー達に手を振っている。

隣を見るとセシルは少しだけ考え込んだような顔をしていた。

「あの選手、どこかで…」

「まあ、試合前に相手チームの選手登録内容が確認できるからその時な」

「分かってるわ。それと、私達以外に転生者は見当たらないわね」

転生者にはナビゲーターとして天使や悪魔がそばにいる。どうやら転生した瞬間からそばにいるらしく、あの樹の影響で見えるようになるらしい。

俺の場合、グラフィア・ドメインとの試合中に見た夢（のような何か）

の際に影響を受けてラツイエル達が見えるようになったそうだ。

どうやらクリフォの悪魔の転生者達も邪悪の樹の影響を受ければ見えるようになる。

まあ、全てセシル談だが。

「…ちなみに、あえて言っておくが俺はまだお前を完全に信じたわけじゃないからな」

そう。ここまでは一回戦と二回戦の間の休憩時間にセシルから聞いた情報だ。だが、話したのはセシル一人。

彼女がルシフェルサイドの人間の場合、完全に信じこむのは危険すぎる。

別の転生者と会って話を聞く。まずはそれからだ。

「…別にいいけど、試合中は信頼しなさいよ」

「分かってるよ」

『決勝は、十分間の休憩を挟んだ後に行います！終わり！閉廷！以上！皆解散！』

「…あれ流行ってるのか？」

「それは『迫真！決闘部』の作者に聞きなさい」

「お前じゃないのか!？」

「いつ私が自分が作者だって言ったかしら？」

ええ…。違うのか…。

「ちなみに私は淫夢ネタが嫌いだから」

「…すいませんでした」

「別にいいわ」

しばらくの沈黙。何も話すことがないので靴紐を結び直したりしていた俺とセシル。

作戦会議は『ブラックテトラ』が『天馬は永遠に』に五点差をつけた辺りから始めてすでに終わっている。休憩は各自でとっているのバダップとエスカバは近くにいない。

そうして一分ほど沈黙していたところでその沈黙は突然破られた。

「はじめまして。古芝セシルさん」

靴紐を結んでいる途中でかけられた誰かの声。顔をあげるとそこ

にはあの三番ビブスがいた。

「…誰？あな「ちよつと待って！いなりが入ってないやん！」

セシルを止める。俺は三番ビブスをじろりと見る。

「お前…何者だ？何でセシルの名前を知ってる？」

「…何か問題でも？」

「初対面の人間のフルネームを知ってるって十分問題だと思うが？」

「古芝さんの知り合いからの使い…と言えば？」

三番ビブスはポケットからあるものを取りだし俺達に見せる。

それは…目の装飾が施されたネックレスだった。

「これは…『千年タウク』といいます。私の兄…かみしばりゆうと神縛悠外の持ち物であり、私は彼の使いです」

「そういう意味では…お久しぶりです。古芝セシルさん」

セシルを見る。彼女は誰がどう見ても動揺しているようにしか見えなかった。神縛悠外、千年タウクという首飾りがその動揺のきっかけだということはずぐに分かった。

それでも何とか、その動揺を悟られないように必死に彼女は振る舞っていた。

「…何の用？私も貴方も次の決勝のために忙しいはずじゃない？」

「…こちらはもう済んでいますよ。なぜなら…」

「…タウクの力で未来が見えるから」

三番ビブスとセシルが同時に言った。

…よく分らんがああ『千年タウク』とかいう物が未来を見る事が出来る道具ということか？

…オカルトじゃねえか！そんな非科学的なこと、信用できるか！

三番ビブスはセシルが自分と同じことを言ったことに驚いたのか、目を見開いた。

「よく分かっていますね。その通りです。タウクの未来は絶対です。」

「どれだけ策を練ろうが未来は変えられない」

「おい。ペラペラ喋ってるどころ悪いが名乗れよ」

セシルの動揺が少しずつ大きくなってくるのが見てとれたので三番ビブスとセシルの会話を止める。

「これは失礼。私の名前は神縛悠莉かみしばりゆうりと申します」

俺の言葉にペコリと深くお辞儀をする神縛。お辞儀をした彼女の髪が地面につくが気にしてはいないようだ。

「俺の名前は黒野零くろのれいだ」

「そうですか…。黒野さん。サッカーバトルフロンティア S B F 本選出場おめでとうございます」

「まだ決勝だぞ？まだ俺達は本選出場権を手にしてはいないぜ」

「いえ、手にしてますよ。私の兄がタウクによって導いた予言は絶対です。次の試合は貴方達が2―1で勝ちますから」

「…お前、兄に負けると言われて悔しくないのか？予言されたからって諦めるのかよ？」

俺の言葉に神縛はキョトンとした顔で返した。

「…ええ。当然ですよ」

自分達の負けを彼女は宣言していた。

「兄の予言は絶対です。タウクの導きは絶対です。私のチームはそれに従って貴方のチームに負けます」

「…ふざけんなよ」

俺は神縛の胸ぐらを掴んでいた。だが、神縛は全く恐れる様子がない。そこに胸ぐらを掴んだ腕をセシルが掴む。

その手は震えていた。

「止めなさい」

「…」

「もう一度言うわ。止めなさい。出場停止をくらいたいの？」

「…分かった」

手をはなす。神縛はポケットから四つ折りにされた紙を俺に握らせた。

「これは兄の予言です。そんなに予言を無効にしたいのならばどうぞ

お読みください。では、ごきげんよう」

そうして神縛は去っていった。

神縛がギャラリー達の中に消えるとすぐセシルは糸の切れたマリオネットのようにその場にうずくまる。

「大丈夫か!？」

「…大丈夫」

しかし、立ち上がったセシルの顔色は悪かった。

「なあ…あいつって…? それにあのネックレスは？」

「…あとで説明するわ。それと…注意しなさい。次の試合は超強敵よ。おそらく、ここがゲームの世界だとすれば…」

「だとすれば?」

「彼女は…ラスボスの使いかもしれないから」

決勝が始まる。俺達はバダップとエスカバ、それから御影さんと合流する。

セシルとあの後、予言のことをバダップ達には伝えないということ約束した。セシルはどうやら先程のことを他の人にむやみに伝えられたくないらしい。

約束しなくてもバダップ達には言わなかったが。いきなり予言とか言われても頭が追いつかないはずだ。事実、転生というとんでもないことを体験した俺でも少し混乱してる。そうなれば、バダップ達はより混乱するはずで、そんな状態では試合はできない。

ちなみに神縛が渡した予言の紙は気味が悪くて開けなかった。

「古芝様、顔色が悪いですが大丈夫ですか?」

「…大丈夫です」

隣にいるバダップがそつと俺に耳打ちする。

「セシルと一緒にいたみたいだが…何かあったのか?」

「さあな。知らないよ」

今、神縛のことを言っただけで下手に力ませたらまずい。そもそも神縛がデタラメを言っただけで俺達のコンディションを落とそうとしている可能性もある。

「皆様、くれぐれも怪我だけは無いよう、お願いいたします」

御影さんは心配そうに俺達を見る。まあ、グラファが異常なだけで流石に今回は怪我することは無いだろう。

『さあ！決勝まで来たサッカーマニアども！コートに入っただけで来なあ！』

DJ—YOUディージェイユーの声が会場に響き渡る。俺達：チーム『オーガ』と神縛のチーム『ブラックテトラ』がコートに入る。

オーガ

バダップ・スリード

古芝セシル

黒野零

エスカ・バメル☆

ブラックテトラ

神縛悠莉

古藤カズマ

アレキサンダー・デミータ

グリム・リツパー☆

俺と神縛がコートの真ん中に行く。センターサークルではDJ—YOUがコインとボールを持って待っている。

『どつちにしますか？』

「表で」

「じゃあ私は裏にします」

ピンという音とともにコインが中を舞う。それを受け止めるDJ—YOU。開かれた手のひらには裏側を上にしたコインがあった。

「ボールをもらいます」

『よし！ブラックテトラのボールから始めるぜ！』

ボールをセンターサークルの中心に置いてDJ—YOUはフィー



ルドから離れる。

「どうですか？」

「…？」

「これがタウクの導きです。確定した未来は変えられません」

「そうか。じゃあこの試合で打ち破ってやるよ。確定した未来ってやつをな」

俺はセンターサークルから離れてポジションにつく。神縛はアレキサンダーを呼んでセンターサークルのボールへ近づく。

『S B F本選出場をかけた決勝！開始！』

それと同時にビーツというタイマーの音が会場中に響き渡る。

アレキサンダーがボールを神縛へパス。そして

「はあー！」

神縛はシュートを撃った。センターサークルから

自陣のゴールに向かって。

キーパーのグリムはそのシュートを止めるそぶりも見せなかった。

『ゴ、ゴ、ゴ、ゴール！なんということだ！開始二秒でゴール！し、しかもまさかのオウンゴールだあ！どうということだあ!?!』

「てめえ！今のわざとだろ!？」

俺…ではなくエスカバが神縛に向かって走ってきた。そして、俺がやったように胸ぐらを掴む。

エスカバがぶちギレるの初めて見た…。すごい怖い。

だが、神縛は平然としている。

「…何か問題でも?」

「おおありだ！俺は真面目に戦わない奴が世界で一番大っ嫌いなんだ！」

「真面目にやってますよ?真面目に負けようとしているんです」

「ああ!?ふざけるなよ!やる気がねえなら消え失せろ!」

やべえよやべえよ…朝食食ったから…(意味不明)。

今にもエスカバは神縛に殴りかかりそうだ。そんなやべえ状況を止めたのはバダップだった。

「止めろ。エスカバ」

「っ!だってよ!あいつら「ここで暴力をふるえば俺達の負けだ。それに、周りを見てみる」…周り?」

周りのギャラリー達がガラガラした目で神縛達、『ブラックテトラ』のメンバーを睨みつけていた。

「今、会場に奴等の味方はいない。ここで暴力をふってもなにも変わらないぞ」

「…悪い」

ゴール前へ戻っていくエスカバ。

俺は神縛の元に向かっていく。

「予言のためか?今のオウンゴールは」

「ええ。全てはタククのためですから」

「俺は未来を変える」

「どうぞ自由」

俺はポジションにつく。

未来を変える戦いが始まっていた。

第十三話：ちやんとサッカーしろく？（VSブラック  
テトラ）

森の中にその少年はいた。

サッカーのユニフォーム：キーパーのものだろう：にグローブ、左手にボールを持った少年は一本の大木を見上げていた。

いや、それは木というには人工物のような形をしていた。十個の様々な色の球体が木の実のようにその木にはついていた。

少年：円堂守の姿をした神はじつとその大樹：生命の樹を見上げていた。

「…さあ、どうなるか。転生者達が勝つか、それとも…」

「ルシフェルが勝つか、か？」

彼しかいなかったはずの森の中に別の男声が混じった。

声の方向には真っ白なブカブカの服を着た少年がいた。美しい顔をしており、その黒髪が長かったら少女と見間違えそうになるほどの美貌だった。

「…ああ、君か。トール君」

「君か、じゃねえよ。クソ野郎」

トールと呼ばれた少年：いや、神はもう一人の神との間の十メートルほどの距離を一瞬で埋める。

両者の距離、僅か数センチ、トールが美しい顔をしているのでこの現場を見た者は下手をすればカップルがキスをしようとしているように見えたかもしれない。

だが、その現場に立てばそれが違うということがすぐに分かる。

トールから発せられるとんでもないレベルの殺気がそれを否定するからだ。

「何の用かな？そんなに僕とくつつきたいのかい？」

「…俺が何でここに来たのかまだ分からねえのか？」

「…さっぱりだ」

神は肩をすくめるとトールから距離をとる。そのまま生命の樹の幹に背中を預けた。

「じゃあヒントだ…千年アイテム」

「…なにそれ？」

ゴツという何かを固いものにすぎましいいきおいで叩きつけたかのような音が森の中に響く。

トールが神へと一瞬で近づいて右ストレートを顔面の横すれすれの生命の樹の幹に叩き込んだ音だった。

「…」

「…次のヒントだ。宿業しゅくごう」

しばらくの沈黙。その沈黙を相手からの回答と受け取ったトールは拳を再び引いていく。二度目の右ストレートを放つために。

しかし、その拳は神の一言によって止まることとなる。

「…どこまで知ってる？」

「それは…自白と受け取っていいのか？」

トールは神に質問した。それに神は答える。

「うん。自白だよ」

拳が放たれた。グチャツという音とともに神の頭がザクロの実が弾けるように破裂し血の撒き散らす。

鮮血を浴びたサッカーボールがポトリと地面に落ちた。

「自業自得だ。死ね」

「死んではいけないけどね。僕の本体は君達では絶対に届かない所にあるから」

トールの後ろに神が再び姿を現した。先程と全く同じ姿だ。オレンジ色のバンダナを頭に巻いてサッカーボールを持っている。

「…悪趣味な奴だな」

「よく言われるよ。で、どうやって気づいたんだい？ 真実に」  
「じゃあ話してやるよ。てめえが…ルシフェルの味方をしているって  
気づいた経緯をな」

そして、トールは語りだす。隠された衝撃の真実を。  
それを聞いたのは神とトール… たった二人だけなのだが。

サッカーバトルフロンティア

S B F 予選第二十八会場は… 荒れていた。

『ま、またもオウンゴール！ 《ブラックテトラ》、更なる一点を《オー  
ガ》に与えてしまったあ！』

二回目のオウンゴール。得点板が2-0を表示する。

頭にきますよ！ あいつら予言とやらのためならオウンゴールも平  
気ですかよ！

「ふざけんなよ！」

「お前らみたいな奴がS B Fにでるんじゃないよ!!」

「帰れ！」

「ちやんとサッカーしろく？」

ギャラリー達も我慢の限界なのか野次を飛ばしてくる者も現れ始  
めている。

しかし、神縛達、『ブラックテトラ』のメンバーは平静とした態度  
でボールをセンターサークルに置く。

神縛が話していたことを思い出す。

『次の試合は貴方達が2-1で勝ちますから』

あいつらが予言を再現しようとするなら、一点を何とかして取りに  
来るはずだ。

「守りきれれば、予言から逃れられる…」

別に予言など信じてはいないがセシルがあれば動揺するからに

は何かある：はずだ。警戒するべきだろう。

だが：もうひとつ予言を回避する方法がある。

三点目だ。三点目をとれば、2―1の予言からは逃げられる。サッカーは加点方式、減点はない。

ビーツという音とともに試合再開。

神縛がアレクサンダーにボールをパス。するとアレクサンダーはそのボールを自分の胸元辺りの高さまでボールを軽く蹴りあげる。

そして、ボールに両手をかざし：

「ハアッ！」

両手からオレンジ色のエネルギーがボールに注入。ボールはそのまま空中にとどまる。そのボールをアレクサンダーはゴールへ向かって蹴った。

「気合い玉改！」

エネルギー弾がゴールへ向かって一直線に進んでいく。

いきなりのセンターサークルからのシュート。サッカーバトルのコートは実際の試合のコートの大きさよりは小さいがそれでもセンターサークルからゴールまではそこそこ距離がある。

だからこそシュートはないと考えていた。不意をつかれた。

しかもこちらにはキーパーがいない。いつも以上にゴールできる確率は上がっている。

俺とバダツプの間を抜けるボール。

「クリスタルウォール改！」

そこにセシルがシュートブロックをかける。水晶の壁が気合い玉の威力を少しずつ殺していく。

しかし、少しずつその壁に亀裂が入っていく。

そして、ついに均衡が崩れる。

「くっ……きゃあああ！」

砕け散る水晶の壁。しかし、気合い玉のエネルギーの大半がそこに使われたようで、ボールに先程までの威力はない。

そのままボールはエスカバがキャッチする。

『ついに……ついに《ブラックテトラ》のシュート炸裂！ギリギリで止め

たがなんという威力だ!』

つい先程までヤジを飛ばしていたギャラリー達もおおつとどよめく。

…正直驚いた。グラフィアのシュートを防いだセシルのブロック技を吹き飛ばす。並大抵のプレイヤーなら出来ないはず。

「なかなかやりますね。まさか防がれるとは…こちらも本気でいったかいがあります」

神縛が俺に向かってそう言った。

「…なるほどな」

「？」

「お前は予言の能力、ないんだな？」

神縛は表情を変えない。しかし、その瞳は一瞬驚きの色を見せた。

「…」

「お前が本当に未来を見ているなら俺達はもうとっくに失点してる。未来を知ってるならこちらがどうディフェンスするのか手に取るように分かるはずだからな。でも俺達はお前達の攻めを止めれた。予言を行ってんのは兄でお前は大体の予言の内容を聞いてるに過ぎない…そうだろ？」

バダップがブラックテトラのゴールに向かって疾走する。

神縛はそれを横目に見ながら言った。

「…いいんですか？友達が攻めようとしているのに加勢しなくて」

「いくぞーバダップ！」

エスカバが叫んでボールを蹴った。俺はエスカバに向けていた視線を神縛に戻す。

「お前こそいいのか？守りに行かなくて」

「…」

神縛は飛んでいくボールをしばらく見ていたが肩をすくめた。

「その台詞そっくり貴方に返しますよ。見てください。キーパーが緊張してたのか強く蹴りすぎたみたいですね。あれならコート周りのギャラリー達の頭上も余裕で越えますよ。私達のスローインで試合再開です」

俺は神縛の肩越しに相手コートの様子を見る。バダツプはセンターサークルとゴールの中間辺りにいる。

アレクサンダー、古藤の二人、ブラックテトラのディフェンスはボールは外に出るものだと考え足を止めている。

「…やっぱりな」

そう呟いた俺に怪訝な顔をする神縛。

「お前の兄貴に伝えとけ。俺は…いや、俺達は予言に勝ったってな」  
バダツプが跳んだ。

ブラックテトラのメンバーの中でも古藤カズマは特に正解を重視する。

勉強、運動、人間関係の構築、人生…全てのものには完全な正解が存在する。

サッカーにも然り。故に彼はタウクの命令には必ず従う。タウクは絶対の正解。あれは絶対に正解を導く。

だからこそ2-1で負けなければならない…というスタンスで戦わねばならない。

だからこそ、ここは死守…しなければならない。

しかし、キーパーが投げたボールは自陣のゴールすら越えるほどの大オーバー。

アレクサンダーを見る。彼の足は止まっている。このままボールは外に出てこちらボールになると考えているのだろう。

そう。普通の人間ならここで足を止める。外に出たボールを大会スタッフが拾ってこちらに渡す。そのボールをキーパーのグリムが蹴る。それが完全なる正解だ。

…正解の…はずだ。

(何で…何でこんなに胸騒ぎがするんだ?)



自陣まで入り込んでいる選手は一人だけ。仮にボールが落ちてくるとしてもこちらは二人いる。

完全に守れているはず。

その時、風が吹いた。風は自陣から相手のコートへと吹いている。

(もし…)

もし、上空にも同じ向きで風が吹いていたら？

空を飛ぶボールを見る。

そして彼は…

「アレエエエク！」

チームメートのアレクサンダー・デミータの通称を叫ぶ、と同時に相手の選手が空へと跳ぶ。

ボールは…もろに風の影響を受けていた。これでもかというくらいに。

(…あれなら僕達のコートに落ちるじゃないか！)

本来ならボールの中でもそこそこ重量があるサッカーボールがもろに影響を…まあ、多少は風の影響は受けるが…あれほど受けることはない。だが、ボールに逆回転かければボールは風の影響を強く受ける。

さらに逆回転がかかったボールは滞空時間が通常に比べて長い。それを考慮しての完璧なジャンプタイミング。すべては計算されていたのだ。

(あの相手の技は分かっている！空中で放つジャイロ回転の『デススピア』！グリムでは止めるのが難しい！)

こちらにもジャンプしたいところだが相手が先にジャンプした以上、こちらが追い付くことは出来ない。ただし、それは普通にジャンプした場合だ。

「アレエエエク！ホークショットだああああ！俺を投げろおおおお！」

ホークショット。体格の小さい者が体格の大きい選手に投げられることでその反動を利用してボールに一気に近づく。もう相手を止めるにはこれしかなかった。



足元から無数の針がアレクサンダーと古藤を襲う。その針の一本一本の様子は馴染みのあるサッカーボールの様様だった。

クレイモア。ボールをかかとおとして地中に埋め込み。合図とともに無数の針へと変形させる……ドリブル技。

バダツプの狙いは無理矢理シュートを撃つことではなく、確実にデیفエンス二人を除去すること。

もう一度言うがすべては計算されていたのだ。

完全にバダツプがフリーとなる。

「……終わりだ」

ボールを蹴りあげる。そして、空中へ。片足を大きく振り上げる。そして、ボールを挟み、強力な回転をかける。

「デス……スピアーV2!」

ボールは赤黒い一本の槍へと姿を変え、キュイイイインというドリルのような音をたててゴールへ。

「くっ……デスサイズスラッシャー!」

キーパー、グリムの右手が鎌の形をしたどす黒いオーラに包まれる。そして、その鎌は死の槍へと突きつけられる。

ギイイイイイインという互いを削り合う不快な音が会場中に響き渡る。

しかし、冥府の鎌では死の槍には対抗できなかった。パリイイインという音とともに鎌が砕け散る。

デススピアーがゴールに突き刺さる。

予言が崩れた瞬間だった。